八千代文庫
第七十三號

伊賀の水月 誉の助太刀

玉龍斎
貞峰講演

始

特106
746

大正
8. 9. 11
内交

伊賀上野 譽の助太刀……青龍齋貞峰講演

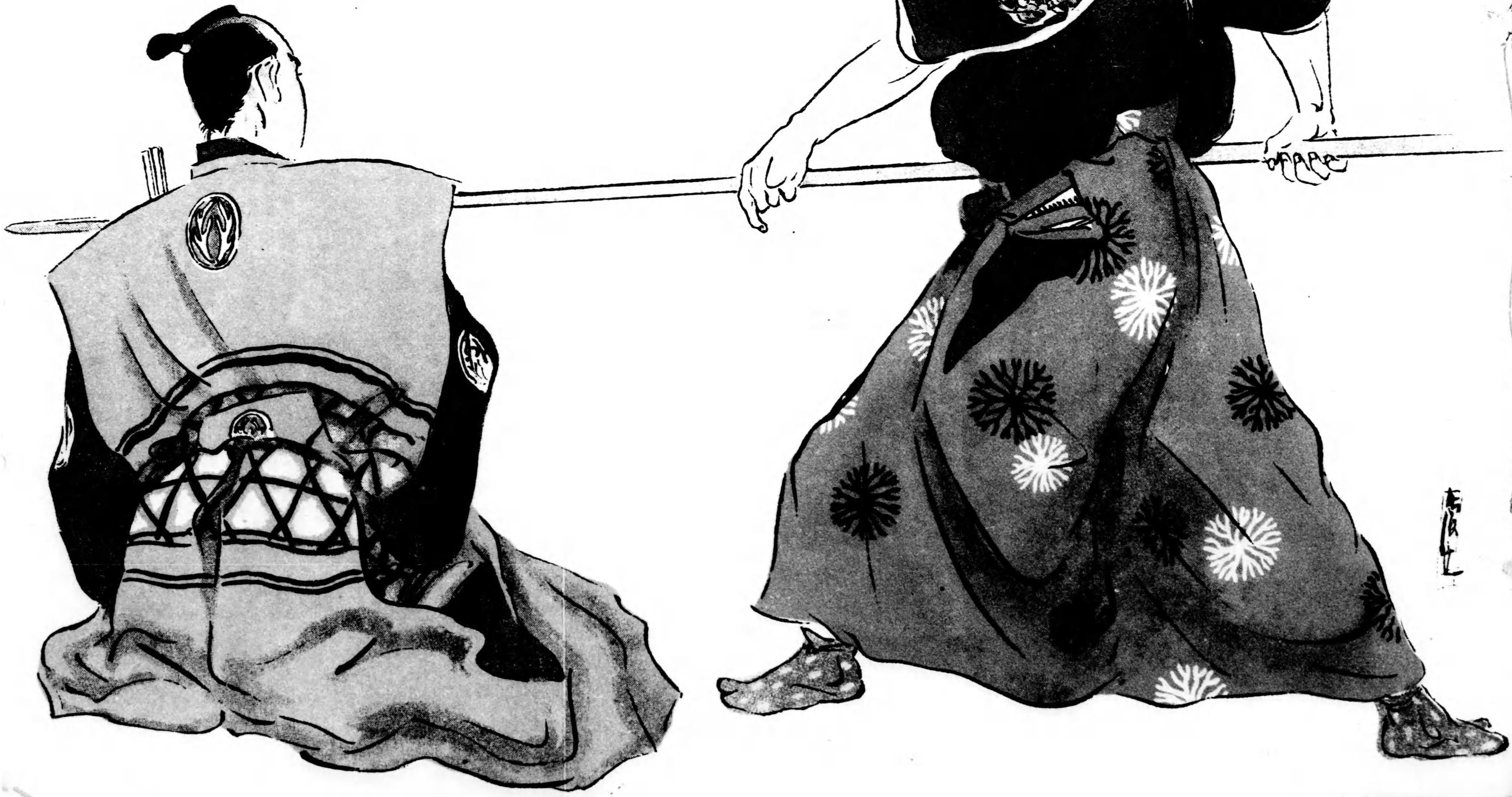
【目次】

一　重兵衛の發狂……一
二　柳生と寶藏院との立合……一六
三　山師劍術だ……二九
四　白翁軒と賭試合……三六
五　渡船場に武士を救ふ……四二
六　靱負と伴れ立江戸への旅……四九
七　五郎兵衛の横死……五四
八　又十郎の修業……六八
九　柳生二蓋笠の試合……八六
一〇　又右衛門の仕官……一〇一
一一　暇を許さぬ正勝公……一一七
一二　大和流弓術との試合……一三三
一三　櫻井兄弟をつけ廻す……一四四
一四　櫻井兄弟の苦心……一五六
一五　竹内玄丹……一七一
一六　廣敎寺堤の暗仕合……一八二
一七　櫻井兄弟の雪隱拔け……二〇〇
一八　眞龍軒との立合……二一三
一九　敵を計略で伊賀越え……二三八
二〇　源右衛門の好意……二四四
二一　仇を持つ主從四人……二五六
二二　上野の町は嚴重な固め……二六一
二三　金傳寺三十六人斬……二七四

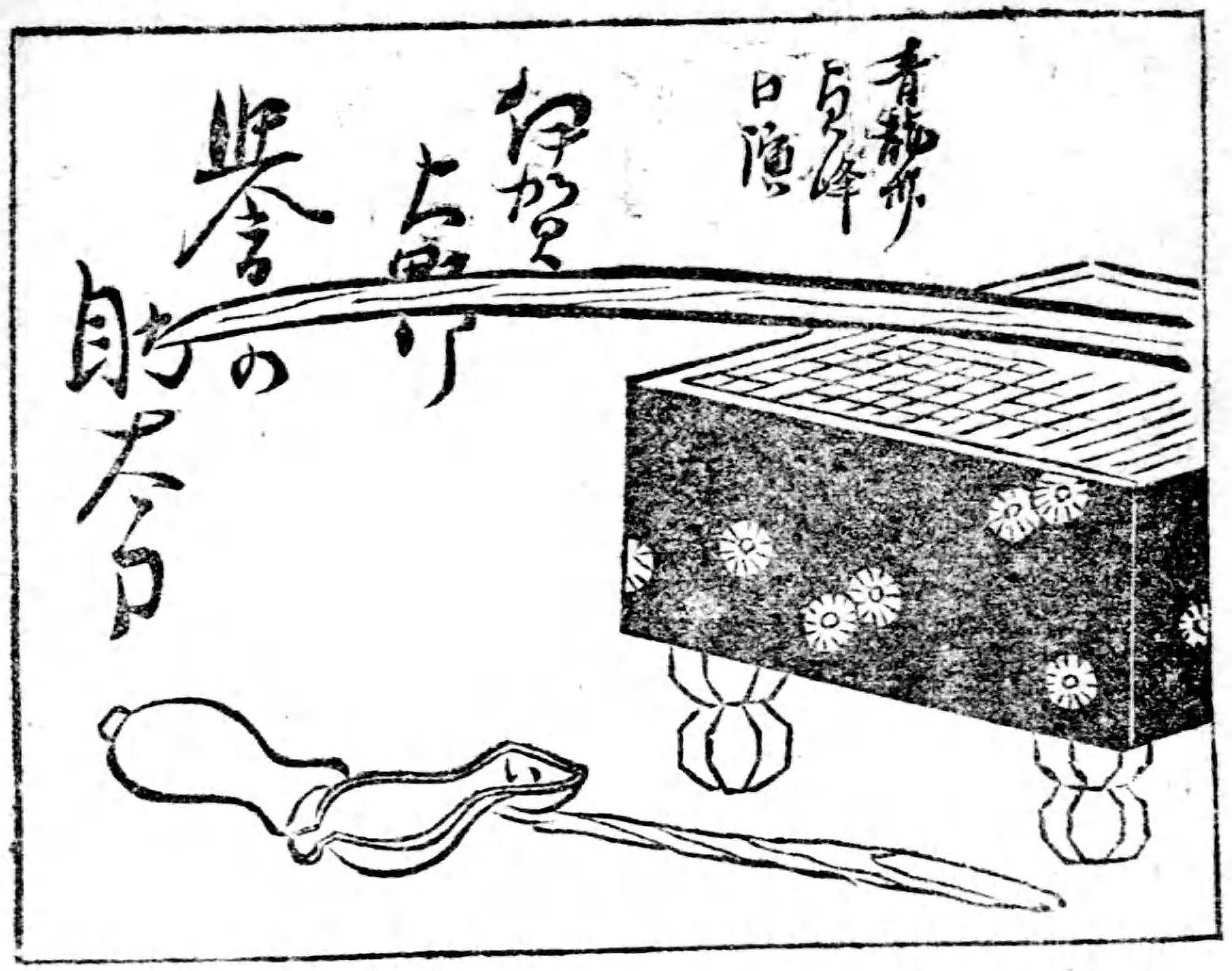
――目次終――

本篇梗概

河井又五郎が一途の短慮から渡邊靱負を殺害して逐天した。其復讐を一子數馬が姉婿荒木又右衛門に頼む。當時又右衛門は柳生流名譽の劔客とて、本多大內記正勝公の指南番として仕へて居た。義によつて數馬に助太刀せんとしたが許され無い、折り柄同藩寶藏院流の槍術を以て仕へたる櫻井甚左衛門、大和流弓術を以て抱えられたる弟甚助を御前試合に於て散々に懲らし、櫻井兄弟の跡を隨ければ必す敵又五郎の在家が知れると考へ、苦心して兄弟と共に江戸に下つた。その內に又五郎には、四谷六方白柄組より星合團四郎外三十五人の選り拔きの武藝者を附け人として肥後の人吉におとさんとしたろ途中、之を伊賀の上野仐傳寺境內に於て遂に仇又五郎を討つて本懷を遂げしめ、又右衛門は師重兵衛より授けられた三池傳太光世の大刀をふろつて三十六人を斬り殺したと云ふ、伊賀の上野又右衛門名譽の助太刀を講演したのであつて、勇壯豪放無類の讀物である。



本多家の極意讓り



本篇主要人物

荒木又右衛門　河合又五郎
渡邊數馬　櫻井甚左衛門
柳生重兵衛　同　嘉助
柳生飛騨守

第一回　重兵衛の發狂

今回講演いたしまする、河合又五郎が渡邊靭負を殺して、其の復讐を靭負の悴數馬が伊賀の上野の鍵屋の辻、淨增寺の門前と申します處にて、四谷六方白柄組の旗本より、河合へ附人にいたしました武藝者、これぞ數馬の爲めには姉婿に當りましたる荒木又右衛門が助力をして、復讐を寬永の十一年十一月の中の十日、復讐を

いたしましたお話しは今日より伺ひます。

徳川三代將軍家光公の御指南役、大和の國添上郡正木坂の一萬石を御領しなされまする柳生但馬守宗矩と仰せられるお方、お子供衆がお三方あらせられまする。御惣領が重兵衞光吉、お次男を刑部殿、三男を又十郎と申上げました。御長男の重兵衞光吉公は柳生流の劍術を最とも能く御使ひになりましたが、父上より上を越す腕前御年二十八歳の時、天下に乃公より上のものはなからうと自慢してお仕舞ひなされましたが、それから、フラ〳〵發狂をなされました。川柳に「サア事だ研屋の亭主氣が違ひ」と云ふ狂句がございますが劍術使の氣の違つたのは、研屋の亭主の氣の違つより、尙事のやうに思ひます。江戸の屋敷で御近臣を一名御手打になされまして內々事濟みにはなりましたが、どうも江戸屋敷へ置くと云ふ譯には往かんと云ふので、終に大和の正木坂へ御送りに相成り、療養を加へることになりましたが、中々發狂は募るばかりで氣狂眼と申しまして眼の色が變つて居ります。湯に這入るではなし、衣類を着換へやうと云ふではなし、身躰は垢だらけ、衣類も穢れましてツタ〳〵に切れて居りますが、そのやうのことは更らに頓着しません、一間の內に着坐いたしまして、只武藝の事ばかりを申して居ります、次に近臣共が控へて居りまして、どうぞ御病氣が一日も早く全快をいたして下されば宜いがと心配をいたして居りますばかり。重「參れ、誰ぞある、參れ。」近「ホー、何ぞ御用でございますか。」重「ア、、半平か。」半「ハ、ア。」重「兩人は戾つたか。」半「何と仰せられます。」重「兩人は戾つたか尋ねるのぢや、曾我の兄弟は參つたか。」半「其は、どう云ふ譯でございますか。」重「分らん奴だな、安元二年神無月赤澤山の獵倉に遠矢に掛つて相果てた、河津三郎祐泰の遺子曾我十郎祐成、弟五郎時致が父の敵を討たんが爲め、我が許へ柳生流の妙手の傳達を受けたいと云つて來た、依つて我が柳生一流の極意を彼に送り遣はしたに依り、首尾能く本懷を遂げたりと聞き及んだ、彼の兄弟は戾つて居るか。」半「ヘイ……。」森島半平驚いて、氣違だから、迂濶した事を云ふより、言葉を合せて居た方が宜からうと思ひましたから、半「曾我兄弟は只今戾りましてございます。」重「ア、、歸つたか宜し〳〵、アレ、半平見ろ〳〵、向ふを見ろ、遁げるは〳〵。」半「何が遁げて參りまする。」重「この重兵衞の腕前に恐れて遁げて參る、後漢の世に桃園に義を結んだる蜀の英雄、漢の山中靖王劉勝の後胤、景帝の玄孫、劉備、玄德、靑龍の關羽、燕人張飛の三名が重兵衞に武藝の試合を申込みたるゆゑに、我柳生流の名手を以て討ち破つたからあの通り遁げて往く、ア

ハヽヽ、どうぢや光吉は剛い者であらうな」 中「ヘイ誠に御尤様驚き入りましたことで」

重「コレ〳〵〳〵。」 中「ヘヽエ。」源九郎判官義經が八島の戰ひに能登守教經に追はれて八艘飛んだと云ふ事を聞く。」 中「ヘイ。」 重「其の義經の八艘飛びに劣らん術を其の方共に見せて遣はすぞ、其方一人ではならんから、次に控へて居る者を此方へ呼べ」 中「委細、承知仕つりました。」半平次に下つて參り、 中「サア、一同參られよ、氣違ひの八艘飛びが始まる。」 ○『ナニ氣違ひに八艘飛びを始められて耐忍るものか、どうか御免を蒙つたが宜いだらう。』 中『イヤ、中々云ふことを聽かない、何でも呼べと云ふから仕方がない、どうか皆な此方へ來て貰ひたい。』 ○「驚いたなアどうも。」「仕方がないと近臣一同集まりそれへ打ち揃つて參り、ズッとこれへ控へて居りました。 重「コレ〳〵鎧兜を此方へ持つて參れ。」 とこれから六具を身に纏ひまして鎧を着るが早いの早くないので目にも止まらん樣子、バタ〳〵身に着て仕舞ひました。鎧を着ることの早いと云ふ彥左衞門から傳はりましたる重兵衞、鎧を着けることの早いこと目にも留らん樣子、スッカリ物の具に身を固めました、

重「薙刀を持てえ。」 中「ヘイ。」と據ろないから家來が薙刀を持つて參りますると、これを毘沙門突にして、 重「どうぢや、其方等の見る所、判官義經と重兵衞とは此方が立派ぢや

中「ヘエ、左樣でございます、義經は昔のことでございますが、先づ〳〵我々の思ひまするところ、君の武者振り、義經に劣らざる御樣子でございます。』 重「ウム、さうか、サアいよ〳〵其の八艘飛にも劣らぬ術を見せて遣はすぞ、ソレ見よ。』と云ふて、右の薙刀を取上げたる事にて、角繩十文字、千人拂ひ、百人留め、木の葉まくりと薙刀の秘術を盡し、石突を以つて疊の緣へ突込み、 重「エッ。」と云ふと疊を天井へ刎ね上げ、その下を搖潜り刎鐵を以て疊を突立て、又た石突を以つて刎退け、ポン〳〵ポン〳〵七八疊疊の下を搔潜り〳〵、廊下に立つて居ります衝立の上にスラリと飛上つて薙刀をばハッタと立て、正面をキッと睨まへ、 重「どうぢや、これにては判官義經の八艘飛に劣らぬ術であらうナ、重兵衞を討たんと爲すとも此の手術では討つ事叶ふまい、それとも討てると思ふものあらば討つて掛れ、此の薙刀を以つて其奴等の首をぶたくるぞ。」森島半平は呆れ返つて、 中「どうだい、御一同實に早業には恐れ入つたナ。』 ○『しかし八艘飛をたび〳〵やられると、惡くすると此方共までその薙刀の御相伴を蒙むるかも知れん困つたものだ。』と一同心配をいたして始終此事を江戸表へ注進いたしますから、父上の御心配一方ならず、將軍の御前へ罷り出でゝも碌々御用さへも手に付きません、今日しも公儀へ登城あつて御用をいたして

居られましたが、お顔の氣色も惡く御心配の折から此れへ來られましたは、品川東海寺の澤庵禪師でございまする。

この澤庵禪師は將軍家悟道の師匠でございまして、老中呼捨の御會釋があつたお方でございます、禪師の御辭世に「借用申す地水火風返濟申す今日たゞいま」とありました、實に悟道を開きましたものであります。　但馬守首を下げ、　但「禪師御機嫌宜しう。」澤「オ、これは但馬であつたか、暫らく會ひません、御手前も何時も無事で宜い。」但「唯々。」澤「但馬お前は何か大層顏の色が宜くない、如何いたした、何か心配事でもありますか。」但「御賢慮恐れ入りました、思内にあれば色外に顯はれるとやら、自然心配が表に現はれたものと見えます。」澤「何の心配ぢやア。」但「左様でございます、手前の悴重兵衛光吉當時發狂仕りましてございます。「これ〳〵斯様なる次第と申上げまするど、澤「それは大に心配ぢやらう、重兵衛は大和へ行つて居るどか。」但「左様でございます。」澤「幾歳ぢやア。」但「二十八歳でございます。」澤「ム、、未だ若いな。」澤庵禪師は衣を搔合せ袖の中で何やらん御勘考の様子でございましたが、澤「ア、但馬心配するな、この病氣は全快いたす、しかし草根木皮の力にては及ばない、人命は大切なるものぢやに因つて、愚僧參つて此の病氣を愈してやらう。」但「それは有難う存じます。」澤「然らば早い方が宜い。」と最早今日は登城をしまひ、これより歸つて直に大和の正木坂へ行つて來よう」と直ぐに東海寺へ御歸りなされました、役僧は、役僧「ハア。」澤「大和の正木坂へ一寸往つて來るから支度をして呉れ。」役「ヘイ。」と御挨拶をいたしましたが、このチョット行つて來るのが一月二月、長くなれば一年位は戻りませんから、又禪師の一寸が始まつたと思ひながら、悉皆り旅の支度をいたしました。鼠木綿の衣類に白の脚絆の手甲に甲掛、草鞋・網代の笠を被り、頭陀袋を頸に掛けて黎の杖を御突きなされ、品川の東海寺を出ましたが、順路大和國添上郡正木坂の柳生の門前へ差掛りまするど、稻穗の丸の定紋を打つた見張がございます、ハ、此所ぢやなアと思つて杖を止めて立つて居ります、番人が、甲「同役不潔な乞食坊主が立つて居ります。」乙「成程……通れ。」澤「苦しうない。」甲「何だつてそんな所に立つて居る。」澤「苦しうないぞ。」甲「其方は苦しくなくつても此方が苦しい、そんな汚ない扮裝をして御陣屋の前へ立つて居ては往かん。」澤「これ〳〵其所に控へて居る小侍用事があるから一寸これへ參れ。」甲「怪しからん奴だ、同役共六尺棒を出してお呉れ……、これ〳〵彼方其方は何だ乞食坊主、こゝは柳生の御陣屋前このやうな扮裝をして立つてはならん、彼方

へ往け。』澤『イヤ、柳生の陣屋前は心得て居る、愚僧は禪家雲水の者ぢや、柳生の悴重兵衛が發狂をいたして居るとの由、禪家悟道徹底の術と重兵衛の柳生流の術と競べんと心得參つたのだ、光吉のもとへこれを取次げ。』甲『オイ〳〵同役一寸來てお呉れ、目の寄る處へは玉が寄つて家の大將は狂人だから矢張こんな狂人坊主がやつて來る……たわけた事を云ふな、左樣な事を殿へ申上げれば、其方は殿樣に殺されて二つない命を落さなければならん、早々こゝを立ち去れ〳〵。』澤『イヤ、苦しうない取次げ〳〵、燕雀何ぞ大鵬の心を知らん、吾胸中は汝等如き小侍には分からん。』甲『己れ怪しからんことを云ふ坊主だ、後にて由ない事をしたと後悔するな、暫らく控へて居れ、御前へ申上げる。』これから重役へ申上げますと、それからそれへと取次、重兵衛殿の御前へ森島半平罷り出で、半『申上げます。』重『何ぢや。』半『只今御陣屋前へ禪家雲水の僧が一人參りまして、柳生の術と禪家徹底の術と競べつこをするから、御前へ取次ぐやう申してまゐりましたが如何計らひまして宜うございますか。』重『何ぢやこの重兵衛光吉に禪家の僧が術を競べんと云つて參つたと、それは容易ならん坊主だ、大方武藏坊辨慶だらう。』半『へ……ヱ。』重『左もなければ狂人だ。』どうも自分が狂人の癖に人のことを狂人だらうなんかと半平も挨拶

に困つた、半『御尤樣でございます。』重『何しろ會つてやらう、此方へ通せ。』半『委細承知仕りました。』それから早速下役へ沙汰をいたしましたから、番人がそれへまゐつて御前が會ひになるから此方へ通れと云ふ、澤『取次げ案内をいたせ。』家『何だ生意氣の坊主だ。』庭前へ案内をいたしまする樣子でございますから、澤『コレ〳〵何處へ連れて參る庭へ案内をするとは無禮だ、客を庭前へ通すと云ふことがあるか、客間に通して鄭重にいたせ。』家『この坊主種々の事を云かすな、こゝへ通れ。』客坐敷へ控へさせて置きました。禪師正面の柱に倚りかゝり、坐禪をいたされ動かざる事泰山の如く魂を臍下に煉り修め眼を閉ぢて控へてお出でなさる、處へ重兵衛光吉長光の鍛へ上げたる大刀を引提げ、禪師が扣へて居ります處へ襖をガラリと明け放されて、重『坊主、禪家雲水の僧とは汝か、柳生重兵衛光吉と術を較べんと罷り越したるは嗚呼ケしき一言、サア余が柳生流の術を汝に見せて遣はすぞ、速かにこゝへ出ろ。』眼を閉ぢて居たる澤庵禪師片眼をお開きなされて、重兵衛の顏を看詰てお出でなされましたが、小僧餘程違つて居る樣子ぢやなと思召す、此方へ控へて居ります家來は何樣成行くことかと心得まして、甲『今日は術比べではございません、熱較べでござるナア。』乙『左樣〳〵何でもどつちか熱の強い方が勝ちませう、家の

親玉も随分熱が强いがこの坊主もなか〳〵熱が强いと見えます。』と噂をして居る、澤『コリヤ、重兵衞。』家『ソラ始まつたノ。』澤『其方は柳生流の名人なり、天下に並びなきものと慢心いたして、天下の廣大なる事を知らず、汝どれ程の腕前あつて天下の名人と慢心するか。』重『されば日本六十餘州往來をいたするに、この重兵衞の手に當る者一人もない、ゆゑに天下の名人と申したり。』澤『アハヽヽ、日本は只六拾餘州の小國、それを回りたりと雖ども、汝名人と誇るは誠の小人なり、吾は日本を廻り、唐山四百餘州廻り、各國其他見てあれば地獄極樂へも行かんずと心得て居る、汝自から天下の名人と心得るか知らんが、吾が目から見る時は犬打つ童子、三歳の小兒と心得るぞ。』重『默まれ余を小兒と申したるナ、斯く云ふ重兵衞光吉の上を越すものは、天下恐くは一人もあるまい。』澤『アハ、ヽ、去らば其方に尋ねるが、もし敵四方より打つて參つて來た時は如何いたしてこれを拂ふや。』重『去れば其時は柳生流の一手、眞劍白刄を以つてこれを防がん。』澤『デモ重兵衞は天下の名人か、しかし天下の人は宏大なり、是れに倍して八人掛つたら如何いたす。』重『その時は眞劍片眼外の一手を以つてこれを拂ふ。』澤『デモ重兵衞は天下の名人か、しかし天下は宏大なり、これに倍して十六人掛つた時は如何いたす。』重『さればその時には

眞劍木隱の一手を以つてこれに當らん。』澤『デモ重兵衞は天下の名人か、しかし天下は宏大なり是に倍して三十二人掛つたら如何いたす。』重『其の時は木葉ヤクリの一手を以つてこれを防がん。』澤『デモ重兵衞は天下の名人か、しかし天下は宏大なり、これに倍して六十四人掛つたら如何いたす。』重『その時は松風の死力を以つてこれを拂はん。』澤『デモ重兵衞は天下の名人か、しかし天下は宏大なり、これに倍して百二十八人掛つたら如何いたす。』重『坊主何處までも追駈けやがる、去る時には刀の目釘の續かん限り、骨を碎くまで切つて〳〵切拂ひ、叶はぬときは切死を遂ぐるなり。』澤『アハヽヽ、それこそ汝は人なり纔百二十八人にてその身躰を自由にいたす事ならず、切死いたすとは眞の不覺、愚僧は劍を持たずと雖ども一つの術を施す時、假令百萬人向ひ來るとも我れ掌の中にころ〳〵と丸めて向ふへポント投げて吞んで仕舞ふ。此方に扣へて居りました一同が、○『ヤア、坊主の方が熱が强い。』重『己れ口が横に裂けれる儘恣いまゝの慢言を發する、然らば其身の武道を經驗さんに因つて得物は貸與へるから、この重兵衞に打つて參れ。』澤『ヤイ〳〵竹刀木刀を持つて打參らずとも三寸不爛の舌にて澤山なり、只今汝に書いて遣はすものがある汝柳生流の術を得て其の奥義を極めて居るならばこの歌の心を解いて見よ。』と筆を取つて

白紙へスラ〳〵とお書きなされた「たゝずむな行くな戻るな埋まるな勝つな敗けるな知るも知らぬも」と云ふ歌でございます、これは禪家の歌でございまして「やみの夜に啼かぬからすの聲聞けば生れぬ先の父ぞ戀しき」「世の中に雪より黑き者はなし火より冷めたきものもなければ」など云ふもこれ禪の悟の歌でございます、その彳むな行くな戻るな埋まるな勝つな負けるな知るも知らぬもと云ふ歌を重

兵衛公の前へスッと出ださる、光吉これを取上げ、重『たゝずむな行くな戻るな埋まるな勝つな負けるな知るも知らぬも。』と繰返し〳〵お詠みなされたがどうも解せません、重『暫らくそれへ控へて居れ……、坊主逃すな。』と仰しやつて奥へお這入りなされから一同が、○『サア、親玉さう〳〵熱に負けて引籠んでお仕舞ひなすつた、しかし坊主を逃すなと仰しやッたから逃してはならん……、これ坊主歸る事はならんぞ。』『其方が歸れと云つても歸らん、ア、空腹になつた飯を食はして吳れ。』○『この坊主飯の催促だ、精進だらう出家だから。』澤『否や精進は淸よく勸めると云ふからわざ〳〵拵へるが面倒と思ふと精進にならんから心能く進めて吳れゝば何でも食ふ、魚でも鳥でも豚でも野猪でも何でもやらかす、○『調法な坊主があつたものだ、そんなら。』と云つてそこへ膳を出しました、此方は重兵衛一間にお入りなされ、机の上に歌を置いて「たゝずむな行くな戻るな埋まるな勝つな負けるな知るも知らぬも」たゝずむな行くな戻るな埋まるな勝つな負けるな知るも知らぬもと繰返し考へて御出でなさいます、家來が心配をいたしてそれへ參ると。』重『其方共がこれへ參ると氣が散つて歌の心を解くことが出來ん、這入らんやうにいたせ。』○『御飯は如何遊ばします。』重『握飯にいたしてこれへ持つて來い。』と重兵衛公握飯を召

上つて寐る目も寐ずに腕を組んで考へてお出なされたが、實に狂人に利く藥はない、去れば精神病院へ行つても藥を吞まして只心の靜まるやうに閑靜なる處へ置きますさうでございますさうで、そこで重兵衛公何事も忘れて仕舞ひ、只此歌の心を解かねば、己れの恥辱のみならず、父但馬守の面目にも關はると、發狂いたしながら心付きましたから一心にこの歌を解かうと思ふて、それへ氣を奪はれてお仕舞ひなすつて餘の事は思はず、氣を鎮めてお出でなさるから、自から魂が臍下に修つて參つて、無我無念に御勘考遊ばしてお出なさる中に、フラリと原の心にお復しなされて、御自分の姿を見ると、イヤ、モウ衣類も何もズタ〳〵でございます、重「誰か參れ。」○「ハ、ア。」重「誰ぢや。」○「森島半平でございます。」重「ア、半平か、こゝは何處ぢや。」半「此の處は大和の正木坂でございます。」重「ア、重兵衛何時こゝへ參つたか。」半「去年でございました。」重「余はどうかいたして居つたか。」半「恐れながら御亂心遊ばされてお出でなされました。」重「何……發狂いたして。」半「ヘイ。」重「誠に面目次第もない夢のやうに心得て居るが、二三日前に禪家の僧が一人御入來はないか。」半「ヘイ、御前が留め置けと云ふ御意でございますから、今まで留置いてございます。」重「それこそ適れ名僧・予が狂氣の愈りしも其御方のお陰、御目

通りをいたし御禮を申上げなければいかん服を改めて。」とこれから衣服をお着換へになり家來を引連れ重兵衛公澤庵禪師のお控へなされた一間へ通り、兩手を支いて低頭平身をなす。禪師御覽あそばされ、澤「病氣全快をいたしたと見えるな。」重「貴僧のお陰を以つて重兵衛病氣快愈仕つりました、願はくは尊名を伺ひたう存じます。」澤「狂氣中は名乘れんが、全快をいたしたからは名乘るも苦しうない、愚僧は品川東海寺の澤庵と申す。」重兵衛殿思はず後へすらりと飛び下り、平目魚のやうになつて低頭平身いたすと、御家來は鰈のやうになつてベツタリ低頭をいたした。後で一同、甲「どうも某は只の坊主でもないと思つた、何んでも名僧に違ひないと思つて居た。」乙「近藤虛言を吐け、お手前が始め乞食坊主などゝ云つたのではないか。」甲「左樣かのう、しかしどうやら一見した處が違ふ處があると思つたが、しかし澤庵程ではなからうと思つた、淺漬位の坊さんに心得て居つた。」淺漬位の坊さんと云ふものがある譯ではございません、重「どうか此處へ暫時お泊りを願ひたう存じます。」澤「否や〳〵汝の病氣全癒をいたせば、早く江戸表へ立戻つて、父の但馬にも物語り悦ばするが何よりの事、これにて別れを告げる。」と、其の儘にお別れになつて江戸表へお歸りがあつて、直樣此事を但馬に申す、宗矩は悦び一方ならず、最早重兵衛を

江戸表へ招き返して御指南番跡役を申付け、家督を相續いたさせんと云ふのを、重「一旦手前發狂いたしたるもので、御指南番後役を仰せ付けられては何か日本に人なきに似て各國へ聞えても物笑ひにも相成らう、何卒御免を蒙り私隱居をいたしたうございます、何卒弟に家督を御譲り下さるやうに未だ武藝がこれでは足らんに因つて今一修業いたしたうございます。」とこれから光吉いよ／＼武術を修業なし、適れ名士となり、後に大和の正木坂にお歸りに相成り、奈良へお出になつて南都の寶藏院へ乘り込みになる、伊賀の國阿部郡愛宕村の豪家荒木彦太夫の忰丑之助を後に又右衞門と云ふ、これより荒木又右衞門の傳に移ります。

第二回　柳生と寶藏院との立合

さても柳生重兵衞光吉は一度發狂をいたされましたが、全癒をいたしてより將軍家の御指南番跡役を命せられしところ、重「假令全快をいたしたりとも、拙者一度發狂をいたしたる者でございます、然るに天下の御指南番跡役を仰せ付けられては、日本に何か武藝者のないやうに、異國へ聞え物笑ひにも相成りませうから、手前御免を蒙ります。」と辭退をいたしました。而して未だ我が腕前の足らん所あるに依り、今一修業をいたさんと父但馬守より暇を貰ひ、これより重兵衞公は日本六十餘州を武者修業に出でられまして、國々を遍歷いたし、あるとあらゆる武藝者と立合をいたしましたが、さても光吉公の腕前勝れてか何れに行きても十中の八九皆勝を得られ、足掛五年を過ぎ、これから大和正木坂へお歸りの序、奈良の寶藏院覺傳坊因心といふ槍術の先生がございました。前名を覺善坊と申したさうで、五尺柄の槍を使ひまする人、まだこの寶藏院の槍術を見ませんによつて、これへ他流仕合を申込まうといふ思召で奈良を差して參りましたが、奈良へ這入らうといふ並木の茶見世へ腰打掛け・旅の勞れを休めて居ります。茶見世の爺さん澁茶を汲んでそれへ持つて參り、爺「ヘエお客さんお茶をお上んなさい。」重「親爺よ。」爺「ハイ。」重「誠に此所は佳い景色だナ。」爺「ハイ、此所は見晴らしは誠に宜うございまする。」重「アノ向ふに見ゆるはあれは奈良か。」爺「ハイあれは奈良の町でございます。」重「アーさうか。」爺「モシ旦那樣へ、貴所はお見受申した處が武術の御修業の御樣子でございますが……………。

重「ウム身共も修業者と見たか。」爺「ハイ何修業をなさいます、劍術でございますか柔術でございますか、それとも槍術で入らつしやいますか。」重「乃公は劍術だ。」爺「ハアさう

でございますか。』重「親爺此の奈良に寶藏院と申する槍術者が居るさうだが、道場は何れだか心得て居るか。』爺「モシ旦那、私の前だから宜うございますが、此の奈良の町へお出でなすつて、寶藏院など〵呼捨にさつしやると大きな間違ひが起ります。奈良の町では侍は勿論のこと、町人百姓でも寶藏院様の槍を習はなければ馬鹿だ愚鈍だと人が云ふ位、寶藏院様〳〵と皆様附でございます、お前さんは寶藏院と呼捨にさつしやるが、奈良の町の者が聞いて居ると怒つてお前さんを毆りまする、私の前だから宜うございますが、町へ往つてそんな大柄の事を云はつしやるな。「光吉公心中に成程因心といふ者は誠の人望家と見えると思召しましたが、重「それは大きに失禮な事を申した、然らばその寶藏院様の御道場は何れぢや。』爺「ハイこれは町から少々在方の方へ引込んで居まする、お前さんがこれから尋ねさつしやるなら、寶藏院様をお尋ねならんでも、奈良の町に大坂屋源左衛門といふ旅籠屋がございます。其處の旦那は寶藏院様の御弟子で、槍を中々宜く使ひなさる、裏に道場を造らへて門人を取立つて居なさる、多くの劍術使が其處へ往つて立會ひます、お前さんも其處へ往つて大坂屋の旦那と一本立會ひなさいまし、只泊めて呉れて明日になると草鞋錢を二百位は屹度呉れませう、德用だからさうしなさい、奈良の町へ往つて大坂屋源左衛門と尋ねると直に解ります、其處へ行かつしやる方が宜うございます。』重「左様か、然らば其處へ參らう、大きに厄介になつた、親爺これは菓子を食べた鳥目だ、これは茶代だ。』爺「オ、菓子の錢は貰うが茶代は入りません、茶代などは入らん、菓子を食べて呉れ〵ば菓子でいくらか儲かつて居るから茶代は入らない。』重「さう云はずとそれは志しだからどうぞ取つて置いて呉れ。』爺「然うでございますか、それぢやアお貰ひ申して置きませう、武藝者など〵いふ者は錢がない癖に年が若いと見得をしたがつて往かねえ、なけなしの錢を私に茶代に呉れては誠に氣の毒だねえ。』重兵衛公驚ろいた、苛い惡口を聞く爺と思ひ、これから傾げの荷物を肩に掛け、茶見世を出で奈良に參つて大坂屋源左衛門と尋ねると直に解りました。重「ハ、ア此所ぢや……………免せ。』女「入らつしやいまし。』重「當家は大坂屋源左衛門と申するか。』女「ハイ。』重「一夜厄介になるぞ。』女「ハイ。』重「洗ぎの湯を持つて來い。』女「ハイ。』と女中が盥へ温んだる湯を汲んで參りました。重兵衛公ドツカリと昇り端へ腰をお掛けなされて、重「コレ〳〵女、身が草鞋の紐を解け。』女「ハイ。』重「さうして足を洗へ。』女はこんな大風な客の來たのは初めだと思ひながら重兵衛公の足を洗ひます。大坂屋源左衛門は帳場格子の中でやに下りに煙草をプカリ〳〵喫みながら、

これを見て居りましたが、源『この野郎寶藏院流の槍の名人、大坂屋源左衛門の家を知つて泊つたか知らずに泊つたか、乃公の家の女に足まで洗はせるとは怪しからん事、見れば武藝者のやうだ、今に一番驚ろかして呉れう。』と眺めに見て居ります中に、重兵衛公足を洗つて昇りました。女は荷物を提げて、女『旦那何れの御坐敷へお通し申して宜うございますか。』源『例ものセンの字の坐敷へ通して置け。』旅籠屋の符丁でセンの字の座敷といふは汚ない座敷の事をいふのださうで、女『ハイ。』女中が先に立つて通したは四疊半ばかりの破疊が敷いてある天井も張つてございません、家根裏が見えて梁に煤や蜘蛛の巣が引掛つて、風が吹く度に蜘蛛が宙乗をして居ります、障子は去ながら破れほうだい、向ふの壁には樂書、合相傘にへゝのゝもへじ抔といふ物が書いてあります。どうも實に怪しからん座敷へ通したと思召しました、ドッカリ着座いたした處が煙草盆とお茶を持つて參りました。重『コレ女』女『ハイ。』重『當家の主人大坂屋源左衛門に對面をいたしたい一寸源左衛門をこれへ呼べ。』女『ハイ只今……旦那樣、恐ろしい大仰の客でございます、貴所も店先で見てお在なさいましたらうが、私に足を洗はせ、あの座敷へ通すといふと、ジロ〳〵座敷を見て居りましたが、コレ〳〵女、當家の主人源左衛門を呼べ、源左衛門を呼べ〳〵、源左衛門〳〵と源左衛門を賣りに來たやうに呼び附けに云つて居ります。』源『乃公も先刻から癪に障つて耐らねえ、よし乃公が往つて挨拶をしてやらう。』と帳場格子から出て、源左衛門其の座敷へ參りました。源『エ、御免下さい、手前は當家の主人大坂屋源左衛門で、御用の趣きでございますか。』重『ア、お前が源左衛門か、先づ此方へお出なさい貴公は寶藏院の門人で、槍術を勉強いたされて道場を開いて居られるといふことゆゑ、わざ〳〵是まで參つた、身共は武藏修業の者だ。』源『左樣でございませう、最前一寸御見受申した時にも確かに武術修業と見て居りましたが、何を以て御修業をなされます。』重『眞影流を學ぶ。』源『ハヽア劍術でございますか。』重『されば。』源『何れを御修業なされました。』重『西國三十三ケ國は悉とく廻つて參つた。』源『ハヽアまだお若い御樣子だが、能く御修業をなさる、骨を折つてなさいまし、末にはものに成るでありませう。』重兵衛公この野郎失敬の語を吐く奴だ、骨を折つて見なさい、末にはものになるでありませうと、馬鹿がボヤ〳〵でも見附けたやうな事を云つて居るとお思ひなされて、重『手前は至つて未熟でござるが、武藝熱心で諸所遍歷をいたし、貴殿の尊名も心得てお尋ね申したが、貴殿は國々を御修業なすつた事がござるか。』源『イヤそれはございません、私も旅籠渡世をいた

して居りますが、實は誠に嗜で寶藏院の門に入つて修業を仕りましたが、免しを受けて道場を開いて居ります、去れば武藝者がまた他流仕合に參りますから、それとは立合ひました事がございますが、國々を廻つた事かございません。」重「ア、左樣か名人上手にお出合ひなすつた事もございますか、面白いお話もござらば伺ひたうございます。」源「さて天下廣しと雖ども名人上手と名の附いた者は少ない者でございます。」重「ハ、ア左樣かな。」

源「ハイ劍術使と嗚呼がましい事を申するが、劍術使といふ者は餘りない者で、劍振棒振野郎ばかりで手前はこれまで天下の名人に出遇つた事はございません。」重「左樣か、先づ當時武藝では誰を指して名人と云ひませうな。」源「左樣、槍術では手前の師匠の寶藏院でございませう。」重「尤も千萬、劍術では誰でござる。」源「備中飯山の羽賀維心齋、越前敦賀富吉の伊東一刀齋、是らが名人でございます。」重「尤もなる一言、これは名人の奥を越えて居らるべし、其他は如何。」源「其他は所謂十把一束、劍振棒振連中が多うございます。其中に大和正木坂の柳生の忰重兵衛といふ者は一寸腕が肥えて居ります。」重「ハア貴公重兵衛を御存じかえ。」源「エ、存じて居りやす。」重兵衛公此の野郎初めて遇つた奴だが恐ろしい法螺を吹く奴と思召し、重「何日重兵衛に出合はれし事がござるな。」源「左樣今を距る三ケ年以前に手前の許へ參り他流仕合をいたした事がござつた。」重「ハア勝負は何うでありました。」源「エ、互格でありました。」重「ハア勝負は互格、それきり會はれぬか。」源「エ、時折文通がございます、先方からも手前の許へ便りをいたします。」重「重兵衛只今何れに居られるか。」源「矢張り大和の正木坂に居られる、手前兄弟同樣にいたして居ります。」重「ウム全くかえ。」源「ハイ。」重「ハテナ不思議な事があればあるもので、柳生重兵衛は五ケ年以前に出でゝ今日これへ初めて參つたが外に重兵衛といふ者があるかえ

源「ヘツ。」重「イヤサ手前は柳生但馬守の總領重兵衛光吉だが、お前は外に柳生重兵衛といふ者に遇つたか。」重「ヘエ、貴樣は柳生の若殿樣……重兵衛樣で。」重「されば、柳生重兵衛は身だがこれを見よ。」と無地の御羽織を脱ぐと下には稻穗に丸の御定紋の五ツ所ついて居りますお召でございます。」大坂屋源左衛門驚ろいて跡へ飛退りハッとばかり低頭平身して居ります。 源「これは〳〵柳生の若殿樣とは心得ず、誠に失禮なる事を申し、且僞りを申しまして相濟みません、どうか御勘辨を……コレ誰がこんな汚ない座敷へ柳生の若殿樣をお通し申したのだ、何故上段の間へお通し申さない、わざ〳〵大坂屋源左衛門の許へお尋ね下されたのだ これと申すも源左衛門の槍術が天下に知れ渡つたからだ。」また

天狗を申して居ります。』源「上段の間へ早くお通し申せ、ナニ客が居る、誰が居る、甲州の商人の座敷になつてる、構はない、そんな奴は追拂つて仕舞へ……宜いか、ちやアどうか此方へお通りを願ひます。』重「イヤ源左衞門、お前のやうにさう手厚うして呉れると却つて私は居惡い、上段の奇麗のところへ通つても誠に益ない、この座敷で構はん、どうか構はんで呉れ、却つてアノ蜘蛛の巣が宙乘をして居るところが、誠に風雅で結構ぢや、どうかこれへ置いて呉れ。』源「誠に面目次第もございません、どうぞ此方へお通りを願ひます。』強つてと云ふから、重「然らば言葉に應じませう。』とこれより上段の間へお通りに相成りますと、直に煉羊羹などを切つて持つて參りました、其の扱ひも俄かに變つて叮嚀にいたしますから、重兵衞公、源左衞門といふ者は恐ろしい正直の奴だと思召し、重「さて源左衞門、今日お前の處を尋ねたは、どうか寶藏院に對面いたしたく心得て、先づ貴公の許へ先に參つた、師匠は何れに道場を出して居るか、この町より少々在方の方へ寄ると聞いたが、遠方か。』源「イヱさのみ遠方でもございませんが、幸ひ今日師が手前元へ用事をかねて見えまする約束でございます、モウ程なう參りませう、師が參れば御目通り仰せ付けらるゝやう早速に申しまする。』重「左樣か、然らば參られたらば、どうか一寸沙汰を

いたして呉れるやう。』源「委細畏まりました。』と猶浮世の話を二ツ三ツいたして居りますところへ表より這入つて參りましたは、雲突くやうな大きな坊主、年の頃十五六にもならうかといふ、前髮だちの若年者一人を供にして參りました。寶「許せよ。』源「これは入らつしやいまし、先づ此方へお通りを願ひます。』大坂屋源左衞門師匠を一室へ通しまして、

源「さて大先生大和正木坂の柳生但馬守の息男重兵衞公が手前許へお越しになり、師に一面をいたしたいとの事でございます。』寶「それは〳〵折柄の事、どうぞ御目通りをいたしたい、宜しく取次で貰ひたい。』これから源左衞門重兵衞公の座敷へ參つて、源「エ、申上げます、只今師匠寶藏院罷り越し申してございます。』重「左樣か、どうぞ直ぐと此方へ通して呉れるやうに。』源「委細承知仕りました。』源左衞門案内をいたして奧の一室へ師を通しました、上段には重兵衞光吉公褥の上に着座をいたして居られますと、次の間より寶藏院兩手を仕いて、寶「ヘエッ。』と低頭平身をいたしました、これを見て重兵衞公、重「これは〳〵寶藏院殿宜うこそ御出であつた、サア〳〵これへどうかお出でを願ひたい、それでは御挨拶が出來ん、最早重兵衞隱居の身で世捨人でござる、御叮嚀なる御挨拶では痛み入る、どうぞ此方へお出でを願ひたうございます。』寶「御免を蒙りまする。』と寶藏院は

上段の座敷へ這入ると供をいたして參つたる若者は、次の間に兩手を仕いて居ります、大坂屋源左衞門は上段の間へ師匠と共に這入つて參ると重兵衞公これを見て、重「コレ源左衞門、師の蔭は七尺去つて履ます、其方は師匠と同席は恐れあり、其方へ退れ。」源左衞門乃公の家でも這入る事は出來ないかと思ひながら、次の間へ出て同じく兩手を仕いて居る

重「さて寶藏院初めて遇ひまするが重兵衞でござる、貴僧の御高名は雷の轟くが如く存じ居りまするが、折惡しく未だ寶藏院流の槍術を拜見仕らん、今日は是非一手御對手申したい。どうか御承引下さるやうに。」寶「恐れ入りたる御言葉、委細承引を仕つりました御對手を仕つりませう、嘸御道中御勞れも之れあらんと心得まするに依り、今日はゆる〳〵と御休息を遊ばされ、明早朝手前許より御迎へを差上げまするに付いて、汚苦しうはございますが、手前道場へ御尊來のほどを願ひます。」重「イヤ〳〵武藝は固より戰場で必要のものだ、疲勞たから待つて呉れろと云つても敵は承知いたすまい、今日御出合申したるこそ幸ひ、どうか一手御對手を願ひたい。」寶「左樣なれば源左衞門の道場も明いて居りまするゆゑ、この場に於てお對手を仕つりませう、源左衞門道場に用意をいたせ。」源「畏こまりました。」と大坂屋源左衞門、これから道場へ參つて用意をいたす、打てば轟くで此事奈

良の町一躰の者に聞えましたから、何れも集り來り、武者窓につかまつて見物いたして居ります。其中に重兵衞、寶藏院、大阪屋源左衞門と寶藏院の供をいたして參りました若年者と、以上四名道場へ出で、重兵衞公襷鉢卷、股立取上げ身仕度に及ぶ、寶藏院も同じく身支度をいたす、重兵衞公一尺二寸ばかりの鐵扇、親骨に「降る度につもられ先に拂へかし雪には折れぬ青柳の枝」といたしてあります。重 寶藏院殿手前は何れへ參つて試合ひまするにもこの鐵扇でござる、左樣御承知を願ひます。」寶「御念の入りました御言葉。」寶藏院は五尺柄のタンポの附た鎌槍を取上げ、りう〳〵と引きしごいて、寶「エイ、ヤッ。」と突來る有樣、肌へ撓まず眼まぢろます、突込んで來る處毛ほどの透もございません其のタンポの先へ柳生流の一手を以て打込み、エイヤッ〳〵と双方聲を掛けて居ります、その中に寶藏院、寶「エイ。」と一聲叫んで突出す槍、光吉躰をかはし空を突かせて手許へ躍り込んで來る、槍は三分突立七分突損じたるに依つて手許へ引いて再び突出だす槍 鐵扇を以てポンと刎退け、第三番目に胸板をねらつて突込んだるをば、躰を陰に落したるを以つて、槍は肩先の處を外れて空を突いたるによりて、光吉公エイと一聲槍の手許へ打込んだから流石の寶藏院持つて居ります鎗をばハタと取り落す、光吉公其儘飛掛らんとなし

たる時、後へ退つて寶藏院兩手を仕へ、寶「恐れ入りました。」と打たれぬ先に聲を掛けました。『ドッ』と表で聲を揚げる、時に光吉公その手を休め、重「ア、寶藏院殿手前も數多槍術者に出遇ひましたが、貴公のやうなる名人に出遇つたことはござらん、今日は重兵衞怪我勝をいたした、寶「誠に在難い仕合せでございます。」寶藏院席を下る、重兵衞公、

重「コレ源左衞門、三ケ年以前互角に立合つたと其方申したが、其方の腕前を見たい、一ツ立合へ。」源「どういたしまして、どうか御勘辨を。」重「さう云はずに出ろ。」源「どうか御免蒙ります、どうぞ御勘辨を……。」「武者窓の下に見物して居る者が、○「旦那御勘辨も赤ンべいもないから出なさい、例もお前樣は自慢をして、天下に乃公に並ぶ者はない、柳生重兵衞などは小指の先で三番叟を躍らせると云つたぢやアないか、やレ出ろソレ出ろと吐鳴られて源左衞門堪らなくなりつひ〳〵道場の外へ飛出して仕舞つた、重兵衞公お笑ひ遊ばし、重「先つ此方へ。」とこれから道場を出て先の一室へ通り、酒肴を取寄せ頻りに酒宴を催はされたる時に光吉公寶藏院に向ひ、重「さて寶藏院、最前お身の供いたして參つたる若年者、あれはお身の門人か。」寶「左樣でございます、伊賀國阿部郡愛宕村の郷士荒木彥太夫の悴丑之助と申す者でございます。」重「誠に逞ましい若者、光吉これをば申受けて武藝をば覺えさせて見たいが、手前に下さらんか。」寶「それは當人の身に取り有難き御言葉、何分宜しく御願申します。」と快よく承引をいたしましたから、丑之助を貰ひ受けてこれより大和國正木坂へお歸りに相成り、門弟一萬三千六百八十四名をお取立になり、其の中に右丑之助は天地人三才の極意を極はめたる荒木又右衞門源義村と改名、これより又右衞門修業のお話しに相成ります。

第三回　山師劔術だ

引續き伊賀の仇討の講談を辯じ上げます、大和國正木坂に於て柳生重兵衞光吉公、門人を一萬三千六百八十四名御取立に相成りました。人多き人の中にも人ぞなき、さて是ほど門人を取立てましたるが光吉公の御目鏡に叶ひましたるものは伊賀國安部郡荒木村の郷士荒木彥太夫の悴丑之助氏より外にはございません。されば光吉公この丑之助に天地人三卷柳生流の極意を授け、三池の傳太光代の鍛えた一刀に忠吉の小劍を添へ、これに南蠻鐵一尺二寸の鐵扇、親骨に金の象眼にて「鳴瀧の夜のあらしに碎かれて散る玉ごとに月ぞ宿れる」といたしてあります。此の三品を丑之助に下されまして、重「其方は此大和や伊賀の

邊土に居るべきものでない、江戸京大坂三都に參り、武藝修行をいたして若し大名より召抱へると申して參つても、必らず五百石以下にて主取りをいたすな、此の義は屹度申置くとの御言葉、丑之助厚く禮を述べて師の許を暇をいたしました。尤も此時丑之助は荒木又右衛門源義村と改名をいたしましたのです、さて一度伊賀の荒木村へ戻り、己れの家は金滿家でございますから、蓄金も澤山用意をして旅の支度をいたし、坂地へ出向いて參りましたが、大坂の中の島と申しまする處に、緣家糸屋七五郎といふ者があります、この處へ先づ足を留め、此の糸屋が萬事盡力して堂島へ道場を拵らへまして、表へ「柳生流劔師荒木又右衛門源義村道場、他流仕合勝手たるべき者なり」といふ看板を出しました。飯焚の善吉と云ふ男を一人抱へて主從二人、これから門人を取立てやうと思ひましてございます。さて大坂といふ處は派手やかの事を好みません、又右衛門が道場を開いたのをれは山師劍術だ、山師だと人が信用をいたしませんから門人が一人もございません、又右衛門は朝から晩まで酒ばかり飮んで居る、又『善吉。』善『ヘエ。』又『何故門人が參らんのであらうナ。』善『左樣でございます、どういふ譯で來ませんのでございますか。』又『どうか門人の來る工風はあるまいかの。』善『さうでございますナ、何か宜い工風がありさうなものでございます、先生晉師に宜い御工風がございませうが。』又『俺はない、其方何うだ』善『左樣でございます、私の工風は道場へ大きな磁石を拵へて往來を通る人の目玉へ鐵の粉をふり掛けて、人間を道場へ吸ひ込ませるやうな譯にしたいと思ひます。』又『曒けた事をいふな、そんな事は出來ん、時に善吉道場といふ者は竹刀の音がいたして居らんと自づから門弟も來ないものだ。』善『成程講釋なればポン〳〵張扇の音がいたして居りませんとお客が這入りません、道場に竹刀の音がいたさんと門人が來ないさうでございます。』又『ダガ門人が來なくツて竹刀の音をさせる譯に徃かん、これから其方に劍術を敎へてやるから道場へ參れ。』善『ヘエ、私でございますか、私は止しませう。』又『さう云はずに道場へ來い。』善『イヱ止します、私は劍術遣ひになる氣ならばお前さんにお敎へ下さいましと願ひますが、どうもポカ〳〵毆られて我慢をして居るその勉強といふものは大變でございます。私は此方へ來て御飯さへ炊いて居れば安泰に御飯を頂いて御給金を頂戴して居られる身躰、固より劍術遣ひになると云ふ了簡のある譯でございません、痛い思ひをするだけ損でございますから止しませう。』又『餘りそれではソッケない挨拶だ、さう云はずにマア一本敎へてやるから來い。』善『徃けません、お斷り申します。』又『乃公の方で賴むのだ。』

善『それは頼まれゝば越後から米搗に來る諺言もある、貴郎に頼まれて見れば忌といふ譯に往かないから承知をしますが、しかし人を頼んでするには又使ひやうがなければならぬ小兒捕らんと欲するものあれば先づこれを與ふ、魚心あれば水心あり、生た人間を使ひますには使ひやうがあるといふ事を先生は承知でありませうナ、頼むからには頼むやうにさへして下されば些と位身躰を痛めても動かん事はございません、そこは貴郎の心持次第何うでございます先生。』又『此野郎乃公に謎を掛けやがる、それは乃公の方でも只は頼まん其方が乃公と一緒に道場へ參つて立會ひ一生懸命になつて乃公を一番打込んで來い、さうすればその褒美として其方に一兩金遣はさう。』善『ヘエ貴郎を一つ打込むと一兩御褒美に下さのですか。』又『さうだ。』善『一兩ですな。』又『さうだ。』善『ヘエ、一兩でございますか。』又『ウム。』善『一兩で……。』又『蒼蠅いなア。』善『少しお待下さい、考へて見ると貴郎を打込めば一兩だが、マア止しませう。』又『何故。』善『何故たッて貴郎は先生、私は飯焚貴郎も一兩取られるのが苦しいから中々打たせない、ボカ〳〵私を打ちませう、一兩は貰はずお前さんに打たれて私は泣寐入になつて仕舞はなければならない、それより私の頭を毆つて幾らとか極めて下さい。』又『此奴ぬからん奴だな、宜し其方を一ッ打つたら百

文やらう。』善『何ぱ飯焚の頭でも餘まり下落し過ぎる、貴郎が一兩で私が百文ちやア違ひます、此うして下さい、まぐれ當りでお前さんの頭を打つたら一兩下さい、又私が打たれゝば百文。』又『宜し〳〵。』善『御承知でございますか、散々打といて跡になつてそんな約束はしないなどゝ云はれてもどうも證據がございませんからな。』又『そんなに念を押すには及ばない。』善『そんならばやりませう。』と云ひながら相談整ひまして兩人道場へ參りました、其時分には竹刀といふものがございません、皆袋竹刀といふ物を用ゐましたもので

善『先生成たけお打ちなさらんで、私しより打つて一兩の方が都合が宜しうございます、一生懸命に打ちますからどうか間違なく一兩願ひます。』又『宜し、見事に打込んで參れ。』

善『心得ましてございます。』と袋竹刀を取上げて、ヤアヤッと聲を掛けて兩人立會ひましたが、固より飯焚の善吉、劍術は心得ません、一兩取りたいばかりの欲心一方ャ聲諸共打込んで來るのを又右衞門、右と左りに打拂ひて、又『御面。』と一聲ボカアリ、善吉の頭を物の見事に打ちました。又『ソレ御面……御小手……。』善『先生待つて下さい。』又『何だ。』善『何だッて百文下さい、貴郎一ッ頭を打てば百文下さると云ふ御約束でございますから。』又『遣らんとは云はん、一本打たれて竹刀を投り出して手を出す奴があるものか

蓄めて置け。』善『けれどもネ、こういふことは御鳥目の顔を見ないと動き惡いものでございますから一寸どうか顔を見せて下さい。』又『遣るよ。』善『跡で知らないと云ふのぢやございませんか。』又『大丈夫だ。』善『百文貸しましたよ。』又『宜し。』善『しかしもう二つ三つ打たれなければ一杯飲めない、モウ一本。』又『サア來い、ヨウ〳〵お面……。』善『二百でございますよ。』又『宜し〳〵。』善『貸しましたよ。』又『ヤア〳〵(ポカン)第三ツ目には余程強く折込んだと見え、善吉頭を抱へて。』善『少し待つて下さい先生……ヲ、痛え目から火が出ました、先生貴郎のやうに錢嵩の上る度に強く打たれて堪るものぢやアないこの鹽梅で六百七百位になる時にはお前さんに打殺されて仕舞ふ、命あつての物種、どうも一本で百は安い、三百位の價値はある、どうか五十文御增錢を願ひたうございます。』又『吝嗇なことをいふな、モウ二ツ三ツやれ。』と又ポカ〳〵打たれて五六百の錢を貰ひ、善『エ、先生、別段に只今何も御用はございませんか。』又『別段に用はない。』善『濟みませんが一寸お暇を頂きたうございます。』又『宜し〳〵何處へ行く。』善『へエ、一寸一盃息繼にやつて參りやすから。』又『さうか、早く歸つて來いよ。』善『へエ直でございます、往つて參ります。』と善吉表へ出掛けて參りましたが暫らく經つて戻つて參りました。』善『先

生、只今戻つて參りました。』又『大層遲かつたな、何處か廻り道でもして來たか。』善『へエ少し他へ廻り道をして來たものですから、大きに遲くなりました。』又『何處へ廻つて來た。』善『安行寺門前まで往つて參りました。』又『何の用だ。』善『用と云ふは、外の事ではございませんが、此ういふ譯で、私が酒屋で一盃飲んでると、向ふに衝立を影にして二人ばかり侍が酒盛をして居りました、その侍が劍術の話を初めたから私も此方に聞いて居りますと、堂島へ今度道場を開いた柳生流の劍術使ひは下手なのか、上手なのかと一人が聞くと、又一人があれはまだ下手上手と名が附かん山師劍術だ、あんな劍術は何にも役に立たん、當時この大阪に大先生といはれる劍客は無論安行寺堀の今井田流の達人、今井白翁軒だ、荒木又右衞門などは山師劍術使だとこう申しますのを聞いて、私も當家の奉公人でございますから聞けば聞腹、睾丸も釣方、此奴等飛んでもない事を吐かす、躍り込んで驚ろかしてやらうと思ひましたが、對手は侍兩人、些つと叶はないと思ひましたから我慢をして來ました。』又『意句地のない奴だな。』善『マアお聞きなさい、それから私も今井白翁軒といふ奴はどういふ奴であるかと、其處を出て安行寺堀まで往つて見ると先生驚ろきました、どうも門人が居るの居ないのツて實に盛んなもので。』又『ウム、左樣か。』善『私

は武者窓へ取附いて見て居りますと、その酒屋に居た侍二人もその道場へ來て居りました皆な今井白翁軒の弟子でございます、先生、世間ではさういふ事をいつて居ります。』善『ウムさうか、それは流言と云ふものだ己れの門人に我を山師劍術ぢやなど、云ひ囃さして己れの道場を盛んにいたさうといふ、今井白翁軒の流言の計略、卑怯なことをいたす奴ぢや、それを聞いては捨て置れん、是から今井の道場へ參つて他流仕合をいたして參らう。』善『貴郎お出でなさいますか、先生悪い事は言ひません、お止しなさいましな、アノ景氣ぢやア屹度先方が强うございます、負けると大變でございます。』又『乃公が負ければまだ修行が足りないのだから、この道場を閉ぢて今一修行國々を巡つて來る、乃公が負けといふ事を聞いたらばもう道場へは歸らん、ソックリ汝にやるから、どうでも勝手にしろ。』と旅の仕度をいたして又右衞門堂島の道場を出で、安行寺堀今井の道場へ至つて見ると、成程稽古日と見えて竹刀の音、お面お胴の聲囂しく聞えて居ります。

第四回

白翁軒と賭仕合

門内に入りまして玄關へ參り、又『賴む。』○『通れ。』白翁軒の門人と見え一名兩手をつかへてそれへ出た。』又『手前は武術修業の者、先生の御高名の儀は承知いたして一應御手合せを願ひたうござる。』○『暫時お控へを願ひます……エ、先生他流仕合が參りましてございます。』白『他流仕合……ア、大方物貰ひだらう、いくらか鳥目をやつて追拂つて仕舞へ。』○『宜しうございます。』百文紙に包んで盆に載せて門人再び出て參りまして、○『能うこそお出で下さいましたが、今日は師匠一寸據ろない事にてこれより他出仕つりますによつて、御目通りをいたし兼ねれば又御都合の節お尋ねを願ひます、これは輕少でございますがお草鞋錢のお足しになされて下さいまし。』又『これは何だ。』○『ヘエ。』又『これは何だよ。』○『エ、草鞋錢のお足しに。』又『控へろ、此方は物貰ひではないぞ、無禮至極の奴だ、百文や二百文の鳥目が欲しいと思つて參つたものでない、仕合に參つたのだ、今井といふ奴は、傲慢無禮の奴だ、今日立合ふ事がならんなら明日まで待たう、明日立合ふ事が出來んといふならば明後日まで待つ、それでも立合ふ事が出來なければ、三日まで四日でも十日でも廿日乃至は一月でも二月でも、一年でも二年でも其方の都合の宜いでも此の所に控つて居る、白翁軒に右の義を取次げ。』と云ふと前にありました鳥目を取つて向ふへ投付けました。門人驚ろいて奥へ這入つて、○『先生どうして〳〵恐ろしい勢

ひの奴、大層立腹をいたして都合の宜いまで一年でも二年でも待つと申しますが何うしたものでございませう。』白『ハヽア餘ッ程慢心をいたして居ると見える、よし道場へ引張り込んで打のめしてやらう、此方へ通せ。』○『ヘエ……エ、此方へお通りを願ひます。』

又『案内をさつしやい。』と案内に連れて一間へ通りまする處へ、今井白翁軒出て參りましたが、年齢五十格好のデップリと太つて居ります、赤ら貌の切下髮、一流の劍師としてそれへ出しても耻かしくない人物でございますが、白『これは〳〵能うこそお尋ね、道場主人今井白翁軒拙者でござる。』又『先生には初めて拜顏を得まするが、手前は武術修業をいたします者で。』白『何れへ參られたか。』又『ハイ西國三十三ケ國を殘らず廻つて參りました。』白『それは〳〵御年若でござるが能う御修業をなさる、骨を折つてお習ひなさい、末々は名人におなりなさるであらう。』又『先生のお言葉でございますが、モウ疾に名人になつて居ります、末々ではございません、只今名人になつて居ります。』白『左樣か、それは大きに失禮を申して相濟まん、然らば道場へ御通り下さい、お腕前を拜見いたさう。』又『どうか願ひます。』それから案内をいたして道場へ通し、スッカリと支度をいたし、又右衞門今井白翁軒道場の眞中へ出る、兩側には門人居列んで見物をいたして居ります、やがて

双方エイヤッと立上り互ひに中段に付けましたが、又右衞門固より柳生重兵衞仕込の腕前今井白翁軒如きは遠く及ぶ所でございません、先方の腕前も大概此位ゐといふのは義村には解りますから、何だ此奴京阪隨一の先生もないものだ、ヤッと素人の毛の生へた位のものであるわいと思ひましたので、此奴を一ッ遊んでやらうと心得、又『先生少々お待ちを願ひます。』白『何でござる。』又『さて武藝といふものは勵みが付かんといふと誠に思うやうに立會ひが出來んが、勵みの爲めに手前も聊か金子を用意いたして參りました、一本一兩ッヽで打德取德といふのは如何で。』これを聞いて白翁軒心の中に此奴劍術使ひだか博奕打だか譯の解らん奴だと思つて居ると、又右衞門サッサと懷中から胴卷を取出し、餘程金子を用意いたして居りますと見え、胴卷の眞中がフックリさして居ります、結び目を解いて金子を取出し小判五枚を出しました、白翁軒これを見て、此奴中々持つて居る樣子・殘らずふん奪つて道場から突出して遣らうと思ひましたから。』白『左樣か暫らく待たつしやい・奥へ參つて、金子を取つて參る。』と白翁軒女房に金子を五兩出させると、妻『和郎五兩金を何うなさいます。』白『修業者と立合つて、向の金を取るのだ。』妻『負けやしまアせんか。』白『大丈夫向ふの金を皆な取つて仕舞ふ。』妻『どうぞ負けないやうにして下さいま

し、もしお金子を澤山取つたら私の帶と着物を拵へて下さいまし。』白『承知した。』『どうなるか知れんが、あて事と越中褌は向ふから外れ勝ちで、誠に行かんものでございます、五兩の金子を持つて白翁軒道場へ出て參り、白『大きに御待遠でござつた、然らば御修業者これへ差置きます、サアお出でなさい。』と白翁軒支度に及んでどう〳〵立會に及んだ處がヤア〳〵と二三遍竹刀を合せたかと思ふ中に美事に白翁軒負けて仕舞ひましたから又右衞門、五兩の金子を懷ろに入れて、又『誠にお氣の毒樣でございます、勝徳取徳で頂戴いたします。』今井白翁軒苦い顏をして、白『コレ一同、それだから乃公が喧しくいふのを聞かんで、油をこぼして置いたものだから辷り負けをいたした、御修業者今一本參らう。』又『何本でも宜しい、今度は十兩では如何で。』白『宜しい、只今金子を持つて參るから、お待ち下さい。』と又奥に這入つて女房に、『モウ十兩出して呉れ。』妻『和郎五兩今出して上げたのをどうしました。』白『あれは足が辷つた、今度はモウ大丈夫、初めといふものはして往けない、モウ先方の腕前は知れて居るから大丈夫。』女房はシブ〳〵十兩の金を出す白翁軒又道場へ來て、『然らば十兩これに置くでござる。』又『大きに御近到さまの事で。』白『まだ勝負をいたさん中に和郎お仕舞ひなすつては往かん。』又『ア、左樣でござつたか

併しモウこれも先に頂戴いたして置いても宜しいのだ。』と又立上つて立合ひまする中に、白翁軒橫面を烈く打たれて目が眩んだから、白『參つた。』と白翁軒又た十兩取られて仕舞つた。何本やつても叶はない、悔しくつて堪らないが仕方がない。又右衞門は形を改ためて、又『扨大きに失禮をいたしました、今井先生京坂隨一の御腕前と承るより如何なる事かと實は今日拜見に出でました處、御腕前驚ろき入りました、實は拙者此頃堂島へ道場を開きました荒木又右衞門と申す者でござる、御門弟衆チトお話にお出で下さい、シテ此の頂戴した金子は御新造へ差上げます。』と今取つた十五兩の金を出したから奥で覗いて聞いて居た内儀さん轉がり出して來て、妻『どうも誠に有難う存じます、それではマア和郎は堂島へ道場をお開きなすつた荒木先生といふお人でございますか、和郎はまだお獨りでございますか、如何でございませう不束ながら妾しでは……。』『苛い女房があればあるもので、それから白翁軒とう〳〵此の道場を引いて仕舞ひ、又右衞門の道場が盛んになつて五年の間開いて居りましたが、さて大阪といふ所は侍三分に町人七分といふ所でございますから、此地に居つては充分の事は出來ない、江戸へ參つて一花咲かせやうと思ひ立ち道場は門弟五郎右衞門といふ者に任し、これから東海道筋を差して出立に及ぶの件りは次

回に。

第五回　渡船場に武士を救ふ

引續きまして致しまする伊賀の仇討の講談……又右衞門は堂島に五年間道場を開いて居りましたが、門人も大層附きまして繁盛いたして居ります、去りながら大坂は侍三分町人七分と申しまする處、武藝を以つて主取をいたさうと云ふ志しはございません、これより江戸表へ下らんと思ひ立ちました。堂島の道場は自己の一門弟大坂の顏役で喧嘩屋五郎右衞門と云ふ者がございます、此人へ預けて置きまして又右衞門随從をも連れず只一人旅の準備を裝ひ坂地を立つて東海道を江戸を差して下つて參ります、道中別段のお話しもなく七里宮(熱田驛)へ渡船をいたしまして、宮の傍の掛茶屋へ腰打懸けて海原を眺め煙草を薰らし、暫し休んで居りますと、往來の者が向ふへ黑山のやうに立つて何かありまする樣子、何事やらんと又右衞門も其處へ來たつて見ますると、渡船場人足が各々得物を持て一人の男を大勢で打擲いて居りまする、打れて居りまする者は侍躰の者にて襤褸を身に纏ひ如何樣浪人者の樣にも見えまする、其人を大勢でポカ〳〵打ます、甲『打殺して仕舞へ

……殺して仕舞へ。』乙『此奴等に如斯戲けた眞似を爲れちやア人足は飯の喰ひあげ………構はねえ打殺して簀卷にして海中へ打込んで仕舞へ。』大勢口々に罵り、のし懸つて打んと爲る、又右衞門は見兼まして中へ這入つて參り、又『是りや〳〵人足共待て……待て〳〵如何云ふ譯かは知らんが、見れば大小を帶挿で居られる人物、往來で武士たる者を其方達が打擲いたする事はない、拙者が扱ふに由て暫く待て。』船頭『放擲つといて御呉んなさい、此奴等に此樣眞似を爲れちやア我儕共が飯が喰へません、以後の見せしめに此野郎を叩殺して仕舞はなけりやア成りません、構はずに居て御呉んなさい……。』又『吾々が扱ひを入ると云ふのに放擲つて置け、構はずに置けと云ふのは何事だ、扱ふ者は時の氏神と申するゾ、拙者の扱ふのが其方どもの氣に入んと申するのか……。』船『ナニ然う云ふ譯ぢやアございません。』又『それなら暫く待てと云つたら引込で居ろ……。』船『ヘイ……待てやい〳〵恐敷巨大な侍だ、强さうだから彼奴が暴れると危ねえから、少し待つて遣れえ、ぢやア待ちます旦那宜しう御扱ひなすつて下ざい。』又『暫く待て……夫なる御武家如何云ふ譯でござるか、往來烈しき東海道の中央かで斯樣な所業に及ばれるとは何か仔細もあるべき事……如何の事にござるか何卒御話し下さる樣……。』侍『コレハ

〱御親切なる御言葉千萬辱け無うござる………、イヤモウ些少かなる事でござる、何卒御鬪ひ無く御通りを願ひまする。』又『否搆はん位なら固より御扱ひ申しはいたさん、武士は相身互ひと申す、如何なる譯かどのやうにも拙者がお扱ひ申するによつてお話し下さるやう、拙者は大坂堂島に一道場を開いて居る柳生流の劍師、荒木又右衛門義村と申しまする者、江戸表へ下向仕るものでござる、して貴殿は孰れの御家臣にて御姓名は何と仰せられるか伺ひたうござる………。』侍『御深切なるその御言葉………某は福島飛騨守家來、北藤武右衛門と申する者でございます、龜山の福島家改易に相成り、主家の不祥は身の不祥、斯くの如く無祿となり、聊か江戸表に知邊がございまするに由り、これへ便らんと心得これまで參りましたが、今この渡船を渡りし時圖らずも僅かの鳥目を海中へ落し入れましたるによつて、船錢を貸して吳れと懸合ひました處が、貸す事はならんと云ふ言葉………けれども無い袖は振れんによつて、然らば汝等共の心任せにいたせとかう拙者が申しますると、それならかうして遣らうと、人足共が大勢長棹を以つて拙者に擊つて懸りました武士に向つて無禮をいたすゆゑに無禮討にいたして遣らんとは思ひましたが、何分拙者の方に鳥目がございません、過りがあるによつて據ろなく抵抗をもいたさず端たない者に斯う打たれ居りまする、拙者が胸中御推察願ひたうござる。』又『それは誠に氣の毒千萬なる事で、宜しうござる、拙者が如何樣にも御扱ひ申しませう………、こりや人足この御人へ何故渡錢を御貸し申さん、武士たる者を端たない汝等が打擲するとは以ての外、この北藤と云ふ御方が穩かなる人であればこれ宜いが若し侍に向つて無禮な奴だと無禮打になつたら汝等何んとする、此度の處は免して遣はす、今後もある事斯樣な事のある時は其の分には捨置かんぞ………船錢さへ遣はせば云ひ分あるまい。』船『ソリヤ舟賃さへ貰やア私の方ぢやア云ひ分はありません。』又『然らば拙者が船賃を遣る、此一両金の小判を其方へ渡す、船賃を取つて跡の釣を持つて參れ、しかし待ては居らんぞ、那方なる酒屋へ參つて中食をいたして居るから其處まで持つて來い宜いか………サ北藤氏共々にお出なさるが宜しい。』と北藤武右衛門の手を取り、酒屋へ這入つて參りました。又『許せよ………。』女『入らつしやいまし、此方が宜しうございます。』又『ア、何が出來るか………。』女『出來ますものはお椀にお茶椀お差身………酢の物、煮肴に熬鳥いろ〱出來まする。』又『ア、左樣か………差身と茶椀で酒を五合附けて吳れ、乃公は酒が大好きだから本桝五合だぞ………それに乃公は細小なものでチョビ〱飲んでるのが嫌ひだ、大きな物を出せ………。』

女『畏りました。』又『お手前は御酒を召上るか。』武『拙者は不調法でござる。』又『全く然かござるか。』武『決して遠慮は仕つりません。』又『然らば御飯を……コレ〳〵飯を二人前煮肴を二人前拵へて來て呉れ……酒を早く持つて來いよ。』注文を其處へ持つて參りました。』又『こりや五合だなア。』女『ヘヱ本桝五合で……。』又右衛門巨大きな丼鉢で之を三杯に飲み干して仕舞ひました。又『コレ亭主其方の家の酒は少と高いぞこの丼鉢に三杯ツきやアない。』亭『其丼鉢は二合這入ります。』又『二合づゝ……二三が六合イヤ一合安いんだ……大きに失禮を申した……が未だ飲足りんモウ五合附けて參れ。』と五合キユーと飲み干し、又『今度は一升附けて呉れろ……。』居酒屋では驚きました。亭『恐ろしい酒を飲む奴だ……。』と思ひながら一升持つて參りましたのを、湯呑でグビリ〳〵と飲んで居ります處へ、人足が釣を持つて參りました、船『ヘイ先程の船賃のお釣を以つて參りました。』又『よし〳〵其處へ置け……今度もある事だ武士に向つて無禮をいたすな。』船『ヘイ……。』又『其方へ往け〳〵。』北藤武右衛門これを見て居りましたが、武『コレ人足……待て其方ども船錢さへ貰へば云ひ分はあるまいな。』船『そりやア船賃さへ貰へば此方に云ひ分はありません……。』武『其方に申分がなければ、能くも武士たる者を打擲をいたしたな兄さん。』と云つて一刀の柄へ手を掛ける、又『アヽ是れはしたり北藤氏…………御自分に左樣な事をお爲せ申す位なら、最初からお扱ひ申さぬ、高の知れた下郎匹夫……旅の愧は掻捨とやら諺にも申すから、斯樣な者をお構ひなさるな、斬つた所が刀の汚れ、必らず〳〵御立腹は御止まりを願ひたい……、ソレ人足危ない〳〵、速く逃げろ〳〵ア、云ふ馬鹿な奴は詮方がない、どうか勘辨をして遣つて下さるやう拙者これから江戸表へ參るもの、道中は又面白くお話しをいたさうから……獨旅と云ふ者は不可んもので、旅は道連と申してな、お連があると誠に道中も好いもの、萬事拙者が江戸表迄は何に由らず御賄ひ仕りますから、失禮ながら御安心を願ひたう存ずる。』と深切に又右衛門が止めまして何も酒を飲んで居ります處へ、男『少々伺ひたうございます……。』と這入つて參りましたのは大小を帶びて居ります一人の若い男、又『何ぢや。』男『へ……唯今あれへ黑い鞘の方が人足に打たれて居て、赤い鞘のお方が御救ひなされてございます、主人の中村でございます、赤い鞘の御名前を聞いて參れと斯樣申されました、何卒お聞かせ下さるやうに……。』又『ナニ……白だの赤だのつて人をワン〳〵だと思つて居るか、朱鞘は乃公だ……諸名乘つて聞かして遣らう、今一杯飲んで名乘るから好く覺えて置けい

抑も拙者の姓名は淳和奬學兩院の別當、源氏の長者、征夷大將軍德川三代の現君へ御指南を奉つりし、柳生但馬守の御總領柳生重兵衞光吉公、大和正木坂に於て門弟一萬三千八百八十四人の其の內我こそ天地人の三卷の免しを受けたるものにて、祖先は戰場に武名轟き渡つたる花隈の城主、荒木攝津守村重、一度民間に降り、伊賀の國荒木村の鄕士荒木彥太夫の忰幼名を丑之助、今改めて荒木又右衞門 源 義村、柳生流の劍士なり、どうだ分つたか………。』男『恐ろしい御姓名でございます、私は法性寺の入道先の關白太政大臣が一番長いと思つて居りましたが、その三倍ございます、その御親類でお在でなさいますか、………どうかモウ一遍成丈け短かいところで………。』又『然らば荒又………。』男『ヘエ………。』又『荒又と云ふ………。』男『荒又と云ふお姓名がございますか。』又『ナニないことはない、伊豆屋の勘兵衞を伊豆勘、大阪屋八右衞門を大八と云ふやうなもの、乃公は荒木又右衞門だから荒又よ………。』男『然らば荒木又右衞門さんと仰しやいますな……大きにどうも失禮をいたしました。』と其の者は出て參りました、又右衞門跡で笑つて、又『彼奴の聞きやうが拙者の癇に觸つた、ヤレ黑いの赤いのと云やアがつて、長短の姓名の名乘を聞かして遣つたらイヤ驚いて向うへ往つて仕舞つたが、孰れの若黨か知らん、主人に命付けられて參つたのであらう………。』と云ふ處へ四十格好な立派な武士、供人を大勢連れて這入つて參りまして、又右衞門の前へ兩手を付いて、侍『これは荒木先生と仰せられますか………、唯今は又家來共が失禮にも御尊名をお問ひ申して甚だ恐縮の至り、拙者は池田宮內少輔忠雄家來、渡邊靱負と申しまするものでございます。』

第六回　靱負と伴れ立江戸への旅

又『ハヽア左樣でござるか。』靱『唯今江戸表へ下向の際、渡船場で御浪士が人足の爲めに打たれて手前お扱ひを致さんと心得たる處、先生に先を越されて仕舞ひました。武士は相身互ひ、ようこそお扱ひ御深切恐れ入りました、鳥渡それが爲めに御接顏をいたしたいとかう心得まして參じましてございます。』又『これは〱申遲れて恐れ入りますが、拙者は柳生流の劍師荒木又右衞門でございます。唯今は御使者に長短の名乘分に仕りましたが、少々喰醉ふて居りまするで何卒御用捨を願ひまする。』靱『シテこれなる御人は………。』又『此人は龜山の福島飛驒守殿御家來、北藤武右衞門と云ふ………。』靱『ハヽア成程福島飛驒殿の御家來が御浪士なされしお方か、ア、お氣の毒千萬な事………これより先生何方

へ御出に相成りますか。』又『左樣拙者は江戸へ參ります、この北藤氏も矢張江戸へ御下向でございます。』靱『それは〳〵一河の流れ一樹の陰、躓く石も緣の端とか申しまする、これにてお目に懸るも何かの御緣、何卒御同道下さらんか。』武『有難い事ではございますが御覧の通りの浮浪人を御大身の御從方へお加へ下されましては、御身分柄にも……。』靱『イエその御配慮には及ばん事、固より拙者からして願ひまする事、枉げて御同道を……。』とこれから北藤武右衛門、荒木又右衛門を渡邊靱負は連れまして東海道を泊り〳〵の宿泊屋にて、又右衛門は大酒を飲んでブウ〳〵を申します、渡邊靱負は飛んだものを同道したと思つたが詮方がない、又右衛門動もすると、又『この國全界の名人はこの義村、三國一人は拙者、佛の事なら釋迦に問へ、劍道の事ならこの又右衛門に問へ、吾は三國一の名人。』と自慢を申しまするから靱負思ふやう、靱『自分から名人だの上手だのと云ふ奴に限つて腕の勝れた者はないものだ、どうかこの者の腕を試して見たいものだ……。』と思ひましたが道中で腕を試す譯にも行かず、江戸に歸つて試すに如かずと、泊りを急いでだん〳〵と江戸を差して參ると恰度戸塚の嫉妬坂……この嫉妬坂を越えまして小休みをいたして居りました。靱負の槍持に又助と云ふものが居りましたが、この者少々拔作野郎、特

に酒好でございます、酒を飲んではいかん〳〵と若黨の孫三郎が止めますが、當人トント停められませんと見え、お槍を擔いでは一丁二丁位は後から參りまして、途中で下み酒をば飲みまする、今も靱負の從方より二丁ばかり後から遲れてお槍を擔ぎ、嫉妬坂へ掛つて參りますると、松の根方を枕となし、襤褸袢纏に帶を締めて氣味惡げな大きな軀幹をいたして大の字形に倒れて寢て居りましたが、この雲助は疝氣の病があるものと見えて、陰嚢が大きく膨れて居ります、又助『イヤアこの雲助奴、巨大な睾丸だ、疝氣と見える、全躰この疝氣と云ふものは睾丸がかう膨れるがこれで痛くないものか知らん、一つ試して見やう。』と槍を取直し石突を以つて雲助の睾丸をちよいと突きましたから、雲『アツ……。』と一ト聲懸けると起上るが速いか、その鎗を摑んで、『エーイ……。』と引きましたからとう〳〵雲助に槍を奪れて仕舞ひました。雲『ヤイ累卵い事をしやアがつて、寢て居る處を乃公の急所を其方は突いたな、石突だから好いけれども、穂の方で突かれやうもんならその儘だ、何だ汝は……。』又助『勘辨してお呉れ、乃公が惡かつた、どうか勘辨をして貰ひてえ。』雲『勘辨ならねえ……。』又助『そんなことを云はずに……別に遺恨がある譯ぢやアなし、巨大な睾丸を出して寢て居たからこんなに睾丸は膨れて居るが痛えか痛く

ねえか試して見やうと思つて突いたんだ、和郎が出して寢て居たから惡い。』雲「大きなお世話だ、この槍は返す事は出來ねえ。』又助「旦那に分疏がねえから………。』雲「い丶や………然らば槍の主から詫言をいたしたら、乃公は勘辨をいたして遣らう。』又助「旦那に濟まねえ、渡して呉んねえ………。』雲「何と云つてもこの槍の主が來なけれやア返されねえ連れて來なけりやアかうするぞ。』とドント又助を突きました……此方は靱負、靱「孫三郎、又助は未だ見えんか……どういたした。』孫「左樣でございます。』靱「困つたもんだ又道草を喰つて居るんだと見える。』孫「鳥渡往つて見て參じませう。』小戻りをいたして參りまするど、向ふから又助が茫然來るから、孫「又助お槍はどうした……お槍はどうしたヨ。』又助「奪れちまつた。』孫「ナニ取られちまつたア、何んで取られた。』又助「雲助に取られた。』孫「雲助に取られた、何か此方からしかけたんだらう。』又助「何にもしやアしねえ……。』孫「何にもしねえで取る奴があるものか、何かしたらう。』又助「實は雲助があすこに寢て居たんだ、其奴が巨大な睾丸を出して寢て居た。』孫「好いぢやアねえか、向ふの睾丸だから向ふで出して寢て居たのに不思議はねえぢやアねえか、ソレがどうした。』又助「あんなに睾丸が膨れて居て痛えもんか痛くねえものか、槍の石突を持つて試しに突い

て見たのだ。』孫「この馬鹿野郎、無益ねえ惡戲をしやアがつて、それだから汝のやうな阿房な奴はないと申すのだ、一緒に來い……いくらか鳥目を遣つたら渡すだらう、乃公は槍を取返して遣るから。』往つて見ると雲助傍に槍を立懸けて居る、前の處へ孫三郎兩手を支え、孫「貴郎樣へこれなる者が甚だ失禮を申上げたる由、此奴は少々愚かな奴特に少々喰醉つて居るものでござるから、どうか御勘辨を願ひます、此の者は槍がなければ歸る事が出來ません、どうか此奴不愍と思召てお渡しを願ひます。』と二百文ばかり紙へ包みましたのをそれへ出し、孫「甚だ輕少ではございますが、どうか一口召飮つて下さるやうに………。』右の雲助は其鳥目を見るより顏の色を變へて、雲「默れ、鳥目が欲しさにこの槍を取上げたのではないぞ、斯樣なる白痴たものに槍を持たして置いて往來をさせるのは、是槍主の不注意だ、右によつて槍の主に意見をいたして返さんと思ふによつて主人をこれへ連れ參れ、其方は雲助と侮つて鳥目を以つて槍を取らんとするものか無禮のことをする奴だ、吾名を聞いて驚くな、香取眞流の棒を使ふ鷲津七平、雲助に姿を變へて居るのも身に心願あつての事なり、人間の最も大切の急所を突きをつて實に累卵いことだ、槍の主に申聞けやうと思ふに、汝吾に恥辱を得させる奴、よつてモウ了見ならん、この槍の主と尋常

に此槍を以つて勝負に及ぶ、さもなき時は主人自から三拜九拜をいたして持つて參るか、二百文や三百文の錢なれば此方から遣はす、右の次第を槍の主へ申聞けろ。』と云はれて孫三郎、孫『然らば右の次第を告げますから……。』と仰天して、孫『これは大變な騷動出來に及んだ……。』と急いでこの由を渡邊靱負に告げますと大に驚き、靱『東海道の中央で立會も出來ません、しかし槍がなければ戻ることも出來ず……。』と途方に暮れて居りますと、これを聞いて居りました荒木又右衞門が、又『然らば拙者が參つてその鷲取七平と立會ひ、彼が鼻柱を挫いて槍を取戻して參らう……。』とこゝに又右衞門柳生流の腕を顯はし、戸塚の嫉妬坂の立會といふお話しは次回に悉しく言上いたします。

第七回　五郎兵衞の横死

さて伊賀越仇討のお話し、前回申上げましたは戸塚の嫉妬坂で又右衞門が香取眞流の棒を使ふ鷲津七平と申しまする者と立合をいたしまする事、鷲津も一流を極めたる劍士でございますけれども、又右衞門にはなか〳〵遠く及びません、遂に不覺を取りまして、そこにて渡邊靱負の持槍を又右衞門に返しました。されば又右衞門はそれを以つて靱負に返しましたるによつて、靱負の悦び一方ならず、それから江戸屋敷へ着いたしまして靱負の家に食客をいたして居りまするが、渡邊は荒木の術に感服いたし、靱『如何でござる、當家へ推擧仕りませうか。』と申しまする、又『イヤ〳〵一度拙者は道場を開きまして、それより孰れかへ主取をいたしまする。』靱『左樣なれば孰れの地が宜しうござりまするか、道場をお開きなさる處を御見立なされて拙者に仰せがあれば、何のやうにも御世話いたしませう。』と申しますると、幸ひ牛込の神樂坂下に好い家がござりまするゆゑに、これへ八間四面の巨大な道場を建て、表の看板に「武藝十八般他流試合勝手たるべき者なり、柳生眞流の劍士荒木又右衞門源義村」と大きな看板を立て門弟を取立て居りますると、江戸は大都會おひ〳〵又右衞門に門人が殖て參りましたけれども、柳生流の看板を出して道場を開きまするには木挽町の柳生飛驒守宗冬公に沙汰をいたしませんければ出來ませんことでございますが、又右衞門は無屆けで道場を開きましたのは心に一物ありましての事、されど柳生公より別段御沙汰もございません、此時又右衞門の名が江戸表で大層高くなりましたと申しまするは、大坂の堂島へ殘して置きました、己れが一の門弟、喧嘩屋五郎兵衞と申しまする顏役でございます、これが堂島の道場を引き受けて門人を取立て居りました。

顔役で武藝が勝れて居るから、大坂では評判宜しく大分門人もございまする、スルと大坂の生玉へ一刀流の武藝者で赤川半平と云ふ者が道場を開いて門人を取立やうといたすが、何しろ喧嘩屋の道場に制れて己の道場へは門弟が參りません、如何にも半平は殘念に心得て、半『あの喧嘩屋と云ふ奴を制へて仕舞はなけりやア乃公の道場が繁昌いたさん、どうかいたして那奴を取つて制へて遣りたいものぢや、他流仕合に乗込めば、若し大勢に掛られて己が不覺を取つてはならんから、途中で喧嘩でも賣懸けて、それを機會に酷い目に會はして、然して己が名を輝かして大坂で評判を取るより外はない。』と思ふて居りまする、一日赤川半平處用あつて、堂島の髪結床の前まで來りまするど、床場に五郎兵衞が居りました、赤川半平がよく〳〵見ると五郎兵衞一人で外に子分の者も居りません様子、半『一人々々なれば此奴に負ける氣遣ひない、一ッ喧嘩をしかけてやらう。』と床場へ入來り、半『親方一ッ束ねて呉れ。』親『ヘイ……エ、少々混雑て居りますから御間がございます半『跡で好い……許せよ。』と床場へ昇つて爐が切つてございまする、その縁へドッカと安座をいたし、半『親方、その毛拔を貸して呉れ。』親『へ、……。借りた毛拔をば取つて向ふ向になつて髯を拔いて居ります、喧嘩屋五郎兵衞がジロリと見て、五『ア、これが

赤川半平と云ふ奴だな、嫌な奴た……。』と心には思ひましたが言葉も懸けず素知らぬ振をして居る内に、五郎兵衞は髯を剃りましてこれから髪を取上げ根揃へと云ふところ、それまで半平默つて居りましたが、根揃へを見て、半『髪結床の親方、和郎が結つて居る其野郎の頭ア何と云ふ頭だえ、恐ろしい禿げて居やアがる、禿山へトウスミ蜻蛉が止つたやうだなア、そんな少とばかりの毛を根揃ひなんぞをするのは面倒臭いから、一本宛引こ拔いて仕舞つた方が宜からう、髪結床の亭主が驚いたのは大坂で一と云つて二と下らん顔役で、武藝勝れた處の五郎兵衞に向つてこの一言、どんな間違ひが出來るかも知れんと唯眼をパチ〳〵顔に電光りをさして、半平に知らして居りましたが、固より平氣な顔、半『親方、何で和郎乃公の顔を見て目ばたきをしたり電光りをするんだえ、宜いぢやアねえか、全く禿山へトウスミ蜻蛉が止つたやうだから言ふんだ、皆な引こ拔いて仕舞ひねえ……乃公が承知だから……。』五郎兵衞これを聞いて居たが、五『親方、馬鹿野郎に關ひなさんな。』親『あの方は御酒でも飲んで居なさるやうでございますから、どうかお心に……』

五『ナーニ宜いとも〳〵。』とにこ〳〵笑ひながら頭を結はして仕舞ひまして、平生直ぐに歸るべきものが今日は歸りませんで、そこに煙草を薫らして居りまする、赤川半平も喧嘩

を賣懸けた處向ふで取合ひませんから、誠に手持無沙汰になりまして、それなり口を利きません、その内に自己の番になつて參りました、これから赤川半平の根揃ひになるとそれまで待つて居た喧嘩屋の五郎兵衛が、五『ヲイ髮結床の親方、その野郎の頭ア恐ろしい巨大なまげに結つてやアがる、まるで五人前の杓子か糞船のたわしを見たやうな頭ぢやアねえか、そんな物を結つて居るのは面倒臭えから一層引こ抜いて仕舞つた方が宜からう。』と云ふと固より此方で喧嘩をしかけた位だから悦こんで、半『ヤ己武士に向つて慮外を申す奴、唯は置かんぞ。』と立上つて一刀を振上ぐる、五郎兵衛、五『ヤイそこで間違えをしちやア床場の厄介を受けなけりやアならねえ、往來へ出て來い。』半『ヲウ合點だ、觀念いたせ。』と一刀を振翳して五郎兵衛が面部を臨んで打下すを、五『心得たり……。』と小手下をくゞつて、五『ヤツ……。』と云ふと利腕を逆に反しました、半平手を捻ぢられて眞劍をポロリ打落されて、半『これは……。』と驚くのを引擔いで、五『エイツ。』ズドンと物の美事に投げ附けまして、起上らうとした奴を上からグイと馬乘になつて、五『ヤア汝や何處の奴だか知らねえがこの喧嘩屋五郎兵衛を知つて喧嘩をしかけたか、それとも知らずにしたのか太え奴だ、汝の頭アから云ふやうに一本宛引つこ抜いて遣るのだ。』と根揃ひ

を今しやうと云ふ處でございましたから、散破落髮で居りましたのを、五郎兵衛が半平の小鬢の毛を握つてはもり〳〵引抜きますのを、半平はヒイ〳〵と悲鳴を揚げて居りますのを、さう〳〵片ツ小鬢の毛を拔いて仕舞ひました。五『命は助けて遣る、サ一昨日來い。』と蜘同樣突放されて、赤川半平鼠舞をして逃げて行きました、跡を見送つて、五『ハヽ、世の中には誠に白痴な奴もある、困つたものだ。』とにつこり笑つて、五郎兵衛は己の家を差して戻りましたが、サア半平はこの評判が高くなつてモウ道場を開いて居る譯にいかんから、生玉の道場を閉めて孰れへ參つたか行方相分らずなりました。これから恰度二十日ばかり經過てのことでございます。五郎兵衛が住吉へ用事がございまして子分を二人連れて參り、用達を濟まして三文字茶屋で御酒を飲みまして、夜に至つて駕籠を雇ひ、子分二人の者は徒歩、五郎兵衛は駕籠に乘り三里の道を大坂差して歸つて參ります、途中冴渡つたる月夜彼是二里も歩いた處へ、傍らよりバラ〳〵〳〵と何者とも知らず驅出して參り、矢庭に五郎兵衛の駕籠の中へズブーリ突込んだ槍、五『ウーン……。』と駕籠の内にて一ト聲、駕籠屋は人殺しといふと駕籠を其處へ置いてドン〳〵逃出しましたが、男は突つ放しにして逃げた樣子、子分『サ、その野郎を捕へろ……。』と追駈けて參りましたが、其奴

逃足が早いので追付くことが出來ません。そこは天の網と云ふものは恐ろしいもの、吹來る風の爲めに逃出した奴の頰被りが脫れると冴渡つた月で橫顏が見えました、未だ小鬢の邊りは毛が生へませんで月にピッカリ映つたから、子分『さては赤川半平の奴に相違ない、敵手は知れて居る、親分の身が氣遣ひだ。』と取つて返しますると、五『ウーン……ウーン。』と五郎兵衞は呻つて居る樣子、子『親分負傷は淺い確平しなせえよ。』五『イヤ〳〵負傷は深えか淺えか分らねえ、乃公でもねえ充分に……、脇腹を貫された、迚もこれぢやア命はなからう、希望ては家へ往つて死てえ、乃公を家まで連れて行つて呉れろ。』子『宜うございます、確平なさい……。』と傷口を腹卷などを子分が出しまして、キリ〳〵卷きまして子分の者が勞つて、堂島の五郎兵衞の宅に連歸りました。モウ虫の息忰の辨吉と申しまする者がそれへ出て、辨『阿父さん確平してお呉んなさい。』と云ふ其辨吉の掌を取つて、五『仇……仇……。』仇討とも云ひ得ずして、其儘果敢なく最期をいたして仕舞ひました。家內の者一同は唯々詮方泣くばかり、立派に野邊の送りも營みました。そこで八方へ手分をいたして探索に及びましたが行方が相分りません、だん〳〵尋ねますると關東筋へ下つたと申しまするこ とが微かに聞えましたから、忰の辨吉は、辨『どうか父さんの仇が討ちたいから、私はこれから關東へ下ります……阿母さん和女はどうか大阪に居て下さい。』と母親を大阪へ殘して一人では不可んと子分が止めるのを、辨『イヤ〳〵親の仇は俺が屹度討つて見せる、一心より味方なし、外の者を連れて往つて仇討を怠るやうなことがあつてはならん。』と唯一人旅の準備をいたしまして、阪地を出立いたした。辨吉當年十八歲、東海道別段お話しもなく江戶へ來りまして馬喰町の雁豆屋へ泊りました。翌朝のことでございました、辨『エ、姉さん此方の旦那に少々お目に懸りたうございます、鳥渡お呼びなされて下さいますやう。』女『ハイ。』主人がそれへ出て參りまして、主人『エ、お客樣、御用でございますか。』辨『エ、貴郞は此方の旦那さんでございますか。』亭『ヘエ左樣でございます。』辨『エ、少々物をお尋ね申しまするが、この御江戶に第一番に御利益のある神さんか佛さんがございますか。』亭『エ、そりやアありますヨ、先づ流行神樣では何處でございませうなア……先一番參詣のあるところでは淺草の觀音樣でございませうな。』辨『ハーそれが一番でございますか、第二番は何處でございませう。』亭『さう番付で聞かれちやア困る、先づ當時流行のは目黑の不動樣、これが大層流行ます。』辨『御利益がありますかいナア。』亭『左樣さ盲目が目を明いたと云ふ話しも聞き、腰拔が立つたと云ふ話し

も耳にしましたが、随分御利益のある神樣でゲスな。』辨『ハア目黒さまと申しまするは何方の方へ參ります。』主『目黒はネ、これからさうでげすナア、矢張芝へ懸ッて往つた方が宜うございます。』辨『ハイ……。』主『それから麻布へ這入つて目黒と聞いて往けば直に知れます。』辨『ハア有難うございます。』辨吉馬喰町よりいたして道を尋ね目黒へ參りまして、不動の斷食堂へ這入り、水垢離をして七日間此處にお籠りをいたして居りました。

辨『何卒親の仇が相分りますやうに、御利益をお授け下さいまするやうに、目黒さま不動明王……。』と一心に念じて居りまするど、七日の夜のことでございます、勞れを覺えてトロ〳〵と眠りまするど、〇『辨吉々々。』と起すものがある、辨『ハッ……。』と驚いて眼を開くと、あるかと思へばあり、ないかと思へばなし、唯煙霧の如く朦朧として顯はれ給ひ、〇『汝親の仇を討ちたいと申し、吾を信仰いたする心殊勝なり、是に由て告知らする事有り、明日此所より汝の宿へ歸るべきの道筋をよう心を注け、又た助太刀の者は宿より西に當り心當りあるべきなり。』と云ふかと思へば夢は破れ、總身汗を搔いて居ります、

辨『ア、お告か知らん、奇異なる夢を見るものである……。』と思つて居る内、鷄鳴曉を告げる時刻になりました、早々に御禮參りをいたしまして馬喰町の宿をさして戻つて參

りますと、恰好三田の綱坂下まで參りました。『ヤアエーイ……。』と矢聲が聞えますから、思はず回顧ると新らしい道場がこれにあつて竹刀の丁々と聞えて居ります門へ「一刀流の劍師赤川伴龍」と云ふ表札が打つてございます、辨『ハ、ア俺の父さんの仇は赤川半平、此の先生は赤川伴龍流義も同じ一刀流、コリャ不動さんのお告と云ひもしや仇ではないかしら。』と武者窓から覗いて見まするど稽古をいたして居りますのは紛ふ方なき自己が親の仇敵赤川半平でございますから、辨吉これを見て喫驚仰天、辨『さては不動尊の御利益にて仇敵の在處が分つたるか、アヽ有難い不動さま目黒明王……。』と目黒の方を伏拜んで居るから、同じく武者窓に取縋つてゐた往來の者は、見物『何だえ彼奴は突然に目黒さま不動明王と大きな聲を出しやアがつて那奴は狂人だ〳〵。』と往來の者はジロ〳〵見まするど、その儘辨吉ドン〳〵道を急いで脈豆屋に戻つて、辨『今戻りました。』主『ヲヤ大坂のお客樣貴郎は六日お歸りがございませんが何方へ。』辨『目黒の不動さんへ參つて唯今までお籠りをいたして居りました。』主『ア、それは御信心の事でございます。』辨『鳥渡こゝで貴郎に御聞き申したい事がございますが、江戸で第一番に劍術の巧いお方は何と仰しやいますなア。』主『ア、さうですなア、先づ木挽町の柳生樣でげすな。』辨『それが一番

でございますか、第二番は………。』主『よく和郎は番附で物をお聞きなさいます、當時評判の好い先生は牛込神樂坂の矢張柳生流で荒木又右衛門と云ふ人でげすな、これが大層弟子が出來ましたと云ふ事で、牛込に私の親類がございまして、其家へ時々參りますから、その先生の噂を聞きますが、何でも大坂の方から來なされた先生ださうでございます。』

辨『アノ大坂から來なされた荒木先生が牛込の神樂坂に道場を開いて居なさるかへ。』主『ア、どうなされました確乎なさいよ。』辨『大きに有難うございます、その牛込の神樂坂と申しまするは此方から何方の方でございませう、西の方でございませうな。』主『左樣西でげす、これから柳原へ出て往つて目鏡橋からお茶の水と聞いて、水戸樣前から直線にドン〳〵の橋を渡つて牛込の神樂坂……そこに道場がございます。』辨吉は聞いた通りを神樂坂へ來て見ると今日は休日と見えまして道場も寂莫として居ります、急いで門內へ這入り玄關へ立上り、辨『御頼申す〳〵〳〵。』と云ふと、內門弟の北藤武右衛門、武『ドーレ〳〵〳〵性急しい奴が來やアがつた……何だ。』辨『ヱ、少々御尋ね申します。』武『何が聞きたい。』辨『此方の先生は荒木又右衛門先生と仰しやいますか。』武『されば。』辨『その先生は大坂の堂島に道場を開いて居た先生でございませうな。』武『如何にも大阪の堂島に居なされた。』辨『ア、有難い、不動明王々々々々。』武『コレ〳〵何だ狂人だ、それも宜いけれども草履でノソ〳〵玄關へ昇つて來る奴があるかへ、何處から來た汝は何と云ふものだ。』辨『ア、若し私は大阪の喧嘩屋五郎兵衛の忰辨吉と申しまするもの、どうぞ先生へ御告を願ひます。』

武『ウンさうか少し待つて居ろ……先生へ申上げます。』又『武右衛門取次に出るのに、ドレ〳〵〳〵などと云ふ言葉が有るかへ、少と氣を注けなさい。』武『向ふで御頼申す〳〵〳〵と申しましたから、ドーレ〳〵〳〵。』又『そんな白痴な事を云ふ奴があるものぢやアない誰が來た。』武『若い男が參りました、ヱ、此方は荒木又右衛門と仰しやる先生かと申しましたから、さうぢやと申しましたら、大阪の堂島に道場を開いて居りましたかと聞きますから、如何にもさうだと申すと、ア、有難い不動明王と申しましたが何でも目黒不動の罸でも當つて居る樣子でございます、喧嘩屋五郎兵衛の忰辨吉と云ひました。』又『ナニそれぢやア乃公が劍術の弟子で、道場を預けて置いた五郎兵衛の忰辨吉といふもの………ウンドレ〳〵面會て遣らう。』玄關へ出て見ると辨吉一人で居ります樣子、又『ヲ、辨吉であつたか。』辨『先生でございますか、誠に御機嫌宜しう。』又『久しく面會なんだ………武

右衛門此方へ通したが宜からう。』武『遠慮なく此方へお昇り。』と奥の一ト間へ通しました
辨『誠に御機嫌宜しう。』又『何か……一人で、この江戸へ下向をして來たのか、それとも父と同道か母とでも參つたか。』辨『一人でございます。』又『獨かさては其方もモウ年頃ぢや、大阪で蕩樂でもいたして親父から勘當を受けて參つたな。』辨『其樣な事ぢやございません、父さんが死なされましてございます。』又『ナニ五郎兵衛が死んだ、イヤそれは聊かも存せんであつた何時のこと。』辨『當年でございます。』又『ウムー……。』辨『當年春のことでございます。』又『ア、それは〳〵どう云ふ疾病で有つたな。』辨『否え疾病ではござりません。』又『エ、……何だ。』辨『是々斯う〳〵云ふ次第でございます。』又『さては赤川半平と云ふものに討たれたのか。』辨『ハイ。』又『ウム駕籠に乘つて居ては身躰自由が利かんと見えるな、吾門人にて極意を許したる者なれども殘念千萬のことであつた……
……して其方が江戸へ來たのはどういふ理由だ。』辨『父さんの仇敵を討ちに私が江戸へ下向をいたしまして、目黒の不動明王に一心籠めて祈願を懸けた歸り道、三田の綱坂下と云ふところに赤川伴龍といふて道場を開いて居りまするは、紛ふ方なき父さんの讐敵、どうか私は父さんの讐敵を討ちたうございます。先生どうぞ私を今日中に劍術の名人にして、討たして下さるやうに願ひ上げまする。』又『無理な事をいへ一日や二日で劍術が名人になれる者でないが、しかし父の讐敵を討たんと云ふ精神の程感服いたす、とは云へ、敵ふは一流の武藝者、なか〳〵其方が及ぶものではないから乃公に命を呉れろ。』辨『ハイ……。』
又『其方の首を乃公がこゝで擊つて其首を提携て、この又右衛門が先方へ乘込んで、親子の讐敵と云ひ、乃公が赤川伴龍を討つ、この又右衛門が充分討つて遣るから、其方はどうだ又右衛門に命を呉れるか。』辨『宜しうございます、父さんの敵討さへして下されますれば固より命は抛つて居ります私……首をお討下されましても大切ございません、どうか讐敵を討つて下さいまし。』又『宜しい然らば命を取るから覺悟しろヨ。』傍らに居た北藤武右衛門は、　武『何だか知らんけれども、この者の命を先生がお取りなさるのは不愍な譯だと思ふて居りましたが、口も出されず、差控へて居ります、又右衛門源太光吉の大刀を拔いて、　又『サア覺悟しろ……。』と目の先へ突付けた時に辨吉惡びれもいたさず眼を閉ぢて首を延べた樣子、それを見屆けて又右衛門ピッタリと刀を鞘に收め、　又『宜い……辨吉汝の精神の程を見屆けた、その了見なら充分討損じはあるまい、其方道を聞かずに覺へただけの道を眞筋に他所見もいたさす、赤川伴龍の宅へ乘込んで讎敵と云つて斬結べ、其

方が討れた時は跡から吾が乘込んで充分讎敵は討つて遣る、助太刀はしてやるから。』辨『有難き仕合せ。』と元來た道を直線に芝綱坂まで參りましたが、人間の一心と云ふものは恐ろしいもので、又右衞門跡を見え隱れに尾いて參りますると、赤川伴龍の道場まで……辨吉伴龍の道場へ乘込んで、辨『親の仇敵……。』と伴龍をば充分に討止め、遂に本懷を遂げまして、これによつて御奉行御撿視をば下さりまして、速かに讎討をいたした事の有葉有枝相分りまして、差料の短刀を御褒美に頂戴して、辨吉は大坂へ立歸る。サア斯うなると助太刀は天下の名人荒木先生だ……又右衞門先生は無屆けで柳生流の道場を開いても飛驒守樣が故障を仰しやらんのは、荒木先生は飛驒守樣の御師匠樣であるなどと云ふ下世話の常の口善惡なく流布いたしますから、則ち宗冬公、飛『捨置難い。』と大道寺平馬を使者に遣はして、荒木又右衞門を木挽町の道場へ呼寄せる、これより法條試合ひといふお話しで、天下の豪傑荒木又右衞門の名がだん〳〵と世に響き渡る次第は追々演じます。

第八回　又十郎の修業

さても又右衞門は喧嘩屋五郎兵衞の忰辨吉の助太刀をいたしまして、綱坂下に赤川伴龍と申しまする者を擊たせまして、青差五貫文の御褒美を給はりましたが、大層又右衞門の評判が高大になりました。この江戸表ではその頃ほひ將軍の御指南柳生宗冬公の御屋敷へ參りましてお許しを受けなければ、柳生流と云ふ流名を名乘ることが出來ませんものでございます。然るに又右衞門は無屆けにて神樂坂へ道場を開いて柳生流と云ふ流名を出し、武藝の指南をいたして居ります、これも飛驒樣の御耳に入つて居りましたなれども、胸の廣い方でありますから、飛『當時柳生流隆んなるによつて、これが流名を名乘りさへすれば門人が澤出來るであらうと心得、柳生流といたして置いたのであらう、嚴密に詮せば面倒なり、その儘に捨置け……。』と仰しやつて、飛驒守宗冬公もお捨置に相成りましたるが、餘り又右衞門の評判が高くなりましたから、これをその儘に打捨置かば將軍の御外見に係はると思召てそこで、飛『荒木の流名を取糺し、柳生流の眞の術を得て居るものなるか、それとも僞流をいたして居るものであるか實地を取糺して見やう。』と思召た。固この宗冬公の御幼名を又十郎殿と仰しやいまして、柳生但馬守宗矩の三男でございました、御惣領を重兵衞光吉公と申上げました、序開きの節に言上いたしたるお師匠樣でございます御次男を刑部殿と申され、三男を又十郎樣と三人の男子をお持なされて、御女性がござい

ました、其女を梅姫樣と申上げて、男女都合四人でございましたが、惣領の重兵衞光吉も次男の刑部も家督をいたす事もならんと云ふのは、重兵衞は若くいたして隱居をして大和の正木坂に居りましたし、御次男の刑部殿は短命でございまして、十七歳にして世を去りました人。モウ但馬守が杖とも柱とも思召するは三男の又十郎殿たつたお一人、處がこの又十郎若い時分には唯怠惰者で、ぶら〳〵何かが鍵へ引懸つたやうに遊び歩いて居りました、外の家と違ひまして、指南役のお家でございまして將軍にお稽古を致する御身の上、家督相續は出來ませんから家老の大道寺平馬が又十郎に向ひまして、　平『恐れながら申上げます若君にはこの頃の御所業では到底御家督御相續なさる事が相叶ひません、御父上が杖柱とも御思召は貴郎樣お一人、然るに武藝に心をお止遊ばしませんで、只々遊藝などにお凝り遊ばしますことは以ての外の事、何卒一心に武術御勉强の程を願ひます、一日も早く御父上が御安心遊ばすやうになされませんければ孝行ではございますまい、平馬只管此儀を御勸め申上げまする、何卒劍術をお習ひ遊ばして下さいますやう。』　又『平馬其方は然う云つて吳れるんで誠に辱けないが、乃公は劍術は大嫌ひなんだ、嫌ひなものをさう習へと云ふのは無理ぢやアないか、鳥渡した處で其方はお酒は好きか嫌ひか。』　平『拙者は下戶

でございます、一滴も頂戴仕りません。』　又『その酒を乃公がサ飲んで吳れ、サ飲めと云つたら、貴樣何と云ふ。』　平『例へ何樣あつてもお酒ばかりは頂戴出來ません。』　又『それ見ろ嫌ひな酒ぢやによつて貴樣は飲めんと云ふではないか、それと同じ事で乃公は嫌ひの劍術だから其方が勸めても習へん、乃公は劍術の下戶だ。』　平『御戲談ばかり劍術の下戶てえのはある理由のものではございません。』　又『イヤ全く嫌ひに相違ない、こればかりは習ふのは嫌だからどうか向後意見をいたして吳れるな。』突放された言葉に、流石の大道寺も呆れ返つて、これからは別段に意見がましき事もいひません內に、但馬守宗矩殿御愛妾を一人お抱へ遊ばした、この者は神田の三河町三丁目搗米屋三右衞門と云ふ者の娘でございまして、名をお玉と申して當世風の白ポチャ丸といふ、色が白くてポチャリとして、丸形狀の誠に愛敬のある男好のする容顏、此女を宗矩殿が妾にお抱へ遊ばした處が、大層御意に稱つて、　但『玉ヨ〳〵……。』と慈しむのを見て又十郎、　又『親爺も好いイケ年をして、未だ悴に妻をも迎へん先に妾抔を抱へると云ふのは不都合なことだ、しかし親の物は子の物といふから吾一番玉に横槍を入れずんばある可からず。』と怪しからん悴があればあるものでございます、又十郎邊りを窺ひ、　又『お玉　鳥渡此處へ茶を一杯持つて來て吳れ。』そ

こは向ふは召仕なり此等はこの家督をいたさうと云ふ悴でござるから、お玉と呼捨てられます、 玉『ハイ………持つて參りました召上りませ。』 又『オ、モ少と側へ寄れ、誰も居まいな。』 玉『ハイ。』 又『モ少と傍へ寄れよ………コレ美麗だなア、其方の手は。』 玉『御戯談………貴郎手などをお取遊ばしては不可ません。』 又『好いぢやアないか、コレお玉どうだ又十郎の云ふことを聞かんか……エ、乃公の云ふことを聞け、親爺なんぞはモウ梅干親爺のしなび爺イ小田原提灯だ、其方なぞはあんな者と一緒に居たつて面白いこともあるまい、この又十郎は劍術は少とも知らんが、角力は巧いゾ、如何ぢや此又十郎の云ふことを聞け。』 玉『御戯談を仰しやいまして、左様な言を仰しやつて下さいましてはなりません、人に見られまするど不可ませんから御離し下さいまし。』人が見ると不可ませんから………と斷りますがこの女子を口說きまして、人が見ると不可ないと云ふのは少しは又脈があるものと見なしますさうでございます、人が見ると不可ないから見なければ好いと先づこれで想像をいたす、女子を口說いたときに、嫌な野郎だよとツンとされたならば、最早速かに脈が上つて居るものと二の矢を番へんで、引退つて然るべきでございます。お玉の斷りが何となく誘ふ水あれば靡かんといふ風が氣振にも見えるから、又十郎、 又『さう云はずにマア乃公の云ふことを聞け。』と間がな隙きがな口說いたが、とう〱お玉を說落して父の目褄を忍んで怪しからん事に、好い情交と成りましたが、但馬守一向に御存知ございません、けれども惡い事は發覺易いものでございます、或一夜のことで宗矩閨房淋しく思召てお玉の部屋へお入來なさると、中でひそ〱話し聲がいたすから、 但『ハテ………今頃ほひ話し聲は………。』と中の樣子を窺ひますると、川柳に「能く聞けば猫が水飲音でなし」と云ふことがございます、 但『何でも怪しい奴が這入つて居るに違ひない。』と突然、 但『不義者見付けた………。』と中へ這入つて御覧なさると「盜賊を捕へて見れば我子なり」現在の豆盜賊は己の悴、餘りのことに呆れ返つたが、その儘御自分の一間へバラ〱〱〱お歸りなされました、 但『こりや誰ぞある。』 家來『ハ、ア………。』 但『平馬を鳥渡呼べ、早く平馬を呼べ。』 家『ハツ………。』大道寺平馬の方へ夜中ながら沙汰をいたしましたから、

平『珍事出來いたしたるか。』と兩手を問えて御前へ出で、 平『深夜に及んで火急のお召、何等の御用にござりまするか伺ひます。』 但『平馬、唯今予が玉の部屋へ參つたらば畜生が寢て居つた、手打にいたす可き奴なるが、彼を斬つては刀の汚れ、命は格別の情けで助けて遣はすが、屋敷へ置くことは稱はん萬事を其方に申付ける、早く行け。』 平『ハ、ア畏り

奉つります。』立上つて大道寺考へ、平『ハテナ、畜生が寢て居ると仰しやつたナ………ハ、ア殿は活物がお嫌ひだから、お玉がカメでも飼つて置いたのぢやアないか、(其頃カメなどを飼つて置く理由もございません)矮狗でも居たんでそれで御不興ぢやアないか。』と思ひましたから、玉の部屋へ這入らうといたす時、外から內の樣子を窺ひますると、又十郎の聲がいたすから喫驚いたして、平『ハ、アこれか、劍術は嫌ひだが、槍先の功名は中々激しいが始末に不可ん息子だ………と襖を開いてズイと這入つて參りましたから、流石に極りが惡いと見えて傍にあつた夜具を頭からスッポリ被つて仕舞ひました、平『若殿、何でお隱れなさるには及びません、濡れぬ先こそ露をも厭へで、かうなつた上はお隱れ遊ばしても無益でござる、お起き遊ばせ、若殿お起なさいませんか。』又『唯今起きます………イヤ平の字………。』平『これは驚き入つた、平の字とは何事であります。』又『否………平馬何だ。』平『若殿、貴郎の其御所業は何でございます。』又『何の所業だつて詮方がねえ、かういふ譯になつて仕舞つたのだ、今更取つて返しは出來ん理由、親爺が怒つて居るだらうなア。』平『お怒り遊ばすも御無理ではございません。』又『しかし其方が今云ふ通り、濡れぬ先こそ露をも厭へと云ふ通り、モウかう濡れちまつた上には厭はんぢや、玉もかう露

顯をした上は御手打になさると仰しやつたなら、共々に御手打になりまして、命は固より覺悟して居りますと、斯う彼も申して居る、身共の爲めには死んでも好いとまでに惚込んで居るんだ、縱令野の末山の奧手鍋を提げて暮すとも決して厭ひもいたしません、深山の奧の詫住居晝は小河に布晒し………。』平『何故こゝで歌をお唄ひなさる、斯くの如きの御所業では殆んだ此平馬は相愽もこそも盡果てゝ仕舞ひました。唯今御父上樣の言葉にも、畜生が寢て居る、手打にいたす可き奴なれども、刀の汚れ助けて遣るから屋敷を今宵の內に追拂つて仕舞へと仰しやいました、さるによつて此家に御在なさる事は稱ひません、早々にこゝを御退散願ひたう存じます。』又『ぢやア何か命は助かるか、命さへ助かりやアこんな屋敷に居る奴があるものか、梅干親爺八釜し爺イ、此方の壽命が短縮て仕舞ふ、こゝを出るは、ノウ〳〵といたす次第………だが是れ平馬金圓がなくてはいたし方がない、何卒其方一ッ金策いたして貰ひたい………。』平『承知いたしました。』これから百兩金をこれへ持參いたしまして、平『百金これにございます、此金を持參遊ばして一先孰へなりとも御立退を願ひます、和郎が御改心遊ばしますれば、拙者がどのやうにも御勘氣のお詫を致しましやうけれども、この御不行跡にては復び當御屋敷へお歸りはなりませんゾ、お斷

り申します。』又『乃公は固より歸る了見はないのだ、少しもどうか親爺に宜しう謂つて呉れ……サ、玉〱一緒に往け。』迷つて居るのは恐ろしいもので、お玉の掌を取つて木挽町の屋敷を深夜に及んで出でました、又『さて玉屋敷をかう兩人で出たは出たが何處へ行かうといふ當がない、如何いたさうのう。』玉『ハイ私の家は神田の三河町でございますから、妾家へお連申しませう、暫く妾許に御宿泊が宜しうございませう。』又『ア、さうか、それは千萬辱ない、さう云ふ事にして貰はう。』これから神田の三河町、お玉が實家まで參りました、ピッタリ閉つて寢入ばな、又『何處の家だ。』玉『此家でございます、妾が表を叩いて起します。』又『ア、さうか。』ドン〱〱 玉『阿父さん鳥渡此處を開けて下さいな……阿父さんモシ……阿父さん……。』ドン〱〱、玉『開けて下さいな、阿母さん……阿父さん。』三『誰だ……。』玉『玉ですよ。』三『ナニ玉だ……ウム……又失策て來やアがつたな、何處へ往つても〱尻の沈着ねえ詮方のねえ尼ッ女だ……何時だと思つて居るんだ間抜奴、今開けて遣るから待て……ヲイ〱婆さん〱お玉が歸つて來たから那處を開けて遣つて呉んな、ヲイ婆さん和女は寢坊だなア寢ると云ふと死んだ者同樣だ……ヲイ婆さん起きなよ……ヲイ婆さん起きねえかつてば。』婆『阿父さん何だ

へ妾を起して……和郎年甲斐もなくお止しよ。』三『エ、乃公が起すと必と異な處へ氣を廻しやアがつて、嫌な婆だつちやアねえ、お玉が歸つて來たから開けて遣んなと云ふに……。』婆『ヲヤお玉坊が歸つて來たかへ、オヤマア大變年齡を老たねえ。』三『何を寢惚けて居るんだへ、これは乃公ちやアねえか。』婆『ヲヤ〱道理で頭が禿けたと思つたよ。』三『困つた婆さんだなア、表に居るんだから開けて遣んねえ。』婆『和郎起きて居るんなら鳥渡開けて遣つてお呉れな。』三『年齡を老るとイケ無性になりやアがつて詮方がねえ、今開けて遣るから……。』と三右衞門立上つて鍵金を外しまして、ガラリ表の戸を開けて、
三『サ、此方へ這入れ、誰か一緒に尾いて來たやうぢやアないか。』といふ内にお玉に尾いてズイと這入つて參りました、黑縮緬の頭巾を被つて大小を横たへ、柳生の紋付いたる衣服を着流し、又『許せよ。』ズカ〱とお這入りなさる、三右衞門驚愕いたして兩手を支え
三『ヘエ御入用なさいまし、私は搗米屋三右衞門と申しまするものでございます、娘を妾に出します位ゆゑ、中々金子の蓄へはございません、金圓のあるのはこの二三軒先の角の伊勢屋と云ふ兩替屋がございますから、那處へお這入りを願ひます、小生宅はどうか御勘辨を願上げたう存じまするデ。』玉『阿父さん和郎何を云つてるんだへ、この方は柳生の若

殿様だよ。』三『オヤさうか、乃公ア押込だと思つた……それは〳〵能うお出遊ばしました。』又『玉、其方の親父か。』玉『ハイ。』又『三右衞門余は娘玉と不思議な縁で親許を勘當になりたるにより、玉と一緒に當分厄介になるんだ、何分頼むぞよ。』三『ヘエ、それは有難い仕合せでございます……。』大變な居候的が飛込んで來た、と思つたが、詮方がないお玉は親爺の慾張を存じて居りますから、玉『殿様、御土産を……御遣はし遊ばして。』又『オ、宜い。』と仰しやつて金子百兩そこへ出して、又『こりや〳〵三右衞門、これは大道寺平馬から心添をして呉れた、其方に遣はすによつて宜きなに計らつて呉れ。』白金と云へばその頃に宏大の金子、搗米屋三右衞門は福徳の三年目と心得て、三『先づお二階へお昇り遊ばして。』とこれからお玉と又十郎を己れの二階へ隱匿て居りました。二月、三月、四月、五月、六月と足掛五ヶ月程此家に足を留めて居る。實に又十郎女子に迷ひて、唯爲すこともなくブラ〳〵といたして居ります、格好六月の末の事、淺草の觀世音へ又十郎參詣に參りました。雷おこしを買つて戻つて參り、二階へ上つて見るとお玉は晝寢をして居ります、又『コリヤ玉よ其方の好きな雷おこしを買ふて來たぞ、サ茶を煎れて喰べんか……、起きんかお玉………。』と起しましたが前後を知らず熟睡いたして居ります、その寢

貌を又十郎つく〴〵眺めてお在でなすつたが思はずフラ〳〵と心が變りました。されば此の人間は迷ふも女でございまするが、覺るのも女子……北面の侍遠藤武者盛遠と申しまする人は、渡邊橋供養の折からに、渡邊渡の妻袈裟といふ者に迷ひまして、遂に渡を殺して己の妻にいたさうと思ひ、誤つて袈裟を討ちました、これにて己は覺悟を開いて僧侶となり、紀の國の那智の瀧にて荒行をいたし、不動の眞像を拜し、高雄山神護寺の住職文覺となり、大智識に相成りました。されば人間は迷つて見れば何も彼も無茶苦茶に分らなく成りますが、又覺つて見れば易い者になる、迷ひの道と覺りの道はその至る處は同じやうな者ぢやと申します。今まで婦人に又十郎迷ひに迷つてお在でなされたから婦女の不行跡が少しもお分りはなかつたものと見えまするが、寢顔をツク〴〵見て覺つて參りました

又『ア、ー寢想の惡さ……聖人の言葉にも男に寢顔を見せたる婦女は去るとあるが、寢顔どころではない夫の戻るのを知らず斯く婦女子の急所の臑を顯はして居る、實に不作法千萬とやいはん、斯樣なものに心を迷はせ父の配慮も顧みず、平馬の意見を水の泡といたして家を飛出せしは、又十郎生涯の過り、嘸かし父上は惡い奴とお怒りであらうわい、吾も未だ老いぬる身躰にあらざればこれより國々を廻つて武術を研き、一際勝れし腕となつ

て勘氣のお詫をいたし、家督相續に及んで、父上の心を安んじたらば人倫の道にも欠けぬであらう、ヲ、さうだ……。』と此の時に始めて婦人を捨てる氣にお成遊ばしたゆゑ、一通の遺書をいたして此所を退散いたされました。これより國々を廻つて何處でも道場がござりまするを其處へ飛込で他流試合をいたしましたるが、何處の道場へ往つてもポカ〳〵擲られる、もう河流れの鐵鎚頭の上る瀬もございません。國々を廻り〳〵備中の國の飯山へ參りまするを、こゝに下野國箕輪の上泉伊勢守といふ者の門人で羽賀井左衞門一心齋といふお方がございます、モウこの人は名人の奧を越えて居りまする眞影流の大先生、飯山に隱遁をいたして宛ら仙人といふやうなお方でございます、此人へ參りまして、　又『拙者は柳生の三男又十郎と申しまする者でござります、何卒御手許へ御置下さりまして武術をお敎へ下さりますやう、父に勘氣を受けて參りました者。』これ〳〵かう〳〵云ふ譯と江戸表にあつた己れの不行跡をば懺悔いたしまして賴みましたるによつて、一心齋承諾をいたされ、これより又十郎を手許へ置きまして武術を敎へましたが、敎ゆる者は針の如く、敎はる者は糸の如し、學んだりやな又十郎、足掛七ケ年の内に眞影流合氣の術まで、會得の腕前に至りました。此時羽賀井一心齋、又十郎に向ひ、　一『汝の武術、父の但馬に勝ると雖

とも劣る事なし、立歸つて父に勘氣の詫をなして家督相續をいたすべし、しかし羽賀井一心齋に學んだと申すな。』とのお言葉、又十郎大きに悦び萬々の御禮を申し上げまして江戸表へ立歸つて參りましたが、さて足掛七年以前に妾を連れて、勘氣を受けて居りまする身躰ゆゑに、どうも屋敷の閾が高くて這入る事が出來ません。　又『誰か詫事をする人を一人賴まんければならん、誰が宜からうか……。』と考へましたが思ひ付いたは大久保彦左衞門忠敎老人、宗矩公とは義の御兄弟であるによつて、　又『駿河臺の叔父上を賴んで詫言をいたすが一番宜からん。』とこれから又十郎は駿河臺錦之小路大久保の家に參りまして玄關へ立上り、　又『賴まう……。』　○『ドーレ。』と出て參りましたのは用人の笹尾喜内と云ふ者、兩手を仕へて恭々しく、　喜『ハヽア孰れから御入來でございまする。』と不圖顏を上げて見ると、七年山に居て櫛も入れませんから、頭はモウ繁つた藪の如く、髯はぼう〳〵として髯の中から烏渡覗いて居るかと思ふばかり、彼の畫きたる仙人に彷彿、禿げちよろけた大小を差して荒布の行列見たやうな着類を着て、狸の土船を見たやうな草鞋を穿いたる儘立つて居りましたるから、　喜『コレ何だ大風な言を申して、玄關から參り居つて……御臺處の方から何故廻らん、失禮な奴だ。』　又『喜内久しう逢はなんだが無事で好いな。』

喜『何生意氣な………己の姓名なぞを存じて白痴奴………全躰其方は何者だ………。』又『見忘れしか柳生又十郎ぢやが分らんか。』喜『エ、ッ………（見上げて）ヲ、成程柳生の若樣でお在で遊ばしましたるか、失禮なる事を申し上げて甚だ相濟みません、御勘辨を願ひます、どう遊ばしまして………。』又『ヤいろ〱仔細のある事だがこれでも苦勞をいたして來たヨ。』喜『ハア左樣か。』又『叔父上は御在宅か。』喜『ハイ御奥でございます。』又『御目通りをいたしたい、宜しう其方から取次を頼む。』喜『暫く御控へを願ひます。』喜内奥へ參ると、大久保彥左衞門丁度書見をして居られますところ、喜『申し上げます。』彥『何ぢや。』喜『唯今甥御樣が御入來遊ばしました。』彥『オ、誰だ、玄蕃が來たか、舍人が來たかそれとも荒之助が參つたか。』喜『柳生家の御三男、又十郎樣でございます。』彥『ナニ柳生の三男又十郎………あれは慥か六七年跡の事勘當を受けて、孰れかへ行方知れずになつて居たあの者か。』喜『ハイ。』彥『ウーム………どんな扮裝をして來た。』喜『イヤモウ、どうももお話しにならん恐ろしい見苦しいお身裝でございます。』彥『さうか親に離れて乞食でもいたして居るのであらうかノー、何は兎もあれ會つて遣らうから庭から椽端へ通せ。』喜『承知いたしました………此方へ………。』と云つてこれから笹尾喜内が又十郎を庭の切戶口

から案内をいたしまして椽先へ連れて參りました。お椽に兩手を支へ又十郎平伏をして居る樣子、彥左衞門ジロリと御覽なされて、彥『又十郎か。』又『コレは〱叔父上には御壯健に渡らせられ恐悦に存じ奉ります。』彥『其方も變る事がないと云ひたいが、其方の姿は大層變つた、屋敷に居る時は色の生白ろいデレリとして好かん奴だと思つて居たが、今見れば中々豪傑然たる顏色に相成つた、しかし其方は不孝をいたした、其方が屋敷へ參ると其方の父は愚痴を申す、予は三人の男子を持ちながら、重兵衞も刑部も役にも立たん、唯其方のみを杖とも柱とも思ふて居たのが放蕩をいたして行衞知れずになつて居る、予の如き不運の者はないと、常に愚痴を申して居るが、實に氣の毒な理由だ、何處へ今まで徃つて居たんだ、マアその扮は何だ。』又『私も一度は女子に迷ひまして父に勘當を受けましたが、半途で改心をいたして、それより國々を往來いたし、遂に鞍馬へ登山いたしまして、魔神に逢ひ、それより武藝を授かりまして、今では日本無双の名人に相成つて立歸りました、何卒叔父上より勘氣のお詫をなし下さりますやうお願ひ申し上げます、好しなにお計ひの程願ひます。』彥『ナニ鞍馬へ徃つて天狗に劍術を授はつて日本一の名人になつたと、誇大な事をいひ居るなア、然らば但馬守と立會つたら、如何である。』又『されば父の四人

位一つに懸りましても恐れません。』彦『ハッハ、其方は天狗に授はつて天狗になつて歸つて來た……が、コレ藥能書程利かずと云ふ、其方の喋舌るのを乃公は正當とは思へん、然らば實地の腕を一ツ見て、成程これではと思つたら隨分勘氣の詫言をいたすまいものでもない、サ汝の技術を此彦左衛門に見せろ。』又『承知をいたしました、御胡亂と思召すなれば御覺に入れませう。』と又十郎回顧つて見るとカナリヤの籠がそこにございます、そのカナリヤの籠のそばへ參りまして、そのカナリヤの籠を手許へグイと引寄せて、網戸の開けましたるによつて、一羽のカナリヤがバッと飛び出さうといたしましたるのを、又『エイ……。』と氣合を籠めました時に、そのカナリヤは飛ぶことが出來ず、氣合に押れてバッタリと椽に落ちましたる樣子、それを摑んで籠の中へ固の通り入れまして、又『エイヤッ……。』と氣合を許すと以前に歸へり、止り木にチヨイ〱止つて飛んで居りまする有樣、又『エ、叔父上先づ鳥渡したところが斯う云ふ術をいたします。』彦左衛門見て居りましたが、彦『フン……其方は劍術は二の次で手品から先へ習つたな、巧いことをいたす』又『これは怪しからん、手品ではござらん、凡てこれがその合氣の術と申して氣合でございます。』彦『成程巧いな感服をいたした、その技術なれば父の但馬に勝つて居るであらう

諾し乃公が詫言をして遣らう……ぢやが其方の親爺は恐ろしい頑固な奴ぢやから、其方を唯連れて往つては一旦勘當いたしたる者は棄たも同樣許すことはならんと、必らずスッタ揉んだ彼是いふに違ひない、さういはずにどうかなどとピヨコ〱お辭義をするのが嫌ひだから、向ふで以て勘當を許しませうと、かう一ついはせたい、それには先へ其方の腕前を見せんければ不可んのぢやが、どうだ親爺と立會つてそれから後に乃公が勘氣の詫言をいたす、乃公が其方を連れて往つて、南部の恐山から來た山人だと僞はるのだ、宜いか木挽町の屋敷へ往つたら口を利いてはならんぞ、口を利くと露顯をするから……、聲と云ふものは違ふものでは無いに由て、口を利ねば忰と思ふ氣遣ひない、それから乃公が勘當の詫をして遣る。』又『宜しうござる、何卒何分願ひます。』彦『承知いたした、サ一緒に來い。』これから又十郎を引連れまして彦左衛門、木挽町の屋敷へ參りました。但馬守宗矩殿は玄關までお迎ひに出でられ、但『イヤ駿河臺の兄上能う御入來……。』彦『イヤ但馬殿今日は少と好く參らない、お氣の毒なことを聞かせなければならん、エ、柳生の家が立つか滅れるかと云ふ話し、委しいことは那處へ往つてお話し申す、俺の連れて來た山男次の間へ控へさせて下さい。』と奥へ參つて、彦『さて今日連れて參つたるは南部の恐山から

出た山男、此人が劔術の大名人、其者の申すには柳生但馬守は天下の名人の聞えある者ぢやけれども、麒麟も老いぬれば駑馬に劣ると云ふ事があるによつて、拙者どうか立會を仰せ付けられたい、萬一但馬守に打勝つたる以上は、一萬石は頂戴いたさず二千石でも御奉公いたしたい、然らばといふことで松平房州へ其者がお預けになつて、近々吹上に於て上覽試合があるさうだが、若しも其方が負けやうもんなら、一萬石を召上げられて切腹でもせんければならんやうな事になる、その柳生家生死の場合、なか〳〵等閑にいたしては大變だによつて、房州に對面をいたして其者を引連れて參つた、内々で一つ立會をいたして見たが宜からうと思ふが、如何なものであらう。』但『それは眞實の事でございますか。』彥『何で乃公が虛言を吐くものか。』但『然らば此處へ鳥渡御連れ下さいまするやうに………對面をいたします。』彥『さうか、ちやア呼ばう鳥渡此處へ……。』柳生の一間置いた此方に平伏をいたして居ります、彥『但馬那者だ。』但『不潔い奴でござるな。』彥『山男だから詮方がない。』但『あの者が拙者と立會ひたいと申しまするか。』彥『左樣。』但『ア、大久保兄上、世の中に此但馬程不運なものはござらん。三人男子を持ちました其伜三名共に役に立ちません、然が中にもあの又十郎、七年以前に家出をいたして行方知らず、不孝な奴程不愍が增すもの、憐れ彼奴が正道にて武藝を研き、家督相續いたして吳れゝば、疾くに隱居願を出して、是等如き者に麒麟も老いぬれば駑馬にひさしとは云はれまい、老人で指南をいたしまするによつて、斯く將軍の御耻辱を引出し奉る、但馬の不幸此上の事候はず胸中御推察下さりまするやう。』と無念の涙はハラ〳〵〳〵と、膝に落すを又十郎承つて居つたが、又『恐れ入つたる御言葉なり、七年以前に家出いたせし又十郎、これに控へてをります、お懷しや父上と、云ふに云へざる此塲の仕宜、情けなき事にぞある。』と又十郎唯差俯向いて涙に暮るばかりであります。大久保彥左衞門も親子の心を酌みましたが、ドングリ眼からボロリ〳〵と涙を落したが、やがての事に涙押拭つて、彥『コレは〳〵、但馬殿意氣地のない事を云ふ、然んな弱い事を云つちやア不可ないよ、それは愚痴といふものだ、必らずそんなことを云ひ給ふな、サ、、立會が肝要だからそろ〳〵御準備を……

但『ヤ大きに愚痴を申して相濟まん、何卒未練者とお笑ひ下さるな。』道場へ參りましてこれから但馬守國俊の大刀を取上げて、但『サ仕度をして此處へ出でよ。』と身搆へをいたしたから、彥左衞門は、彥『これはしたり柳生殿今日は竹刀木刀の立會だ、眞劔勝負ではないによつてどうも眞劔を持つては困る、木刀を持つて立會つて貰ひたい。』但『拙者は眞劔

を持ちます、吾幸ひにして勝てば天下に捨置譯には參りませんから、一刀兩斷に斬捨る、又彼に叶はん位なら到底切腹せんければならん身躰、彼が刃の下に一層消失るでござる、どうか眞劍勝負を願ひます。』何と云つても宗矩には聞き入れませんから、又十郎に此事を申すと、　又『父の向ふへ廻りて眞劍を持ちまする譯には參りませんが、無手では誠に失禮外に何か得物がありさうなもの………。』と那方此方を見廻すと塗笠二蓋、　又『コレ僥倖………の得物。』と右の二蓋の塗笠を持つて但馬守と試合に及ぶ、柳生家の親子試合のお話しより、前回の續き奉書試合の講談を次回に悉しく言上いたします。

第九回　柳生二蓋笠の試合

辯じ續きまする伊賀の仇討………柳生親子試合の件りでございまして、木挽町の柳生但馬守道場へ大久保彥左衞門が悴の又十郎を南部の恐山の山男なりと僞りまして、父の宗矩と試合をいたさせました。但馬守これを誠と心得て眞劍を以て向ふへ廻りました時に、又十郎は二蓋の塗笠を以て父の相手をいたします、左右の手に一蓋づゝ持ちまして、右を上段に被り左を中段に取つて身構へをいたしました。控へ居るところへ宗矩に唯一刀と、

但『エイ………。』の矢聲諸共に頭上より斬掛けましたるを、飄然躰を開いたるは實に目も留らぬばかり、宗矩早くも刀を取り直して横に拂ひましたるを、又十郎小手下を搔くゞり　又『ヤツ。』と矢聲と諸共に、左の手に持つたる塗笠を父の但馬守に打附けました、眼眩んでタジ〳〵〳〵ド、、と後に倒れまする、無念と思ひ起上らうといたした時、右手に持つたる笠を頭からスポリ被して仕舞ひました。宗矩さながら雷門の定見世、飛んだり躍たりを見たやうなる風になりました、又十郎は其儘跡へ退つて兩手を支え平伏をいたして居ります。大久保彥左衞門はホツと一息ついて、　彥『ヤレ巧く行つた。』と心中思ふて居りまする と宗矩徐々笠を取除け、　但『ハ、ア天晴感服いたしたる技術、徳川家未だ武道盛んなり、誠に悅こばしう存ずる、斯樣なる名人ありとも知らず、拙者未熟の技術を以て指南役をいたしたるは將軍へ對して申譯之れなく、お詫には但馬これにて切腹を仕る、大久保氏拙者の一萬石は先祖の功も有之まする、何卒半地なりともお立置下さるやう御取りなし願ひ申し上げます。』といひ樣に既に刀を逆手に持つて、突立てやうといたしまするから、彥左衞門その手を確かと押へ、　彥『但馬切腹には及ばん、暫く止れ、目出度………ア、目出度………。』と頻りに申しまするから、　但馬守何が目出度のだか分らない、　但『人が腹を切

らうと云ふのに目出度と云ふ奴もないものだ。』と思つて居りまして、但『大久保の兄上、拙者が切腹をいたすを目出度と仰せられるは如何なる理由でござる。』彦『イヤ其方は理由を知らんからである、それに控へて居るは何を隠さう、其方の悴又十郎であるわい、其方から勘氣を受けて後七ヶ年一心に武術を修行いたしてかゝる技術となつて立歸つて參つたシテこの彦左衞門に勘氣の詫言を頼む、拙者も技術を試したるところ天晴勝れし名人と思つたにより、其腕を御身に見せ、然かして勘氣の詫言をいたして遣らんと思ひ、態と南部の恐山の山男なりと貴公を僞つて立會をいたさせたのぢや、どうか勘氣の詫言を俺がする許して遣つて下さるやうお頼み申す。』と始めて明す彦左衞門の一言を聞いて宗矩喫驚仰天

但『さては拙者の悴又十郎でございましたか、ハヽー唯今まで氣が注きませんでした、勘氣は許して遣はしまする……コリヤ悴面を上げい……。』と云はれし時に恐る〳〵頭を擡げたる又十郎、又『父上久々にて御目通り仕りまする、唯今までの不孝の大罪御宥免の程願ひ上奉りまする……。』と言葉を聞いて但馬守は姿形狀は變れども變らぬものは音聲、但『成程吾子に相違ない、近く進め……。』と親と子が手に手を取つて、永年振の對面、顏と顏とを見合して暫しの間悦び涙に暮れました。大久保彦左衞門も大きに悦び遊

ばして、彦『どうぢや但馬殿、目出度からうな。』但『ハイ……駿河臺の兄上、御貴殿程亂暴な人をこの宗矩は見た事がない。』彦『何故……。』但『何故といふて拙者の悴といふ事を先々から御存じて有りながら、私に眞劍を持たせるといふことはございません、若し悴を斬つて仕舞つたらば貴郎は何うなさる積り。』彦『今そんな八釜しい事をいつたつて詮方がない、御身が眞劍を持つてもなか〳〵此者には遠く及ばんと乃公が鑑定をいたして參つた。二蓋の塗笠を持つて相手をした那の樣子、どうぢや吾子ながら尊公驚いたらう、笠を顏へ被せられて尻餅を突いて起上らうといふ處を、亦頭から笠をポカツと被せられて動くことが出來ない、ギウ〳〵云つて困つて居る尊公あれではどうも一萬石頂戴する將軍の御指南役とは受取れんナ。』但『イヤモウ面目次第もございません。』彦『どうだい但馬、貴公隱居をして悴に家督を讓りなさい、將軍御前はこの彦左衞門必らず好いやうに取計らうから……。』但『それは千萬辱けない、何分宜しく願ひまする。』とこれから宗矩は隱居をいたし、又十郎指南役仰せ付けられ家督相續柳生飛驒守宗冬と改名をいたしました。スルと殿中を大久保彦左衞門巨大な聲を揚げて吹聽して歩きます。彦『一同お聞きなさい、今度の指南役柳生飛驒守は父の但馬守より百段も好う出來ます、實に巧いもんぢや、どうも

今時の若い野郎は雨降上句の茸野郎、ピヨコ〳〵頭を持上げるが碌な奴はありやアしない其の內よりあの樣な若者ながら天下の名人、イヤ日本未だ武道隆んなる事、實に悅ばしう存ずる、飛驒は天下の名人だ、あれは英雄者だ……飛驒は天下の名人だ。』と大久保彥左衞門は殿中を呶鳴り立つて歩きまする、三代將軍家光公聞し召して、元來家光公は御武勇活達なる將軍に渡らせられ、德川家の三代は智仁勇三德で治めましたさうでございます、恐れながら日光樣（家康）は智を以つて治め、二代の秀忠公は仁を以て治め、三代家光公は勇を以て治め遊ばさるると云ふ、されば「智仁勇は御代の御寶」とか申しました、それを何者が間違へましたか「チ、ンプイ〳〵器用の御寶」と云ひ違ひましたのでございます……それほど武道激しき將軍でございまするによつて、大久保彥左衞門が餘り飛驒守を賞まするによつて小面の憎い事と思召して、家光『どれ程の腕前だか、今日飛驒を試して見やう。』と思召て御側に控へて居ります、御旗本大島運四郎松平紋太郎を御呼びなされて家光『コリヤ其方共兩名へ申付けるが、今日飛驒が目通りへ出でたらば不意に宗冬を打つて見ヨ。』運『ハ、吾々共兩名が飛驒を打ちまするのかな。』家『如何にも……。』紋『願はくば上意と云ふ聲を懸けましても……。』家『ヲ、苦しうない許す。』兩人『有難い仕合でございます。』兩人は悅びました。上意と云へば天下御免で人が打擲れまする、兩人『一番飛驒守を小つ酷く打叩いて遣らう……。』と兩人は將軍の左右に控へて居りまする、後へ木劍を用意いたして居りましたところへ、飛驒守宗冬ッ、ッ、ッ、ッと御前へ兩手を支え、飛『麗はしう渡らせられ、恐悅に存じ奉ります、御稽古仕りまする聞だ、御道場へ御供仰せ付けられまするやうに……。』家『飛驒……大儀ぢや、參るであらう。』飛『ハ、ア。』と宗冬公平伏をいたするところを、兩人『上意……。』と云ふ聲諸共、運四郎、紋太郎左右からピシーリ打ちますると、、コキンと云ふ音がいたしました、將軍家は、家『氣味能く兩人が打つたのであらうと思ひまするど飛驒守横疊三疊程遙かへ飛退つて、飛『これは將軍の御戲れかと思ひます、かゝる時は藝道の氣合が立んもの……、飛驒御暇を頂戴仕ります。』スーッと退つて仕舞つた。コキンと云ふ音の致しましたのは、大島運四郎の木劍が松平紋太郎の肩口、松平紋太郎の木劍が大島運四郎の小鬢の處を、コキンと合討をいたして、兩人『參つた〳〵……。』運『ヲ、痛い……。』將軍呆れ返つてお仕舞ひなさつた、しかし御自分が申付けたのだから御叱言を遊ばす譯にも不可ん、苦い顏を遊ばして、家『運四郎、紋太郎誠に其方達には氣の毒に存ずるぞ。』兩人『痛み入りました。』これは誠に痛

みズつたに相違ない、家『其方兩人が悠い譯ではない、飛驒が速かつたのだ。』紋『ヘエ同じでございます。』運四郎紋太郎苦々しい顏をして面目次第もなく控へて居る、處へ大久保彥左衞門ツカ〱と這入つて來て一禮を爲し、彥『上には今日飛驒を御試しがございましたさうでございまして……アヽ、運四郎と紋太郎と相打をいしたるよし、……飛驒守は天下の名人でございます、これに控へて居る運四や紋太などは所謂雨上りの茸野郎此茸に打たれるやうな飛驒では天下の御指南役は勤まらん……運四や紋太は茸でございます、意氣地がないのに頭を出す……。』イヤ運四郎、紋太郎恐るまい事か、運『この親爺奴口の惡い事を申して、乃公の事を運四だの茸だのと云やアがつて己覺えて居ろ。』と兩人の心中は燃るが如く、將軍家も何故そんな事を云ふと云ふ譯にも行かず、良あつて家光公、家『こりや親爺、今日は失策たが、明日は予自身で宗冬を打叩いて見せる……。』彥『上樣御試しに相成りますか……ヤ上の御試しは又格別でござらう、親爺は隙見をいたして居つても宜しうございますか。』家『其方隙見をいたして居れ。』彥『有難き仕合せ……。』と彥左衞門其日は退りました。家光公に於ては、家『明日飛驒をどういふ鹽梅にいたして討込んで遣らう、なか〱彼奴も隙がない奴……ハテ好きな道には心を奪はれるとやら、これは一番彼奴の好きな道へ引込んで置いて討込んで遣らう……。』と思召て、家『飛驒の好むものは何ぢや……。』と尋ねますと、臣『小鳥を大層好みますさうでござる……。』と將軍御聞き遊ばされて、小禽の籠を御手許へ積重ね、傍へ置炬燵を拵へ遊ばして、その炬燵櫓の上に木劔を一本用意いたして、此の上から御蒲團を懸けまして整然して御出なさる、家『今に飛驒が來るであらう……。』と待つて居る處へ宗冬、飛『麗はしう渡らせられます、御道場へ御供仕りまするでございませう。』家『ヲ、飛驒昨日は其方を運四郞紋太郎へ申付けて無禮をいたした許せヨ。』飛『ヘエ恐れ入奉ります、あれは上の御戲れでございますか……。』家『鳥渡戲れた、今日は又強う感じるな。』飛『左樣でございます、今日は寒さが別になつて參りました。』家『近う進め、近う進んで小手暖めろ冷ては思ふやうに竹刀が使へん……近ふ進んで此中へ手を入れい、苦しうない、暖れ。』飛『ハヽ恐れ入奉ります。』家『ハテ……遠慮するには及ばん、遠慮は無用であるぞヨ近う進んで……サ、この中へ。』飛『恐れ入ります。』恐れ入られて遠くに居られちやア謀計が畫餅になるから口を酸くして遂々身近うお呼びなされて、家『手を入れろ飛驒……其方に小禽を好むと云ふを承はつたから、其方に見せる積りで此處へ積置いた、どれが宜

い其方が好むのを遣はす、どれが能いか申せ。』飛『有難う存じます、ア、ーこれは名鳥でございますな、ハア結搆な………ハア此鳥はどうも名鳥でございます。』と好きな道故に飛驒守は眼も放たず見て居ります、向ふへ心を奪はれて油斷をして居る躰、家『此處ぞ……』と思ふて蒲團の下へ入れて置いたる木劍を密と將軍抜うと思召さ、ジロリと宗冬が將軍の御手許へ目を注け、油斷をいたしません樣子、三代公も柳生流の免許までお取りなさる技術を以て居るから、向ふに隙のないのは分る、家『ア、今は不可なん……。』と思召て、家『コレ飛驒、能く見ろ、どれが宜い、ヨーク向ふを見る心に適つたるを其方に遣はす』飛『どうも結搆な鳥………これは珍鳥でございます。』と又もや見て居りますから拔かうとするとジロリ手許を見返す、鳥を見て居るやうな見ないやうに可笑しな變テコな、異な奇妙な怪訝な、テケレツな鹽梅でございますから、將軍は木劍を出したり入れたり、モジ〳〵して居るのを飛驒守目を注けて、飛『さては上樣今日も御戲れがあるな。』と思召てそれからは飛驒守は油斷をいたしません、浮世の話しを二ッ三ッいたしまする內に、宗冬は密と中を探つて見ると木劍が這入つて居るのに觸りましたから、飛『アッ、、これぢやな。』と思召すと、將軍に知れんやうに懷中から白紙を出して膝の下で細く切つて、紙捻の

太いのを三四本拵らへ、又置こたつへ手を入れてこたつ櫓と木劍と確かり、一緒に其紙捻を三本ばかりで結付けて仕舞ひましたが、蒲團の下の細工だから將軍少しも御承知ありません。

跡は宗冬の身躰隙だらけ、飛『元來此飛驒は小鳥を好みまする、こんな結搆なものはございません、ア、結搆でございます、この音を發しまする工合………此鳥は名鳥で、これを飛驒頂戴を致したうございます………これも頂戴いたします。』と延上つて餘念ない。家『いよ〳〵油斷………。』と思召して、家『ヤッ………。』と木劍を振上げるとたん、炬燵櫓ぐるみ持上つて灰神樂がパッと立ちまするのを、宗冬公これを見るとヒラリ跡へ飛退り飛『又しても上の御戲れと心得まする、かゝる時は藝道氣合の立んもの、飛驒御暇を頂戴仕りまする。』ズイッとお歸りなさる、將軍灰を被つて呆氣に取られて居らせれると、彼隙見をして居た大久保忠敎、軈ての事に立出て扇を開いて、彥『イヤどうも天晴々々、充分お試しなされた、炬燵櫓を振廻したる勢ひなどは天晴劍術御名人。』家『餘まり稱揚るな那奴誠にどうも素早い奴であつて、彼の目に謀られた、何時結ひ付けたか一向予は心得んで居た、成程太刀風三寸にして身を變す………感心をいたした。』彥『上いよ〳〵御感服を

遊ばしましたか。』家『どうも飛騨は名人ぢやな。』彦『しかし此彦左衛門なれば、彼を充分驚かして遣ります。』家『其方出來るか……。』彦『憚りながら今は斯く老耄いたしたりと雖ども、未だ大久保平助十六歳の折から、天正三年鳶巣焚字山に於て一番乘、一番槍、一番首の功名を顯はして數十度の難戰に活殘つたこの親爺。』家『始まつた……シテ飛騨をどうして驚かす。』彦『それは謀計事でございます、なか／＼尋常では那奴強い奴でございます、よつて計略で彼を驚かすより外はない、明日飛騨が出でましたらば兩日其方の技術を試したるところ、天晴感服をいたした、今日は飛騨へ御褒美を取らする、親爺飛騨へ褒美を遣はせと仰せがござりまするど、拙者黄金五枚、これは上何卒御奮發を願ひます、これを三寶に載せまして左へ持ちまして右の手へ私が鍋墨を掴んで、上よりの御褒美有難く頂戴いたせ、有難き仕合せと、ヒヨックリ顔を擡げまして兩の手で三寶を取つて手がふさがつて居りまする處を、鍋墨を飛騨守へクル／＼と撫摺て眞黒にしてアツと笑つて遣ります る。』家『これは面白い一番遣れ／＼。』彦『委細承知をいたしました。』將軍樣は黄金五枚出されたのを受取つて、彦『先／＼商法に在附いた……。』と心得、その翌日を待つて居りまする、ところへ飛騨守宗冬は兩日のお試しでござりまするによつて、飛『今日も又何樣な

ることをするやも知れず。』と毫も油斷をいたしましません。八方へ眼を配つて御前へ兩手を仕へ、飛『快晴を仕りまして麗はしう渡らせられ、恐悅に存じます。』家『オ、飛騨か……。』飛『ハ、ア。』家『ア、其方を兩日試したが天晴、其方の腕前感服をいたした、今日は家光が其方に褒美を遣はすぞよ。』飛『有難い仕合……。』家『コレ彦左、飛騨へ褒美を取せい。』大久保彦左衛門、彦『畏りましてございまする……。』と黄金五枚三寶へ載せて左の手に持つて右の手には鍋墨を握つて居る、彦『コリヤ飛騨、上より御褒美を下さる、有難く頂戴をいたせ。』飛『有難い仕合にございます。』彦左衛門黄金五枚の内二枚鳥渡懷中へ入れて、跡三枚を素知らぬ顏で、彦『サ有難く頂戴仕れ……。』飛『有難いことでございます、これへどうぞ頂戴を。』と左の手をズイと差出して、右の手は己の膝へピツタリと着けて居ります、彦左衛門は、彦『兩手で三寶を押頂くであらう。』と思ひの外で、この体、彦『コレ飛騨有難く頂戴をいたせ、上より下さるのであるから……。』飛『否これにて宜しうございます、有難く頂戴を仕りまする、どうぞ此方へ。』と三寶をグイと持つてズイと斯う飛騨守が引いて參りました。彦『今は之までなり。』とモウ詮方がないから、大久保老人突然、彦『上意だ……。』と云つて鍋墨を擦らうとすると、右の手が明いて居つた

から、飛『ヤツ……。』と云ふと、大久保の手ッ首を押へて、飛『コレはしたり大久保氏叔父上までお戯れ遊ばすか。』と押しましたから、彦左衛門己の手を持つて己の顔へ手を附ける、それをクル〳〵廻されたから堪りません、彦左衛門眞黒〳〵に塗られて仕舞ひました。宗冬後へ退つて双の手を仕へ、飛『今日も又々上の御惡戯かゝる時は藝道御氣合の立たん者、飛驒御免を蒙むる。』と御褒美を懐中いたしてツ、、、と退つて行く樣子、大久保彦左衛門は、彦『こりやア何うも驚いた……ブーウプ、どうも驚いた……。』と黑い手で撫るから、とう〳〵眞黑になつて仕舞ひました。』家『何だ親爺、その顔色は……。』

彦『これは其丹波の國から擒りました荒熊でございます、一ツ啼いて御覧に入ますゴー……。』と極りが惡いから胡魔化して居る機會に、恰好懐中へ入れて置いた黄金二枚がバッタリ落ちた、彦『これは大變……商法露顯をしちやア大變……。』と急いで押隠す、家『コレ〳〵親爺、ピッカリ光つたものは何ぢや。』彦『これは唯今の塗られ賃……。』家『高い塗られ賃があればあるもの……アヽー飛驒は小天狗なり。』と仰せられて、いよ〳〵敬服なされ、一生懸命武術をお研きなさるによつて、上を學ぶの下皆々柳生流を學ばんければ白痴だ呆けと各々柳生流を尊び、飛驒守小天狗と云ふ異名を取り、天下の名人と

人に申されて居りまする、その宗冬殿が牛込の神樂坂に町道場を開きし浪人劍士、荒木又右衛門源義村と云へる者、更らに木挽町の屋敷へ沙汰をいたしませんにより、飛『此者をば實地技術を取調べんと、お呼び出しに相成りまして、道場に引込んで柳生流天地人三卷の極意をお尋ねに相成る、これが極意調、それより奉書試合の一件り次回に委しく言上いたします。

第十回 又右衛門の仕官

さて伺ひ續きに相成りましたる講談、さて柳生飛驒守宗冬の傳記を申上げましたのでございます、その飛驒守を將軍が小天狗ぢやと御賞しなされまして、劍術を一心に御勉强でございます、上を學ぶの下で、大名旗本皆飛驒守宗冬の門に入りまして、柳生流を習ひます。去れば宗冬の勢ひはます〳〵盛んでございましたるが、牛込神樂坂に町道場を開きし浪人劍客荒木又右衛門が、柳生眞流の流名を顯はしまして、門人を取立てまするによつて此者の流義全く柳生眞流の技倆なるか取詮さんければなりませんによつて、大道寺平馬を牛込へ使ひに遣はしまして、又右衛門を道場へ呼び寄せました。而してだん〳〵と取詮し

又右衞門の仕官

て見ますると伊賀の國阿部郡荒木村の郷士、荒木彦太夫の悴幼名丑之助、十六歳の年柳生重兵衞光吉の門に入り、一萬千六百八十四名の門弟の內より、擢んでゝ天地人三卷の極意を許されまして、免許狀に添へて源太光世の大刀に忠義の脇差、南蠻鐵骨一尺二寸の扇親骨に金象眼で「降るたびに積らぬさきにはらへかし、雪には折れぬ青柳の枝」と彫付けてあるのは光吉公の御秘藏の品、それを又右衞門に下されました、その事を審らかに飛驒公へ言上をいたしました時に、宗冬始終を承つて仰せあるには、飛『何故それ程の者なれば、其時此木挽町屋敷へ申出でんのだ……。』此時又右衞門、又『然ればに候、私大坂堂島に道場を開く事五年間、其折近火のございまして誤つて免許狀を燒失いたしました、されば證據なければ御屋敷へ罷出ても益ない事、如何いたさんと唯今まで延引をいたしまして申譯の申さうやうもございません、取敢ず今日お目通り仕りましてございまするが、例へ免許狀は無之とも腕に覺えの柳生流、お試し下さりますれば、速かに天地人の三卷の極意を此處にて顯はしまして御覽に入れます。』宗冬これを聞かれて、飛『ヲ、賢くも申したり、然らば汝に問ふぞ……。』持てる刀の中柄に手を掛けてギラリとばかり拔き放す、又右衞門身に寸鐵も帶びざれば早くも後の弓矢八幡宮に捧げてある神酒の口になつて居る

越前奉書をば取るより早く、それをしごひて、柳生流片眼外しの青眼の一ト手ピッタリと着けましたる其技術と云ふものは實に驚くばかり、肌撓まず目まぢろがず、鵜の毛で突いた程の隙もございません、流石の天下指南役小天狗といはれし柳生飛驒守宗冬公も振り上げたる一刀、毫の隙もなきにより打込むことが出來ず、暫し猶豫に及んだ……と申しますれば、これを奉書試合と申しますのでございまするが、これは又右衞門を強く見せやうと思ふて後世拵らへましたものでございます、豈夫奉書試合をいたさいでも此所に於て天地人の極意を詮してその申開きさへあればそれにて事濟でございます、天下の指南役柳生飛驒守宗冬公、技術が、浪人劍客荒木又右衞門如きに劣るやうでは將軍の御指南役は勤まりますまい。これは柳生宗冬公の御技術の方が勝れて居らなければならんと思ひます、奉書をしごいて身構へをしたればとて、眞劍を振つてそれを打込めんと云ふ程の鈍い腕では、お氣の毒だが天下の指南役は少と覺束んやうな理由、これは又右衞門を賞めやう〳〵として却つて飛驒守に瑕玼を附けるやうな事に相成りますさて申上げると臺なしにして仕舞ふやうな事に相成ります、この天地人三卷の極意調べと申しまするは芝隱し、白刄取、片目外しの青眼の三通りを然申しまして、それを取調べましたるところ、荒木が光吉公より

又右衛門の仕官

譲受けたる柳生流技術を飛騨公へ言上をいたしまするより、宗冬公これを御聞きなさいまして、飛『成程其方は兄光吉より譲られたる柳生流の極意に相違ない天晴疑念晴れたり。』と仰せあつて先これにて事済みになりましたのでございまするが、ざう申上げると物事誠に面白からんによつて、其處で威勢好く立會はして、幾分か諸君に御悦ばせ申すやうにお饒舌をいたしたものと相見えます、この奉書試合といふことは後世で拵へた全くない事でございまするとの噂でございます、さて宗冬は柳生流天地人三巻の極意を取調べ、飛『汝如き豪傑を浪人の劔客者にて差置くは殘念なり、早々主取をいたす可し、僥倖門下の諸

候も參られて御在すによつてお目通りを願はして遣はさう、暫く控へろ……。』と宗冬公道場を出でられ給ふ、暫く經過て大道寺平馬入變ッて又右衛門の前へ兩手を突いて、平『荒木先生、本日は御苦勞千萬でございます、主人宗冬の申付によつて失禮ながら該衣を御召下さいまして、此方の座敷へ御通りを願ひます。』と持つて參りましたのは黒羽二重、二蓋笠五個處紋着いたる衣類一重ね、同じく上下とを持つて參りまして又右衛門に呉れましたから、荒木は、又『有難仕合せ……。』と己の木綿衣類五個處の紋着いたる衣物を脱ぎ捨て、これから黒羽二重二蓋笠の衣服上下を着しましたが、宗冬は小躰なる方、又右衛門は身の幹六尺三寸ございまするから、着るとまるで御坊さん御成人といふやうな鹽梅しき、ツンツルテンで誠に可笑いが、身裄にも振

にも關ふ方でございません、それを召されて上下を着いたし、これから飛驒守宗冬公の後へ尾いて此方の座敷へ參りまするゝ、本多大内記正勝・井伊掃部頭・立花將監等を始め、其處にお扣へでございます、宗冬公兩手を仕へ、飛『唯今牛込の樂坂に町道場を開きし浪人劔客荒木又右衛門なる者、兄重兵衛光吉が讓りし處の極意の者でございます、宗冬に勝ると雖ども劣ちざる勇士、何卒お言葉を下し給はらば有難い事でございます。』本多大内記正勝公これを御覽せられて、本『これは御師匠、先程鳥渡この又右衛門の姿を隙見をいたしたが、見る處筋骨逞しき天晴豪傑であらうと思ふて居たが案に違はず御自分の兄重兵衛殿の取立でござつたか、コレ又右衛門とやら、面を上げろ、予は本田大内記正勝、身が屋敷へも折節參れ盃を取らする。』又『有難い仕合……。』井『井伊掃部頭……身が屋敷へも折々參れ、盃を取らする。』又『辱けなう存じます。』立『又右衛門、予は立花將監、盃を遣はす。』と其處に御在ある諸侯が皆一同盃を下されまして又右衛門上々の首尾でございましたるところ、サア是程の技術の者でございまするから、居流れて居る大名、甲『乃公も抱へやう……。』乙『吾も抱へたい。』と心には思つてお出なさるが、遠慮して誰も先へ發言す者がないが、本『一人云ひ出せば乃公も吾もと云ふに違ひないだらう……。』と

思つて本多大内記正勝公が、本『御一同これなる又右衛門を抱へたいと思ふなれば、遠慮は要らんから早く誰方でもお抱へなさい、拙者は又右衛門如き者は無用、拙者の先祖本多平八郎忠勝の柱石、梶金兵衛・三浦澤造、大原作農右衛門・都築藤一郎等の豪傑が拙者の屋敷には充滿をして居る、又右衛門如き武藝者は箒で掃き箕で計る程居る、拙者は要らんから好い家來のない御人は又右衛門をお抱へなさい。』これを聞いて一同が、一同『此所で又右衛門を抱へれば好い家來がないと思はれんければならん。』と思ひましたから、井伊掃部頭進み出て、井『姫路御家臣の御自慢は無用になさい、拙者も先祖井伊萬千代直政と共に英名を顯はしたる木全土佐、妊石豐前、上野九郎兵衛と申する屈強の豪傑が屋敷にある、又右衛門如き者は船に積み車に積む程ある、御自分の御家臣ばかり豪傑ではござるまい、拙者も要らん好い家來のないものは又右衛門を抱へなさるが宜い・拙者に遠慮をしなさるな・立花將監、立『予の家にも先祖の家來立花外記、立花主水等あり。』と居流れて居る大名が家來の自慢をポン〳〵いたしたから、又右衛門の、誰あつて手を出す者がございません、唯本多正勝公が一言の毒言でもう安つぽい人になつて、其儘木挽町の屋敷を暇乞いたして牛込へ歸りました。サア又右衛門その憤つたの怒らんのといつてぷん〳〵として道場へ歸

つて來ると表から、又『武右衛門々々々々……。』と大音を揚げましたから内門弟の北藤武右衛門其處へ罷り出て、武『これはお歸んなさいまし。』又『今歸つた……。』武『木挽町御屋敷の御樣子は如何でございました。』又『云ふまでもない御師匠重兵衛公より習ひ覺えたる柳生流、天地人三卷の極意を御覽に入れ、飛驒公の眼を驚かした。』武『それは恐悅でございました。』又『ところが恐悅でない……本多大内記正勝と云ふ奴は、汝が抱へなければ默つて居れば宜いのに餘許な事をいやアがつたもんだから、網の目から手が出るやうに抱へ人があるであらうと思ひの外、誰あつて乃公に涕を引掛けるものもない、之といふのも、あの本多正勝の毒言から、誠に安い者に又右衛門もなつて戻つて來たが殘念千萬……人間も運が甲斐なうては不可んもので、師匠光吉公のお言葉に汝の技術諸侯より抱へ人があれば、五百石以上の侍になつて苦しからん、五百石以下には主取をするなといふお言葉であつたが、今の處では百石でも抱へ人かないやうだ、實に用ひらるれば鼠も虎の如く、用ひられん時は虎も鼠に劣る、モウ乃公も劔術使ひはこれでお止だ……武右衛門明日門弟が參つたら皆斷つて仕舞へ、劍術使ひは止さう。』武『大層御立腹。』又『何となく心持が惡い、酒を附けろ。』武『貴郎御酒を召食つて在しつた御樣子……。』又『宜いぢやアないか、乃公が了見で乃公が飲むんだから……。』武『でも餘りお過しなされては。』又『ヱ、夏蠅い酒を附けろつてば……。』と又右衛門がガブ〳〵御酒を召上りお出でなさる、夜が明けると來る門人は片端からポン〳〵斷つて仕舞ひました。其日の晝頃のことでございます、警鐘がポン〳〵〳〵〳〵、又『ヲ、武右衛門出火と見えるな。』武『左樣でございます。』又『何の邊ぢや。』武『何でも神田邊ぢやと申す事。』又『神田だ……ヲ、さうか風が激しいな、火事と云ふものは江戸の花だ、江戸の名物だといふから一つ見物に行かうぢやアないか。』武『左樣でございます、お供をいたしませう。』とこれから又右衛門福草履を穿いて、北藤武右衛門同道で神樂坂から牛込御門を這入り、九段牛ケ淵から御陣ケ原へ掛つて參りまして、丁度一ッ橋見附の外へ來て見ると先づ三河町邊ドーッ〳〵といふ風火勢猛烈にして黑烟りは燄々と空に登つて居る樣子、火元見は馬に乘つて八方に奔走してゐる、晝の火事であるから大層賑ひました。又『コレ武右衛門見ろ、勇ましいものだなア……アレ見ろ、火元見が八方へ馳けて居る、火元見は戰場の御使番、凛々しい身拵をいたして居るな。』武『左樣でございます。』と云つて居るところへ筋骨逞しくいたして身拵美々しき上へ火事羽織を着て馬に跨り、○『ハヨー……。』トッ〳〵〳〵と乘立つて參

りますのは孰れの火事見でございまするか、又右衛門の傍まで馬足を早めて參りましたが又右衛門を見るとピタッと駒を停めて、○『そこに御出あるは丑之助殿ではござらんか。』と前名を申されましたから、荒木が仰向いて見ますと火事頭巾を取つて馬上で、○『誠に暫く……。』と挨拶をいたしたのは、是れ柳生重兵衛公の一番弟子、大野淺右衛門と云ふ者でございます、又『コレハ大野氏一別以來御機嫌宜しう……。』淺『丑之助殿唯今では江戸表にお出なされて孰れに御仕官……。』又『ヘエー……。』少し又右衛門極りが悪い重兵衛より天地人三卷の極意を讓られて居る又右衛門、未だ浪人をして居る、向ふはモウ主取をいたした立派な人、『浪人の劍客者と云ふのも極りが悪い。』と思ひましたから、

又『當今では牛込神樂坂、豆腐屋五郎右衛門……。』淺『ヲ、豆腐屋へ御仕官……。』

又『(低い聲で)戲談いつちやア不可ません、誰が豆腐屋の家來になつて居る奴があるものか……エ、豆腐屋五郎右衛門の地面を買ひ受けて、浪人の劍客者でございます、荒木又右衛門とお尋ね下さらば相分ります、ちとお遊びに……。』淺『ハア左樣か、然らば尊公は未だ浪人の武藝者……浪人の劍客者。ハヽヽ、天地人三卷の極意を許されたる尊公が未だ御浪人かな、光吉公も好い御人に極意を許された、重兵衛殿のお目違ひ、拙者は極意

は許されんが當時は紀州の家に仕へて百石を給はり居る、麹町紀州の達磨門を這入つてお聞きなされば直とこの淺右衛門の小家は分ります、どうか御通行の節は御立寄下さい、舊來の好誼に粗茶なりと献じやう、失禮ながら金子のお差閊えの時には、三両や五両の金なれば、お貸し申さう、必らず御遠慮を召るゝな。侍の浪人は晝狐を出したやうに茫然して居て見つともないものだ……今日は勤めの事ゆゑ、これにてお暇を頂戴いたす、ハヨー……。』と悪口をいたしてドッ〳〵馬を乘立つて行く、後を見送つて居た又右衛門、又『武右衛門火事は面白くないから歸らう。』武『面白くなけりやア始めから來ない方が好いんだ。』又『憎まれ口を聞きやアがつて、誰があんな奴の處へ金子など借りに行く者があるもんか、乃公の事を晝狐を出したやうだつて云やアがつた。縱令乃公何といれやうとも我慢をするが、お師匠樣の御目違ひと云ふ口上に奇怪だ……しかし昨日本多大内記正勝の奴が毒言を流さなければ、モッ今日は孰れかへ有附てゐるであらう、何に附てもあの本多の奴が怨みであるわい……。』宅へ戻つて參りまして又酒を飲んで居るところへ、侍『頼む……。』武『ドーレ。』北藤武右衛門玄關先へ來て、武『孰れから……。』侍『拙者は播州姫路の城主本多大内記の家臣近藤市郎右衛門と云ふもの、大先生御在宿なれば、お取

次を……。』武『暫く……。』奥へ參りまして、武『エ、本多樣から近藤市郎右衛門と云ふ仁が御使ひで、先生にお目に掛りたいと申して參りましたが……。』又『ナニ本多………本多も幾軒もあるが、何處の本多だと云つた。』武『姫路の本多大内記樣で。』武『ナニ姬路の本多だ……あの糞垂野郎、遺恨がある、シテ近藤市郎右衛門と云ふ家來　乃公に逢ひたいといふのか。』武『ヘエ……。』又『逢つて遣らう……茶も出すな畜生、煙草盆も出すなよ、坊主が憎けりや袈裟まで憎いといふ例へがある、今直ぐに逢つて遣らう……一間へ通して置け。』武『宜しうございます……此方へお通りを願ひます、直きに主人がお目に懸ります。』市『御免を蒙る……。』と案内に連れて一間へ通りました。武右衛門正直に又右衛門に云はれた通り茶も出さなければ煙草盆も出さんから、市『荒木と云ふ奴は無禮な取扱ひをする奴だ。』と思ひました、その内に又右衛門それへ出て、又『これは〳〵本多公の御家來近藤氏、拙者は箒で掃いて箕で計る程ある荒木又右衛門と云ふ武藝者でござるが、シテ今日は何御用あつてお出になりました。』市『これは先生始めまして御目に懸ります、拙者は本多正勝家臣、近藤市郎右衛門でございます、さて主命を受けて今日罷り越しましたるは、昨日柳生家にて主人正勝、先生にお目通りをいたした其折りに、何卒先

生をお抱へ申したき所存はござれども、如何にせん外大名衆も大勢お出ゆゑ、正勝一人遮つて先生をお抱へ申さうと云ふことも申兼ねます、さりとて外大名へ抱へられては殘念の至り、如ず此場は先生を誰も抱へんやうに計ひをいたし、後して先生の方へ願ひを上げ、是非とも本多家へお仕官下さるやうお賴み申さんと、斯樣心得まして故意と毒言を吐きましたる處、それに居られる者皆謀略とは知らずして己れ〳〵の家來の自慢を申して、先生を抱へると云ふ者なきに安心をいたして戻りましたが、又外より拔駈をいたす者があると不可んから、昨日惡口の儀は又右衛門先生へお詫をいたして、祿は何程にても大事ござらん、主取のお望みあればお掛合申し上げたくと斯樣主人申付けまして、今日拙者相越しました。右の次第御立腹の段重々〳〵お詫をいたします、御承諾下されて本多家へお仕官下されば、使者に罷り越しましたる拙者本懷の至りでございます。宜しく御返答を願はしう存じます。』と云ふのを聞くと、又右衛門は正直な人であるによりて容貌を改め、又『成程恐れ入つた、左樣なる御計略とは心得ずいたして、唯今までお恨み申せし段、どうぞ御勘辨を願う、就いては誠に有難い思召……エ、武右衛門煙草盆を持つて來い、なぜお茶を持つて來ん……。』どうして好いんだか譯が分りませんから、武右衛門マゴ〳〵いたして居り

ます、　又『左樣ござらば拙者御言葉に從ひまして祿の望みと云ふは五百石、尤もこれは私事ではござらん。師の望みでございますから、これを破る譯に行きません、五百石以上なれば師の申付けで御奉公が出來ますが、その以下では相なりかねます、左樣御承知を願はしう存じまする………。』と云ふたが新規に五百石と云ふ高は是容易ならん事でございます

そこで、　市『市郎右衞門一存を以つて計う譯には參りません、立歸つて早々御返答申上げませう。』と其日は立歸りまして、本多大内記正勝公へ言上をいたす、　正『ア、宜しい五百石で結構だ、祿を望まれて抱へんなどと云はれては身が耻辱に相成る、五百石か千石・五千石が一萬石でも大事ない。』と云ふ仰せに市郎右衞門　市『左樣ございますればいよ〳〵五百石で御仕官下されたい………。』とこゝで相談一決いたしました。スルと、　又『武右衞門サア乃公と一緒に來い。』　武『先生何處へお出になります。』　又『何處でも好いから一緒に行け。』と又右衞門、北藤武右衞門を連れて麴町の紀州の達磨門と聞くと直に分りました。

又『ア、これだな、モシ門番大野淺右衞門殿のお小屋まで罷り越します、拙者は荒木又右衞門と申します。』　門番『大野氏のお小家はこれから左りへお通り下されて三軒目で………。』　又『大きに辱けなう存ずる。』如何にも來て見ると大野淺右衞門と云ふ標札が打つてございます、　又『賴む。』　取次『ドーレ………ヘエこれは………。』　又『拙者は播州姫路の城主本多大内記正勝の指南役にて五百石を頂戴いたする、荒木又右衞門　源　義村と申する者、大野氏へ宜しう………。』　取次『へエ………恐ろしい丁寧な奴だなア、何だ五百石なぞと、己の取高まで云はなくつて好いぢやねえか………ヱ、旦那樣に申上げます、本多樣の御家來で五百石を取る、荒木又右衞門と云ふ人がお目通りを願ひたいといふこと………。』　淺『さうか。』と淺右衞門玄關の處へ來て、　淺『イヤこれは〳〵………先日は大きに失禮をいたした、サアどうか此方へお通りを………。』　又『イヤ今日は左樣いたしては居られん、大野氏其の折りは拙者も大きに失禮………さて今日拙者これへ參つたのは別儀ではござらぬ、師匠重兵衞公のお目違ひでないといふことを御自分へお悅ばせ申さんと、わざ〳〵罷り越したが、拙者はこの度播州姫路の本多大内記家來になつて、五百石頂戴をいたします、重兵衞光吉公のお目違ひにならんといふところをお話し申します、指南役で五百石頂戴いたす、十八萬石の家にて拙者指南役で五百石でござる、重兵衞光吉公のお目違ひでないところを鳥渡御話し申します………五百石宜しいか五百石、アノ五百石でござるぞ。五百石さて侍の百石位取る奴は慇然な者だ………失禮ながら金子入用の節は舊來の好誼だ、五兩や

三両はお貸し申さうによつてお出なさい……百石位取る奴は晝狸を追出したやうに茫然して居て見つともない、今日は多用だからこれで御免を蒙るといたさう、ハイ左様なら。』

渡『何たえあれは、無益えことをいひに來る奴があるものだ……。』と思つたが、又右衛門は紀州の達磨門を出ると胸を擦つて、又『アヽ好心持だ、日頃の無念を一遍に晴らした、外日乃公の事を晝狐だと云やアがつたから、今日は狸で敵を取つて遣つた、先づこれで重兵衛公の御耻辱も晴れた。』北藤武右衛門は、武『此位人の好い人物はなからう……。』と思ひました。これより渡邊靭負の許へ参りまして、右を物語りまするど、大いに悦び、

靭負『就いては不束なれでも拙者の娘梶、何卒御貰ひ下さるやうに願ひたい。』又『左様ござらばお言葉に甘へて、娘御お梶どのを頂戴いたさう。』と靭負の娘を女房に貰ひ受けて、本多家に罷り越し、指南役を勤めて居る内、正勝公御國表にお歸りに相成る、其のお供をいたして播磨の國姫路へ参りましたるその留守中、渡邊靭負が河井又五郎の爲めに横死を遂げ、こゝに計らず又右衛門靭負の仇敵討に立つといその件り、次號よりおひ〳〵言上いたします。

第十一回　暇を許さぬ正勝公

扨て伺ひ續きに相成りましたる伊賀の仇討講談、又右衛門が播州姫路の城主本多正勝公に抱へられまして、渡邊靭負の娘お梶を妻にいたして本多公のお供をいたして播磨國姫路へ参りましたるその跡のこと、渡邊靭負が同藩河井又五郎の爲めに不慮なる死を遂げました。さて靭負の忰數馬が父を討たれましたるによつて仇討の願ひを出しましたるに就いて仇敵討の免狀が御主君より出でましたから、己れの家に永らく召使ふて居りました山添伊平と云ふ者を供に連れまして、播州姫路へ乘込んで又右衛門へ父の最後を遂げましたることを云々と物語りました、義村始めてこれを承つて足摺をいたし、又『ア、殘念千萬の事をいたした、この義村江戸表にあつたる時なら、いかで河井又五郎を免すべき、如何にも無念の次第、恩人なり舅なり、山海よりも高く深く大恩のある靭負殿の仇敵不倶戴天の河井又五郎、譬へ天へ翔り地に潜むとも、やはか探し出して討たいで置かうや……。』と盡く又右衛門憤怒の勢ひを顯はし、直樣仇討に出立いたしたいは山々でございまするが如何にせん自己は本多の家にて五百石と云ふ食祿を給はり、指南役といふ身の上になつて

居りまするもの、さるを池田の家にて起りましたる事を本多の家に抱へられて居る又右衛門が、主を後に致して舅の仇敵討に暇を呉れろと、我儕には出來ません、この暇願ひに義村が困りましたから唯何と附かずに又右衛門は、又『拙者誠に多病に就いて御奉公勤まり兼ねましたる間、御暇頂戴仕りたし。』と重役へ願ひをいたしました。されば重役より殿へ言上をいたしまするると、正勝公御聞きなされて、殿『追つて沙汰をいたす……。』と斯う仰せがございました、右の由又右衛門へ申しましたが、それなり御沙汰がないから再び又右衛門願ひを上げまするると、殿『追て沙汰を致す。』と又仰せ出されました、三度も四度も追つて〳〵といふ仰せ、又右衛門少し焦慮込んで參りましたるによつて、又『さてはコリャア重役が殿へ申上げん事と見える、ヨシ今日は自身に出てお暇願ひをして遣らう。』と思つて御前へ又右衛門罷り出兩手を仕へ、又『御機嫌宜しう。』殿『ヲ、又右衛門か……又『ハ、……恐れながら私豫て御暇の義を御願ひ申上げましたるところ、今に御沙汰がございませんが、又右衛門多病にて御奉公勤まり兼ねまする間、お暇を下し給はるやう願ひ奉る。』殿『ハア左樣か、追て沙汰をいたさう。』又『否御前の追てはモウ聞き飽きました、是非ともお暇を給はるやう……。』殿『ツム左樣か、其方が暇取りたいと申するの理由には不可んから、それは暇を遣るまいものでもない……けれども又右衛門、物にはして爲する禮有りと申するが、其方存じて居るか。』又『ヘエ一向に存じません。』殿『知らんか……取らんとするものあれば先與へよと云ふ事を心得て居るか……。』又『一向に存じません。』殿『魚心あれば水心ありといふ事を知つて居るかえ。』又『一向に存じません……。』殿『其方のやうにどうも其知らん〳〵とばかり云つては困るぢやアないか、それなれば其方に乃公が打附けて申するが、其方柳生流の天地人三卷の極意を此正勝に讓れ、さうすれば汝の望みに任せて暇を遣はさうではないか、極意と暇と交易にいたさう、どうだ。』又『エ、それは成りません。』殿『ナニ……不可ん。』又『ハイ。』殿『何故ぢや。』又『六韜三略虎の卷も、其術に至つて居る者が見ますれば成程と膝を打ち感激をいたすこともございませう、凡眼にて見ましたら何の役にも立んもので、武藝極意もその通りその腕前に至つて居る者が讓られますれば成程これが極意なりといふことを會得仕りませうが、その實に至らん者に極意を許しましても何の役にも立ちません。俗に云ふ生兵法は大傷の基と申します、君に於ても技術が極意に至つて居る事なれば、又右衛門極意なんで惜みませうや、速かに御讓り申上げる、拙者が暇を頂きたいからといつて極意に至らん技術の者

に免許を許したなどといはれますれば、義村拙者の名義に關はる、さすれば拙者の師匠重兵衛光吉の名折にも相成ります、下郎足輕でも其術に至つて居りますものなれば速かに許します、貴郎が御主君だからといつて阿り諂ひ御言葉を委細承知いたしてござるといつて極意を許すやうな左様な卑怯な又右衛門ではござりません。貴公の御技術が極意などとは思ひも寄らんこと、未だ御目錄にも至りませんから、マア骨を折つて御習ひなさい。』殿『暇は遣らんぞ、其方極意を許さん内はどうしても暇は遣らん。』又『下さらなければ詮方がございません……又右衛門今日は下城を仕ります。』御前を引退りましてサア義村考へたが、　又『この鹽梅では尋常では暇が取れない、不如、これから一番暴れ放題暴れて、向ふで困つてア、いふものを屋敷へ置いても詮方がないから暇を遣らうと云ふので乃公は暇を貰はう……。』とその翌日御前へ出ると安座を搔く、足を投出す、寢轉ぶ、伸をする、欠をする、或ひは高大な聲を出してからに、　又『どうも十八萬石の本多の家には碌な奴は一疋もないな、皆な侍らしい高慢な面をして居るけれども更らに劔術使ひと云ふ者が見えない、劔振棒振野郎ばかり、大小を所持して居るのは野郎の刀懸だ、肩衣を着けて居るのは野郎の帆掛船彷彿なもんだ、荒木の前に荒木なし、又右衛門の後に又右衛門なし、天上天下唯我獨尊、三國論外の名人はこの義村、家中の奴等は唯呼吸の通つて居るばかり、フイラ〳〵と息の通ふは吹子の向ふ面、ワン〳〵云へば狗も同様の奴が揃つて居やナがる、本多の家中は引搦めて半人前、又右衛門が一人前だ、シテ見ると本多の家には十八萬石でも人間が一人と半分きやア居なからう。』などと大音を揚げて呶鳴りますから、家中の者は怒つたの怒らないのと云つて、　臣『恐れながら御前へ申上げます、何故に又右衛門をあのまゝに御捨置遊ばしますか……然るべく御詰問あつて宜しいかと存じます。』と近侍の者が勸める者がござります。』と、　殿『ヤ捨て置け、又右衛門心にない惡口を申すのぢやからそれを此方から暇を遣はすと云つたら彼はモウ有難い仕合せと、ホク〳〵悦び勇んで往つて仕舞ふ、何のやうに彼が無禮をいたすとも彼是申すな捨置け〳〵……。』と殿様が仰しやるのだから、一同『左様でございますか。』と差控へて居るによつて、義村先生も暴れ損でございます、正勝公は、　殿『又右衛門の奴我技術を目錄にも至らんと云ひ居つたが殘念至極、どうでもかうでも極意を許して貰はにやならぬ、就いては先方を恐れ入ましたと云はせない以上は極意を許すまい、彼が捕つて押へてどうでもかうでも許して貰ふ工夫をしなければならん、ハテどういたしたら……。』と暫く何やら考へて在らせられたが、やがて

工夫を御案じ遊ばしたと見えて、近臣黒川三郎長谷川金之丞を召して、殿『こりや兩人……。』兩人『ハ、。』殿『其方へ申付けるが。』兩人『ハッ……。』殿『今日は又右衛門を捕つて押へて遣る計略だ、予があれなる一間へ古書、古筆の類を取散して置いて、彼は大層書畫の類を好むと聞いて居る、今日出でたら見せて遣らうと云ふ……好む道ぢやから彼が拜見をいたしますと云ふに相違ない、予が先に立つて又右衛門が這入らうといたす時に此の内には尊きお方の書かれたる物もある、猥りにこの室に入るなよ、かう申すと襖が開いてあるから、敷居に手を突いて敷居越で見やうといたすに違ひない、その時に其方共兩人が襖の陰に隱れて居てな。』兩人『へエ……。』殿『又右衛門が首を出したら、其襖を左右から押して、又右衛門の首を襖で押へ附けて仕舞へ。』兩人『へエー、成程……。』殿『然いたすと予が一刀を拔いて、サ又右衛門極意を許せば放して遣はす、萬一許さなければ、素ッ首を打落すぞ許すか許さんかと脅迫せば彼も命は欲しいによつて、誠に恐れ入ります極意を許しませうとかう申すに相違ない、是則ち孔明の計略だ……。』成程と御近侍は驚いた、兩人『無益い計略だ……。』と思つたが、君命なれば詮方なく、兩人『委細承知いたしました。』と襖の陰に兩人隱れて居る、さて一間へは書畫古筆の類を取散して置きまして、

大内記殿は、殿『今に又右衛門がこれへ來るであらう。』と待つて居りますところへ、義村先生御前へ來て、又『御機嫌宜しう……。』殿『ヲ、又右衛、今日は遲刻をいたしたな。』又『ハイ、少々用事がございまして大きに延刻をいたしました。』殿『イヤ今日は劍術は跡にいたして其方に見せるものがある……。』又『ハ、ア何でございます。』殿『エ、少々調べるものがあつて、散らして置いたが、其方好きぢやさうだが、古書古筆の類を見せて遣らうかどうだ。』又『イヤそれはどうも有難い仕合せ、早速拜見を願はしうござる……。』殿『然らば此方へ來い。』と正勝公先へ立つてお出なさると、本多公が其間へ御這入りなされたから、自分も同じく跡に尾いて這入らうといたすと、殿『ア、これ〳〵此室には尊きお方の書かれたる物もあるによつて、猥りに此室へ這入つて來ては宜しくないぞよ、敷居越にそれから見ろ。』又『ハーッ承知をいたしました。』と義村が敷居に手を突いて、首を差伸すと、正勝公心の内にて、殿『アハ計略圖に欲つたり。』と思召して黒川三郎、長谷川金之丞の兩人へ目配せすると三郎、金之丞、兩人『ヤーッ……。』といひ樣襖を左右より押しましたによつて、又右衛門の首を充分に襖を以て挿んだかと思ふと、其間が一尺二三寸も明いて居つてガッタン、ゴットン〳〵といつてどうしても閉りません、正勝公は襖を

押すと同時に、殿『占た………。』と思つて柄に手を懸け身構へしたが襖が閉らないから反馬な鹽梅敷、殿『コレ三郎、金之丞、それだによつて辷りの好いやうに滑らかにいたして置かんければ、成らんと云ふのに………計略書餅になつて仕舞ふたではないか。』兩人『恐れ入りました。』殿『恐れ入つたではない。』又『イヤ御前、金之丞三郎の悪いのではございません、君が矢張お心の注かん事がございます………すべて此武藝者といふ者は、太刀風三寸にして身を飜へす、これは油斷のないことを申しましたものでございます、私は此敷居に兩手を突きましたる其時に、携へて居る南蠻鐵骨一尺二寸の扇を斯くの如く敷居の溝へ挿みまして、其上から手を突きました、それによつて鐵骨の扇が襖へ支へて拙者の首を締ることが叶ひません、すべて武藝者は斯くの如く油斷をいたさん處を以て極意の技術と云ふ、是等にお心がお注きなさらんで、拙き計略を遊ばすによつて、未だ御目錄に至らんと申しましたが誠にハヤお氣の毒樣で………。』殿『ナアル程………さうであつたか。』

又『かゝる時は藝道御氣合の立んものでござるから、又右衛門御免を頂戴致します。』ズーッと退りました、跡見送つて本多公、殿『コレ三郎、金之丞兩人の悪いのではなかつた、又右衛門と云ふ奴は口も八町なら手も八町、道理でガタ〳〵して閉らんと思つたら、溝へ鐵骨の扇を挿んで置くとは感心だ、此方は失策なつて殘念千萬………モウかうなつた上からにはどの道あれを捕つて押へんければ無念が晴れん。』と暫し默考して在せしが、殿『ヲヽ僥倖雪催しだから、又予が一計を勘考いたした、明日當城三重目の天主にて雪見の酒宴といふので無禮講と申し、彼を連れて參り、澤山酒を勸めて充分熟醉をいたさせる、然らば無禮講だから、彼必らずそれへ打伏して仕舞ふに違ひない、充分の寢入端を、予が槍術指南役櫻井甚左衛門より習ひ覺えた寶藏院流の槍を以つて、彼が胸板へピタッと附けて、サア極意を許せ、許さん時は汝の胸許を貫ぬくが宜いかと申せば、彼も誠に恐れ入り奉ります、極意を許しますると、コウ申すに違ひない、しか致したらばこれが張達、張飛の寢首の計略………。』御近侍がこれを聞いて、〇『又詰らねえことをなさる………。』と思ひましたが、一同『御妙策でございます。』

殿『よしか……早々に準備をいたして明日を待て。』といふ仰せ、さてその翌朝に相成りますと雪は紛々として降り、浮世の塵は變じて銀世界となり、大なるは綿をちぎつて投ぐるやう、今日は又右衛門宅で一盞を傾けて御前へ出で兩手を仕へて、又『御機嫌宜しう、誠に今日は感じまする。』殿『ヤア又右衛門降るではないか。』又『どうも、如何にも激しい

雪でございます、されど雪は豊年の貢と稱へまして、斯樣な結構なものはございません、マ私も前祝ひに宅で一杯御神酒を献げて參りました。大きに今日は酩酊をいたして相濟みません……。』又『イヤかういふ時は酒でなければ凌げんわい、予も今日の雪を肴にいたし天主の三重目にて雪見の宴を催さうと思ふが、どうぢや無禮講だが、供をいたすか……。』又『これはどうも有難い仕合せ……どうか直樣お供仰せ付けられて下さりますやうに。』殿『サ、參れ〳〵一同サ參れ。』天主三重へ參られました、山海の珍味をそれへ取揃へて御酒宴でございます、殿『又右衞門其方は劍術の自慢をいふが、酒の自慢も申す……今日はモウ飲めんと云ふまで飲ませるが澤山飲め〳〵……。』又『ヘヱ有難い仕合せでございます、充分に頂戴いたします。』殿『この七五三の盃の七合入が宜からう……。』と一番下の大盃を御取りなされて。』殿『これにて充分過ごせ。』又『頂戴を仕ります。』と又右衞門右の盃を手に取りまして滿々と承けてグーッと一干正勝公これを御覽なされて丁と膝を擊つて、殿『一同見ろ……勇士は酒を好むと云ふが宜なり、又右衞門はあれを一干にいたした……豪邁な、今一盞重ねろ……。』又『然らば今一盞……。』と又それへ滿々と受けてキユーッ……と僅た一ト乾し、殿『どうぢや一同見ろ、豪傑酒を好むといふが、

それに違ひない、ア、又右衞門は天晴なものだ、今一杯又右衞門……。』又『ハイ有難い仕合せ、何杯でも頂戴仕ります。』と又も滿々と受けてグーッと飲み乾さうとしたが半にして、又『ホッ……。』と息を吐いて、又『イヤ、ヱ、今度は一ト息には少と六ケしうございますから鳥渡息次をいたしました……エーイ……ゲーイ……モウ何卒巨大なものはこれにて御免を蒙ります、これから小さいものにて頂戴を仕りますから……。』と大盃をそれへ差置きました、近臣が、甲『エ、先生甚だ失禮でございますが、一ッ献じます又『頂戴いたす……。』乙『又右衞門先生甚だ失禮だが一ッ献上します。』又『イヤ頂戴をいたします。』丙『エ、荒木先生、御返盃を……。』又『有難い。』丁『先生お一ッ……。』又『ヲット、頂戴……。』○『荒木先生、思ひ差しで。』又『辱けない……。』□『荒木先生。』△『又右衞門先生。』×『又右衞門大先生。』●『荒木先生……。』又『ア、五月蠅………これは大變。』◎『又右衞門先生。』又『ア、モウ嫌だ……ア、堪らん、かう攻められちやア大變だ、拙者は獨り向ふは大勢、かう大敵を引受けて唯一人で此處の殿は少とどうもこれは弱つたなア、エーイ……御前モウどうかゴ、御勘辨を願ひたい、酷く酩酊をいたしました、ゲーイ……タ、堪りません、御前今日は無禮講でございませう、どうか御勘

辨を……早々拙者は休まんければなりませんから……。』といつてゴロリと其處へ横になりまするを忽ちに『グウー……グウー……。』と前後も知らず高鼾、　殿『又右衛門弱い奴ぢや、今一盞遣はす飲んで見ヨ、コレ又右衛門……。』　又『グウー……。』　殿『又右衛門〳〵。』と正勝公搖起して御在なさるがなか〳〵起きません、寢顔眺めて莞爾とお笑ひなされた本多公、　殿『家來共計略が充分に參つたな……サ申付けたる通りに計らへ、皿小鉢を片附けろ、槍を持つて來い〳〵、其方等は二重目へ降りるとも三重目へ昇つて居るとも譬へ何樣な事が有らうともこの席へ出るな。』　一同『畏まりました。』家來を皆遠避けまして、本多公襷十字に綾なして袴の股立最と高く取上げ、寶藏院九尺柄の槍鞘を拂つて、どき〳〵致しまするが躰を定めて中段に着けまして、又右衛門の胸板を望んで、『ヤーッ……。』とヤ聲諸共に突出だしたるところ、パッと荒木が躰を跡へ退らしましたるその速き事電の如く正勝公が突出しました槍は空を打ちましたから、　殿『南無三……。』と手許へ引かうといたした時に、忽焉と起き上つて槍のケラ首を　又『ウン……。』無圖と摑みました。　又『御前又右衛門に如何なる御憎しみがあつて、命を取らんと遊ばします、拙者君に討たるゝお憎しみを受けたる覺えはなし……なれども君この義村をば討たんとなさる上からは是非に及ばず、身に係る禍ひは拂はねば相成りませんかくなる上は御主君なりと雖もお抵抗は仕ります、古天正十年の六月二日本能寺にて織田信長が臣日向守明智光秀に討たれし例あり、君と雖も詮方なし、義村君が尊躰を申受けます御覺悟あれヨ……………。』と云ふと、　又『エーイ。』と一聲懸けて槍を引きました。手練で引かれて本多公は思はず知らず放しましたる槍をリユー〳〵と扱いて正勝公に突掛つて來る樣子、イヤ驚いたの驚かないのと云つて、　殿『又右衛門手荒いことをいたすな、其方を殺さうと思つていたしたことではない、盤曉、張達、張飛、寢首の計略が手違に相成つたのぢや……計略の爲めにいたしたのぢや、又右衛門許せ、義村許せ……。』と本多公ドン〳〵〳〵三重目の天主の周圍を逃げてお出なされる有難は、猫に追はれた鼠の如くでございます。

殿『コレ、家來共、降りて參れ、上つて參れ……コレ家來共降りんか、上らんか………。』と大聲をお揚げなさる、上と下へ引退つて居りまする家來が御主人の聲を聞いて、

甲『ヲイ〳〵近藤〳〵降りて參れ、上つて參れと仰しやつて居られるせ。』　近『けれども出てはならんといはれたぢやアないか、しかしあんな巨大な聲を出して……どうしたんだらう……。』と下から階子段をトン〳〵、　近『ハヽア不可ない、原田不可ないヨ。』

両『どうしたへ……。』近『どうしたと云つて又右衞門が槍を持つて大將が追驅けられて居るぜ、出て止めてやらうか……。』原『どうして吾々等が出やうもんなら、胴腹へ風穴を明けられます、マ、出ん方が好い。』近『然らば君子は危うきに近寄らずだ、控へる方が得策だらう。』と一人も出る者がございません、されば本田公は、殿『危ない、又右衞門。』と逃げてござる時に、モウ追驅け追詰められて櫓の隅に身體谷まつたるところを義村その槍を、又『エ、イ。』一ト聲掛けて突出しましたる時に本多公、殿『命は兼ねてなきものよ……。』と突出す槍の穗先を兩の平手で、殿『ヤーア。』と押へなされました、此時又右衞門槍の柄をバラリとそれへ投棄て、後へ横疊三疊程飛退つて、又『ハ、、ハ、アツ。』と平伏をいたしました、本多樣は、殿『ホツ……。』と大息を吐いてお在なさる、又『恐れながら御前君に御傳授申上げんと心得、恐れ入つたる事ながら眞槍を持つて跡を追ひ奉りましたるところ、能くもお心の注かせられて突出す槍を兩の手の平を持つてお押へ遊ばされし技術、ハ、ア……天晴これでこそ柳生流極意の技術、切結ぶ太刀の下こそ地獄なれ、身を捨てこそ浮ぶ瀨もあれ、劒道の極意は皆こゝでございます、必らず唯今の氣合をお忘れ遊ばすなヨ、柳生流天地人三卷の一ト手眞劍白刄取を御傳授申上げましてございます。』

殿『又右衞門、これが極意か……イヤモウ極意は眞平、予は極意で十年も壽命を縮めたア、さうと知つたらこんなに逃げるのではなかつたが、家來共は惨い奴だ……コレ家來共降りて參れ、上つて參れ、出て參れ。』近臣それへ出て、臣『誠に恐悦至極に存じ奉ります。』殿『扣へろ……イヤ手前共のやうな不忠な奴はないぞ、狗を養つて置くより惡い、あれ程降りて參れ、上つて參れと云ふのに出ないと云ふのは不埒ではないか。』甲『イヤ吾々は又右衞門に野心なきことは心得て居りますから、出でましては却つて君へ御傳授の妨げにならうと心得ましたるによつて……。』殿『今だから何とでもいへるであらうが、予が萬一死で仕舞つたら何といたす……ア、酒が何處かへ醒めて仕舞つた、早々にこれへ酒を持つて來い。』とこれから再び御酒宴となりました。が又右衞門悉くその槍術を罵りますことより、それが甚左衞門の耳に入りましたので、大いに立腹をいたして、甚『彼は柳生流の名人かは知らんが、槍を持つては一歩も讓る甚左衞門でない、然らば御前試合へ願つて彼が高慢の鼻柱を挫いて呉れん……。』と甚左衞門は槍術、弟甚助は射術、兩人より又右衞門と御前試合を願ひましたるところ、御許容あつて總社大明神の神前に於て、荒木先生櫻井兄弟を手玉に取るの件り、後回の御樂みといたしませう。

第十二回　大和流弓術との試合

さて引續いて伺ひまするところは、又右衛門が姫路の本多正勝公へ極意許しまでを言上いたして置きました。天地人三巻の極意の内、眞劔白刃取の一手を本多公へ御傳授申上げましたるその跡で、御酒を下さいましたる時に又右衛門が、又『拙者が寝て居りまするところを、槍を持つて某へ御附なさいましたるが、あの槍術に何者が御指南をいたしました』

殿『されば、あれは當家の指南役、寶藏院流の槍術者、櫻井甚左衛門が指南をいたしたるのぢや。』又『ハ、ア櫻井の槍でござるか、彼は寶藏院流と申しまするは嗚呼ケましいこと拙者の眼より見まするとと左官の宰取流と云つても可なる可きもの、槍を遣ふなどとは片腹痛い……さながら蠅が燈心を使ふやうなもの、失禮ながら祿は何の位お遣はしに相成ります。』殿『三百石。』又『ナニ三百石……ウムーン櫻井の宰取流の槍が三百石、シテ拙者が五百石、荒木の前に荒木なし、又右衛門の後に又右衛門なし、天上天下唯我獨尊、三國論外の名人この義村が五百石、二百石違ひでは又右衛門は餘程お安い品でございまする。』と満座の中にて大言を放ちましたるから、それに櫻井甚左衛門の弟子が居りましたるによつて、此事を師匠櫻井に告げました。甚左衛門は西國三十三ヶ國にて寶藏院流の槍術では向ふへ廻る人がないと云ふ最も達人、それを承はつて大きに立腹をいたし、甚『彼柳生流の劔道は天晴かは知らんが、鎗を以つては彼に劣るとも心得ん、満座の中にて、我を誹謗せるは不埒な奴、イデヤ立會をなし、左官の宰取流を以て彼の眼に物見せて呉れん…………』と心得ましたるによつて、弟甚助に右の次第をかく〱と物語る、甚助も大和流の射術を以つて二百石戴いて御指南役を勤めて居ります、甚助『兄上御立腹の段は御道理千萬なる事、お棄置なされては御身分に懸りますから、速かに試合の願ひを立つて、然る可く、拙者も及ばずながら御助勢申す。』とこれから兄弟いたして願書を認めて重役へ差出しました。重役が開いて見まするとと満座の中にて又右衛門に寶藏院を誹謗され、其儘打棄置きましては食祿を戴き御指南をいたして居る甲斐がございません、これによつて試合をいたしたく此段願上奉る。』と認いてある、弟の甚助は兄を辱しめられて無念の至り、私も立會をいたしたうございまするとと云ふ願ひの趣きでございます、重役『成程櫻井の願書は道理の至りに心得るが、又右衛門も兄の甚左衛門は寶藏院流の槍術なるによつて、立會ふに相違ないが、弟の甚助は射術飛道具だから、又右衛門が何と申すか知れんから、願書を以つて

又右衛門に聞いてまゐれ……。』と申しましたから、下役が、下役『へエ先生今日は………。』又『イヤア中村此方へお上り、何ぞ用事かい。』中『少々先生に御覧に入れるものがある、鳥渡これを。』又『ヲ、願書のやうだなア、ウン……成程フンナ、ウン成程……。』中『先生、獨りで貴郎御承知をしてお出なさるが分りましたか。』又『分つた〳〵大分り………まだ御前へ披露をいたさんかい。』中『へエ……。』又『然らば速かに君前へ御持參あれ。』中『ところで拙者がまゐりましたのは、兄の甚左衛門は寶藏院流の槍術でござるから先生が立會ふに相違ないが、弟の方は大和流の射術で飛道具でござるが是等の邊は如何………。』又『ヲイ〳〵。』中『へエ。』又『皆まで宣ふな、弟の甚助は大和流の射術だと……大和流の射術もないものだ、拙者の目から見る時は、あれはその反圃の案山子流と稱へて弓矢を持つて引張つて居るところは射術のやうだが、切て放したつて當りつこのないあんな放屁くた射術が何の役に立つものか、あれで食祿を貰つて指南番をしてゐるから可笑しい、指南番ぢやアない葱南蠻彷彿な奴だ、荒木の前に荒木なし、又右衛門の後に又右衛門なし、天上天下唯我獨尊三國論外の名人、この荒木の眼から見る時は小兒同樣。』中『宜しうございます、然らばその由を申しませう。』又『ア、さういつて呉れ。』下役立歸つて參りました。重役『どうした又右衛門は飛道具では不可んと申したか。』中『大違ひ、先づ手紙を持つて往つて見せますと、ウン成程、ナ、ツンナとかういつて見て居りましたが未だ上へ御披露をいたさんやうだから、早々言上をいたして呉れろと申しますから、拙者が甚左衛門は寶藏院流の槍術でござるによつて好うござらうが、弟の甚助は射術でござるが、これは如何でと申すと、オイ〳〵皆まで宣ふな、あの甚助の射術を乃公の目から見ると反圃の案山子だ、あれで以つて食祿を頂戴して御指南番をいたして居るとは呆れ返る、御指南番ぢやアないあれは葱南蠻だと申しました。』重役『好し〳〵さういふ事なれば……。』と正勝公へ此儀を申上ると、本多公御聞き遊ばして、殿『面白い、試合を申付けろ。』と城下の柏の馬場で双方とも明後日立會をいたすやう沙汰をいたす。これから城下の百間柏の馬場へは矢來を結廻しお座敷を正面に設け、これへ幕を張り、正勝公御見物でございます。其他本多の重役ズラリ居流れて居ります、士農工商見物勝手次第と云ふ事でございますから見物は山をなすの有樣、さて櫻井兄弟は御沙汰を受くるが否や又右衛門に勝ちたいと云ふ一心で、成田山大日大照不動明王を水行をいたし念じて居ります、内にいよ〳〵當日と相成り、その日の打拵には黑羽二重、一輪櫻の紋の付いたる上下を着用いたし、お座敷へ昇

つて參りまして正勝公の御前へ兩手を突いて、兄弟『御機嫌お宜しうございます。』と平伏いたしました、本多公御覽あつて、殿『兄弟當日は太儀に心得る……。』兄弟『ハ、ア……。』これから櫻井兄弟は重役へ御挨拶を申上げて左りの方に一輪櫻の幕が張つてございます、それへ這入つて暫く休息をいたして居る、さて又右衞門が今にまゐるであらうと待つて居るが何時まで經過ても出てまゐりませんから、誰か荒木のところへ迎ひに往かねばなりません、重役『中村和郞鳥渡往つて來て吳れんか。』中『承知をいたしました。』これから又右衞門の門人中村某荒木の宅へまゐると義村先生、今ツンと構へて一盃遣らかして居るところへ、中『先生……。』又『イヤアこりやお出……拙者は今一盃始めたが相手がなくて困つてたところだ、相手を一ツ……。』中『相手をちやアございませんせ。』又『何だ……。』中『今日は先生櫻井兄弟と試合の當日ではございませんか。』又『アッ……さう〳〵忘れた、ガラリ失念をいたした。』中『だによつてお酒どころではございません。』又『可し〳〵、ぢやアモウお酒は先づこれで止しにいたさうサア行かう……。』中『サア行かうつて、先生餘り汚ないぢやアございませんか。』又『汚いかい……。』中『櫻井兄弟は今日は立派な身拵をして來ましたぜ、貴郞お召を着替へてお出なさい。』又『ナニ着物を着替へて來い……貴公の前だが今日は劍術を見せに行くのかい、身拵を見せに行くのかい。』中『ヘエ。』又『否さ劍術か身拵かよ。』中『ヘエそりやア劍術を見せにお出なさるので。』又『ソラ見ろ……身拵を見せに行くのだと云ふなれば、及ばずながら蜀紅の錦の陣羽織に虎の皮の褌でも締めて行くが、今日は劍術を見せに行くのだから乃公はこの儘で行くよ劍術さへ名人なれば菰を着て往つたつて好い理由のもんだ、それで不可んければ止さう……。』中『ア、云やアかういふてへのは和郞のことで……何でも好うございます。』又『好くなくつて乃公なぞは腕に錦を着て居るんだから平氣なもんだ。』と黑木綿栗簟十文字の五所の紋付たる着物に、丸行燈の横面頰を拳固で張挫いたやうな袴、源太光世の大刀に小刀を帶して、南蠻鐵骨一尺二寸の鐵扇を提げて出掛けて參りまして、本多公の前に兩手を突いて、又『御機嫌宜しう……。』殿『又右衞門當日は太儀に存ずる。』又『ヘエ別段太儀なこともござらん、今日の試合は拙者が勝つと極つて居るのでござるから、モウ別段にお慰みもない、たゞ〳〵柳生流の玄妙を上へ御覽に入れまするだけのことでござる。』本多公呆れ返つて、殿『直ぐと天狗をいふ奴だ。』と思ひ苦い顏をしてお返辭もございません、又右衞門重役に挨拶もしないでその儘お坐敷を降りて參りますと、自己の休息所は右手の方

に鷙然と出來て居ります、その內へ這入るかと思ふと、左りの方櫻井の幕を揚げて、又『イヤ櫻井兄弟どう致した、最前から大きにお待遠拙者はネ悉皆忘れちまつて、今人を受けてこれへ來た、どうも兄弟大屑和郞は立派だな……けれども負けるには美麗な身拵をして居ると目立つて不可ない、矢張平生の身拵と着替へて來た方が宜からう、何もそんなに着飾つて來るにやア及ぶまい。』甚『又右衛門殿御自分の休息所は那處だ、此處は拙者の休息所、これへわざ〳〵參つてどんな衣類を着て居やうが大きにお世話だ、貴殿の御厄介にはならん。』又『怒らつしやるな拙者が深切にいふのだから……それからあの拙者に勝ちたいと云ふので、成田の不動を水垢離をいたして信心をして居るてえことを聞いたが、寒つ曝しな止せば好いのに無駄な話しだせ……不動さんが何で劒術を御存じのものぢやアない、劒術が上手に成りたけりやアこの又右衛門に信仰いたせ、不動を信仰するよりは餘程利益があるぞ、且つ又不動は動かずと書く、劒術使ひや槍術者が動かずに居て見ろ打たれ連續に叩かれなきやならん。』甚『大きにお世話、餘計なお世話をお燒きなさるな……。』又『御身のやうに怒つちやア話しが出來ん、マ兄でも弟でも勝手の方から出てまゐれ。』とさんざつ腹雜言を吐いて、自己の幕內へ這入る、櫻井兄弟火の如く怒つて、甚『彼の野郞位口の惡い奴はありやアしない、見て居れ、今驚かして吳れんず。』と手ぐすね引いて待つて居ります、その內に御刻限と見えてお太鼓が、『ドン〳〵〳〵』と鳴りますと帷幕を絞り揚げて先に出でたるは弟甚助であります。

行縢を着けて襷十字に綾どり、一手に弓を携へお馬場の眞中央へツカ〳〵〳〵と進んで往く、又右衛門も同じく帷を揚げて出でましたが、襷も掛けなければ鉢巻もせず、腕巻りをしたまゝで、南蠻鐵骨の扇を右手に携へ、ブラーリ〳〵〳〵、松並木へ魂魄が通るやうな有様で、お練で以つてお馬場の中央へ出まして、本多公の方へ向つて默禮をいたしました兩人、又『時に甚助必らず遠慮をしなさるなよ。』甚『又右衛門殿、櫻井甚助大和流の射術を以て、お相手を仕つる御手柔らかに………。』又『ハヽヽ、拙者は遠慮をせんから、充分に術を見せなさい、嘲ひながら、田圃の案山子だからな、當るやうに射れ、好いか武藝は急くと七分の損があるものだ、拙者の方はモウ疾くに準備がしてあるのだから、充分身仕度をして參れ、けれども乃公が勝つと定つて居るんだから張合がないなア。』甚『この野郞口の橫に切れたるまゝ雜言をする奴、己れ今ぞ見よ。』と乘馴れて居りますところの駒に鞍を置いて跨り、手綱を押へて、甚『ハヨー……。』トウ〳〵〳〵馬に鞭

一當加へてトッ、〱〱〱……とお馬場を乗廻し、弓に矢番へて宛も空行く滿月の如くに引絞り、ヒョウフッ、放つたる其矢誤たず又右衛門の眉間を望んで來つた、義村は鐵骨の扇をば取つて、 又『ヤーッ。』一聲懸けるとその矢をピシーリ左の方へ拂ひましたが、實に目にも止まらん樣子、矢は折れて向ふへ飛んでまゐりました、尤もこの射術と云ふものは一の矢より乙矢を切つて放すのが速くなければ名人と云はれません、甚助なか〱の達人でございますから、一矢を射損じ、 甚『南無三……。』と乙矢を番へてピシーリ、義村の傍腹を望んで飛んで來る、此時又右衛門閃り右へ躰を捻つたるによつて、矢は左りの方へ外れて行く奴を、腰を伸して取捕まへた、矢が手捕へまになつて仕舞ひました、一手の弓は斯くなりましたのでござるから甚助馬からヒラリ飛んで降りて、 甚『參りました。』と聲を懸ける、ドッと周圍の者は賞稱しまする樣子、又右衛門、 又『ヲイ〱今改めて參るには及ばんよ、先から其方が參つて居るんだから、しかし其方の矢は重寶なものだなアバッタを見たやうに手捕まへになる、コレ〱何處へ行く。』 甚『兄の甚左衛門が出まして……。』 又『先づ少し待て、其方は大和流の弓術を拙者に見せたが、拙者が未だ弓術を見せんから、身共の射術を一ッ見て呉れ。』 甚『荒木氏射術を御存知でござるか。』 又『か……

……かとは何だ失敬な奴、乃公は武藝拾八般、何でも心得て居る。』 甚『然らば何流でござる御流義は……。』 又『柳生流ョ。』 甚『ヘエー柳生流と云ふ射術は心得ません。』 又『知らん筈だ、柳生流の射術は今日始めて開業なんだ、赤い提灯でも出して當日粗景呈上とか何とか書きたい處だ、弓を貸して呉れ。』 甚『ヘエー始めてお演りなさる……。』 又『始めてでも汝のやうに外れやアしない、行縢だの然んな物は要らない、弓と矢さへありやア好いんだ。』 甚『一手はございません、取寄せまして。』 又『一本で澤山だ、二本だつて外れる時は外れる、其品を貸せ。』 甚『宜しうございます。』 又『徒歩でも馬でも孰れでも好いんだが孰ちにする。』 甚『馬で……。』 又『馬かよし〱……馬丁。』 ○『ヘエ。』 又『又右衛門が乘るんぢや、馬ア一疋此處へ曳いて來て呉れ、成丈疳の強さうな能く駈けさうな荒い馬を………。』 馬丁『宜しうございます。』本多の家で乘人のない恐ろしい荒馬を其處へ曳いて參りまして、 馬丁『エ、先生此馬は如何でございます。』又右衛門轡を取つて馬相を見て居りました、 又『此馬が荒馬か。』 馬丁『左樣でございます。』 又『モウ少々荒いのを……。』 馬丁『モウ其馬ッ切りです。』 又『それが暴馬か馬ぢやアない猫かと思つた。』 馬丁『惡口を利ッ子なし。』 又『よし〱……拙者は準備は好いが、甚助宜しいか。』 甚『宜しうござる。』これ

から櫻井甚助も馬に跨りまして、先へトッ〳〵〳〵……甚助が走つてまゐります、又右衞門、又『早ーう……』馬勢を付けてトッ〳〵〳〵と乘立つてまゐりますと、櫻井の乘つて居りまする馬は乘馴れては居りますが、又右衞門の馬から見ると好くない、殊に荒木は馬術にも達して居りまする、煽り立て〳〵、お馬場を三週り廻りますと餘程先へ進んだ甚助と僅か一間ばかり離れる位に追付いて仕舞ひました。側で以つて、又『ハヨウ……』と聲を懸けますから甚助が、甚『恐ろしく近くへ來居つた』と不圖と後へ回顧つて見ると、又右衞門弓を首へ引懸けて一本しか無い矢を持つて頻りにピシーリ〳〵と馬を叩いて鞭の代用に使つて居りますから、甚『妙な射術があるものだ。』と思ひ一心に逃げやうといたす、又右衞門いよ〳〵側へ追附いて參りましたが、又『モウ好い……。』と思つて弓を取上げて矢を番へ放したかと思ひきや、弦音ばかりさせました。甚助は弦音が耳へ這入りましたから、その矢を前へ反らせやうと云ふ量見、鞍の山形のところへピタリと身躰を押附けると、又右衞門キリ〳〵〳〵と番へて切つて放したる其矢僅か一間ばかり離れて居りますから、甚助の乘つて居る馬のしりがひの處へピシリ、馬は驚き飛上がるとたんに甚助はドシリ眞ッ逆樣に落馬いたしました、又『どうだ甚助、柳生流の射術は外れつこあるまい。』甚『酷いペテンに懸ける奴があるものだ。』と思つたが、所謂藝才といふ奴で勝れたのだから詮方がございません。』甚『誠に恐れ入りましてございます。』又『サ、貴樣のやうな下手な奴を相手にいたして居ると、拙者の技術が鈍つて不可ん、兄を出せ。』甚『承知をいたしました。』櫻井甚助青菜に鹽を掛けたやうになつて、幕内へ這入つて參ります。甚左衞門は最前からこれを見てバリ〳〵齒を嚙んで居ります。兄『ヤイ汝の負樣は何だ、一度ならず馬から轉がり落ちやアがつて樣のない奴だ、どうしたと云ふのだ。』弟『兄上怒らつしやるな、どうも變智氣輪な奴だから、可笑しく變化をして、手毛列に強い野郎だ、惡くするてえと、兄上和郎も殊に由ると危ないせ。』兄『この野郎碌な事を吐かさん、譬へ何樣に強い柳生流の名人にもせよ、吾も寶藏院流の槍を取つては彼に劣るとも心得ん、サこれから汝の仇はこの甚左衞門が取つて呉れる。』と九尺柄の管槍を取上て暫らく休息、二度目にドン〳〵と太鼓が鳴りましたるにより、甚左衞門幕を絞り上げたることにて、お馬場の中央へ出でました。又右衞門も以前の甚助と違つて人に知られた奴と云ふのを心得て居りますによつて、襷十字に綾なし股立を高く取上げて、南蠻鐵骨の扇を以つて立出で互ひに禮義を厚くいたして、こゝに名人同士立會になるの件り、次回に委しく言上を仕つります

る。

第十三回　櫻井兄弟をつけ廻す

辯じ續きに相成りました伊賀の仇討の講談、前回は少々お短く申上げまして甚だ相濟みません、今回は少御退屈を掛けますることで恐れ入ります、さて櫻井甚助は又右衛門のために負けましたからはう〳〵の躰にて幕内へ引取りましたるが、兄の甚左衛門は大いに殘念に心得まして、甚『蒲公英付の槍なりと雖も、人命の取れんことはない、充分に行かば又右衛門の一命を取つて呉れん。』と云ふ心得、白の襷、同じく鉢巻をいたしまして股立を取上げ、寶藏院九尺柄の蒲公英付の槍を取つてお馬場の只中へ現はれ出で控へて居ります ところへ又右衛門これも襷を掛け鉢巻をいたして股立を取上げ、南蠻鐵骨の扇を取つてお馬場の眞中へ出る、正面御棧敷本多正勝公へ禮をいたしました時に、甚左衛門が、甚『さて荒木氏唯今は弟甚助未熟なる射術を以つてお相手をいたしたるに、御指南下されて誠に辱けない、甚左衛門寶藏院流の槍術を以つて一勝負仕りまするこど、イザ御用意を………。』甚『これは〳〵御叮嚀なる御挨拶、拙者疾くよりモウ用意はいたしてある、お心置きなく隙があつたらどこでも突いてお出でなさい、固より又右衛門は尊公に負けやうと云ふ量見は少しもない、貴樣のやうなる左官の宰取流に負けるやうで五百石の高祿を頂いて御指南役はしてゐられん、お氣の毒だが負けつこないサア何所なりとも突いてお出でなさいと大言を放ちましたるによつて櫻井は、甚『汝口の横に裂けたるか法外の雜言を申する奴目に物見せて呉れん、然らば………。』といふ聲諸共リウ〳〵と突出だしたる九尺柄の槍、中段にピッタリと附けましたが、此奴は寶藏院流の槍を持つては西國三十三ヶ國にて右へ出づる者がないといはれる天晴使人でございます、槍先に少しも亂れはない。その蒲公英の先へ又右衛門南蠻鐵骨の扇で柳生流片目外しの正眼に附けられたが、肌へ撓まず目まじろがず、鵜の毛で突いた程の隙もございません、名人同士の立合になると強ち打合ひまするものではございませんさうで、何か講談師が口から出任せにお饒舌をして一往一來一上一下陰火の面影、飛鳥の有樣虚々實々なんぞといつて饒舌りますが、さうポカ〳〵打合ひまするものではありません、双方共に隙を窺つて居りまして、甚『ヤ、………。』又『ヤ、………。』とヤ聲を掛けて又右衛門の方より、ヂリ、と進んで來ると、櫻井の方で跡へ退り又甚左衛門がジリ、と進むと、又右衛門が一歩退りまして、得物を整然双方附けたなり一

呼一吸といふ場合でございます………。けれども又右衛門は櫻井の技術は分つてをりますから、位取りをした時に、又『ナーニさのみの技倆ではないが、この者を負かすには御前で面白く打負かして遣らう。』と思ひましたるによりまして、又『此奴の術に凝を出させなければ不可ん………。』と思ひ、そろ〳〵先方を嘲弄し始めました。又『ヲイ櫻井、何で猶豫をして居なさる、下手の考へ休むに似たりといつてさう考へて居たつて勝つことは出來ん、どこでも好いから突きなさい………サ拙者の胸板を突きなさい、ヲイ櫻井、この胸板を突きなさい………。』といひながら左の手で己の胸をトン〳〵と敲いて、又『サア櫻井、突きなさい、未だ突けんかい。』トン〳〵、又『櫻井。』トン〳〵、又『甚左………。』トン〳〵、又『甚左衛門………。』トン〳〵、又『何をしてゐるのだ。』トン〳〵、又『ヲイ………。』トン〳〵、又『未だかい大哥イ………。』なんぞといひますから、サヲ甚左衛門残念で堪らない、又『何時までかくてあるべきぞ………。』と心急いたるによつて、甚『エーイ。』突掛けてまゐりましたる槍先の鋭きこと電光石火の如く、アワヤ又右衛門胸板を突かれたと思ひきや、左へ躰を開いて槍の柄中をポシーリと打たれましるから、甚左衛門空を突いて柄中を打たれ、甚『失策たり。』と右の槍を後へ曳きましたが、尤も槍術と云ふものは、

突く手が三分で曳く手が七分なものださうで、二度目に突き出しましたるその槍を左の小手を以つて又横へピシーリッ拂ひ除けて飛込まうといたした第三度目の槍を曳いて櫻井が甚『ヤーッ。』ャ聲諸共突掛けて來た奴をば掻くゞつて左の手持つて千段巻をグイと摑んだ。櫻井はこれを奪られてはならじと心得て曳かうといたしたが押へた手は離れゝばこそ又『どうだ櫻井、拙者が押へたこの手は離れまい、劍術槍術といつてな、これは術だから力量で取らうとしたつて、なか〳〵取れん、其方が手許を放してはならんぞヨ。』といひながら又右衛門右手に持つた鐵骨の扇で槍の柄中を、又『ヤッ………。』と一聲ピシリと打ちました。甚左衛門の手許が痺れたから、ポロリと打落され、甚『南無三。』と櫻井は又右衛門を臨んで組付いて參つた時に、義村が槍を此方に打捨てゝ兩手を揚げて櫻井に組付かせ、又『如何に御前なるぞ。』といひながら左りの手を櫻井の首筋に掛けて、右の手を袴腰へ掛けて、又『エイヤッ……。』一喝して又右衛門が、櫻井の巨大な身躰を引負つて、一振振つて此方なる惣社大明神のお池の中へボカアリ投り込みました。ドッと云ふ聲の上りました樣子、又右衛門甚左衛門を池の中へ打込んで置いてノソーリ〳〵池の縁へ來て覗いて見て居ると、甚左衛門はブク〳〵浮いたり沈んだりしてゐる樣子だから、又『ヲイ〳〵

甚助々々早く來い、兄貴が池の中で土左衛門と名を變へて仕舞ひさうだ、危ない〳〵。』甚助『危けリャア先から投り込まなけリャア好い。』と甚助驚いて長棹を持つて來て漸く長棹へ縋らせて辛うじて池から出て參りました。水を餘程飲んだと見えてゲッ〳〵ッといつて吐いて居ります、甚助頻りに介抱をして、甚助『兄上モウ大丈夫ですか。』甚『ウム、大丈夫〳〵。』甚助『鼻から黒い血が出て居ますヨ。』甚『ナニ黒い血……ハックショーイ。』といふ拍子に鼻から鮹が二疋飛出しました、又右衛門はそのまゝお座敷へ昇りまして正勝公の御前へ兩手を仕いて、又『恐れながら柳生流の玄妙を御覽に入れましたが、どうでござる御感心を遊ばしたでござろうな。』と申されましたから、殿『ウフン……直ぐと天狗をいふ奴だ。』と思ひましたが、殿『又右衛門勝負は時の運、其方勝を得たりといつて左樣に天狗をいふには及ばん。』又『イエ天狗は申しはいたしません、モウ拙者が勝つと極つて居りますので、唯玄妙を御覽に入れました丈で、御感心を遊ばしたかと伺つたので……。』

殿『感心をしたよ……。』といふところへ櫻井兄弟面目ないけれども詮方がございませんから、御前へ來て兩手を仕いて平伏をいたして居ります、本多公御覽なされて、殿『甚左衛門、甚助兩人其方等は強ち不覺を取つても下手といふ理由ではないのだぞよ、又右衛門がスコーシ強かつたのだ。』御大名樣でゲスナア、誠に結搆なお言葉を下さいましたが、兄弟は面目次第もなく御前を退りました。固より甚左衛門甚助の兩人は河井又五郎の義理ある叔父に當つて居りまするもので、此度又五郎は四谷六方白柄組の武藝者大勢を附けられて肥後の國人吉へ送られます、櫻井甚左衛門もその附人でございまして、白柄組の旗本阿部四郎五郎より依賴を受けて居りますから、これを機會に本多公へお暇を願ひましたるところ、早速お暇が出ました、兄弟はこゝを立退きまする心得、さりながら甚左衛門少々立兼ねて居りますのは兄弟で五百石の食祿を取つて居て、貧乏人に高い利息を取つて貸付けまして居る奴を、その金子の取上りが着きませんから頻りにこれを請求いたして居る、それを又右衛門が聞き込んで借方へ荒木がズーッと廻つて、又『櫻井兄弟より借りたる金子は返すに及はず、強て返せば其分には差置かん、それでグヅ〳〵申したら其請求人は荒木の處へ遣はすべし、必す返すことはない。』と云ふのでイヤ借方は悦びましたの何のといつて福德の三年目といつて雀躍をして請求にまゐりますると、○『私はお返し申したいんでございますが、お返し申すと荒木先生がお怒りでございます、お氣の毒だがお返し申すことは出來ませんから、どうぞ先生の方へ御催促を願ひます。』と云はれる、荒木のところへ

催促には往けず泣寐入になつて、貸した金子をそれへ打棄り早々姫路を退散に及びました又右衛門は固より渡邊數馬の助太刀をして河井を討ちます心得、又櫻井兄弟は又五郎の縁者といふことを心得て居りまして、殊に此者は附人といふことも承知いたして居りますから、又『此奴を此處を退散さして、此者の跡を尾いて參れば靱負殿の當の敵、河井又五郎の在所が判然することであらう。』と思ひましたから跡を尾けて行かうといふので、渡邊數馬に北藤武右衛門、山添伊兵衛以上四人、大坂へ出てまゐりたした。櫻井兄弟が大坂まで參りましたことは分りましたが、さて坂地のどこへ足を止めましたかそれが分りませんから、毎日大坂を探して歩きます、又右衛門の縁者中の島糸屋七五郎といふ方へ四名は泊つてゐた。荒木は大坂をグル〳〵櫻井兄弟の探穿をして歩きました、恰好三日目のことで、天滿橋を渡つて、その鳥居筋と申しまするところへまゐりまするど、豆腐屋から櫻井兄弟の使つて居る若黨の半平が岡持を提げて出てまゐりましたから、又『ハ、ア兄弟の者は慥かに此邊にゐるのだな、此奴の跡を尾けて往つて見て遣らう。』と見へ隱れに尾いてまゐりまするど天滿の鳥居筋といふところに、大和屋幸兵衛といふ宿泊屋がございます、その横手のところへ格子造で見越の松に黑坂塀といふ拵へ、鳥渡粋な家でございます、これをその貸座敷と申しまして、大和屋幸兵衛の家でこゝを貸しまする、朝夕の煮炊は櫻井の方でいたして唯家を借りるばかり、その家を借りて居るものと相見へます、若黨の半平岡持を持つて這入つて參りましたから、又右衛門跡から續いて格子を明け、又『賴む。』半『ドーレ。』若黨の半平それへ出まして、半『何れから御出でございまする。』とひよいと見まするど深い編笠を被つて大きな侍がニヨツキリ立つて居りますから、半『人の家へ來て笠も脱らずに格子の内へ這入る奴もないものだ。』と思ひましたが、半『エ、何處から御入來でございます。』又『(鼻潰の眞似)姫路の御藩士櫻井甚左衛門は此方かな。』半『ヲヤ〳〵、此の野郎鼻の障子が脱れて居ると見える、フガ〳〵いやアがつて能く分らないな……何と仰しやいます。』又『姫路の御藩士櫻井甚左衛門の御宅はフギラかな。』半『ヘヱ、櫻井の居りまする宅は此方でございます。』又『甚左衛門、甚助どのは御在宿かな。』半『ヘヱー在宿をして居ります。』又『確と在宿がな。』半『ヘヱー確と在宿でございます。』又『萬々僞りはいふがいな。』半『僞りは申しません。』又『左樣が……………屹度お出か。』半『御疑念には及びません、屹度居ります。』又『さうか…………。』といひながら、深編笠を取除けて、又『半平久しく逢はない、櫻井兄弟が居るといふので大きに安心をした、鳥渡取次で吳れるやうに…

……。』半平見ると荒木でございますから膽を潰して奥へバタ〳〵、半『檀那……大變〳〵。』甚『何が大變だ、大きな聲をしやアがつて……。』半『荒木又右衛門源義村が紺糸威しの鎧に六十四間の兜を眞向に押頂き栗毛の馬に跨り、太刀振翳して見參々々といつて來ました。』甚『そんな事をいつて來るかい。』半『そんな身拵ではございませんが、來たのは眞實です。』甚『不可ない〳〵、ゐないといへ、留守だといつて仕舞へ。』半『不可ません、檀那……あの野郎風の惡い奴で、深編笠を被つたまゝ家へ這入つて、姫路の御藩士櫻井甚左衛門の御宅は此方かなとかういひましたから、私も又右衛門ぢやアないと存じて、左様でございますと答へました、スルと甚左衛門殿甚助殿は御在宿でござるかと、云ふから、居りますと申しました、確と御在宿か、万々僞りはいふまいなと五月蠅くいひますから、御疑念には及びませんと云ふと笠を脱つて半平久しく逢はない、又右衛門だ、櫻井兄弟へ告げて呉れつて、強い詐僞に掛けられましたから今更不在とは申されません。』

甚『風の惡い奴だなア、ぢやア逢はない理由にも不可んから、此方へ通せ……。』いふ内に又右衛門ナーニ遠慮も會釋もなく、上つて來て、又『櫻井兄弟。』甚『こりやア御入來なさいまし。』又『どうした甚左衛門、久しう逢はんが、何時も機嫌が克て結構だ。』甚『御貴殿も相變らず御機嫌で恐悅でございます。』又『和郎は姫路の家を、拙者に試合で負けたといふので暇を取つて浪人をいたされたと聞いて、萬一遺恨に思つて拙者を尾覘ふやうな事があつてはならんとかう俺も思つたるによつて、拙者も姫路を浪人いたして實は和郎の跡を慕ふて來たのだ、この大坂へ來たのは知つて居つたが、坂地もどこに居るか和郎を探しに歩いて今日で三日目だ、拙者が天滿の天神を參詣いたさうと思つて、鳥居筋まで來ると後から先生々々と呼ぶ者がある、誰かと思つて回顧ると若黨の半平だ、豆腐屋から岡持を提げて出て來たから半平どうしたと云ふと、誠に先生御久しうございましたが櫻井兄弟はこの鳥居筋の大和屋幸兵衛の隣の貸座敷を借りて居ります、是非お入來をといふから、乃公も逢ひたくつて探して居たところだ、手土産の一ッも持つて行かなけりア、極りが惡いと云ふと、半平がナーニそんな御遠慮には及びません、當家の檀那も貴郎に逢ひたい〳〵とかう申して居ります、是非私と一緒に御入來……マア宜いから御入來なさいといふから、何か持參をいたすところであつたが急の事だから今日は素手で來たよ、誠に極りが惡いけれども不承をして下さい、和郎と乃公とは夫婦同樣、兄弟同樣の間柄にならうと思つて來た……ノウ半平さうぢやアないか……。』半『先生戲談いつちやア不可ません、大

虚言を吐いて話しをしてお在でなさるが、私が先生にそんなことをいつた覺えはございません……。』又『だつて豆腐屋から出て來たらう。』半『其處を見たに違ひないんだ……私はそんなことを申しは致しません……。』といふのを聞いて甚左衛門小聲で、甚『白痴奴……今時分豆腐屋へ行きやアがるもんだからこんな奴に尾けられたのだ、詮方のねえ奴ぢやアないか、汝のやうな腑拔は見たことはない……。』若黨の半平微聲で、半『そりやア檀那が惡いのでございます、儉約だから豆腐を喰へ〳〵つて豆腐ばかり喰はせるからかういふことになつたんだが、全躰私は油揚だと思つたんだ、豆では行くまいと推量をいたしました。』甚『洒落るなこの間拔野郎……。』又『時に櫻井兄弟。』兄弟『へエ。』又『拙者がわざ〳〵尋ねて參つたといふのは兄弟方と兄弟になりたいのだが、この又右衛門と兄弟の義を結んでは呉れまいか。』甚『へエ─……先生がさう仰しやつて下されば願ふてもない僥倖でございます、どうぞ何分願ひ　うござる。』又『それなれば兄弟の盃をいたさう氣の毒ながら酒肴を取つて貰ひたい。』甚『半平、一分の三ツ物を誂つてお酒を二升ばかり……。』又『ヲツト一分の三ツ物なんぞでは又右衛門飲めない、モ少し好い料理を澤山取つて貰ひたい、鰻を今日は喰ひたいから鰻を取つて、泥龜は誠に滋養物だから泥龜を五兩ばかりさう謂つて、鯛の刺身は隨分好いな、それから口取、煮魚、照燒、鹽燒、鳥渡お椀を大急ぎでさういつて呉れ、茶碗蒸も宜からうな、跡で亦洗ひといふところは結搆だ……。』半『先生そんなに召上がられますかい。』又『ナニ喰へなけりやア打棄るか狗に遣らうぢやアないか、酒も今日一日ぢやアない、毎日來て飲むんだから菰つ被りを一本取つて置いた方が利益だ、一樽取れ〳〵……其方が好い。』甚『人の金子だと思つて大仰な言を云やアがる。』と甚左衛門も弱つて仕舞ひましたが、何は兎もあれ、酒肴をそれへ取揃へ、

甚『サア召上れ……。』又『イヤア辱けない……そこで甚左衛門拙者を兄と思ひなさい和郎方兩人は弟だ、桃園に義を結んだる玄德、關羽、張飛と云ふ鹽梅に交情睦ましくいたさう……これからは拙者は和郎達のことを弟だから甚左衛門甚助とかう呼び棄てにする和郎の方は先生とでも兄上とでも云ひなさい、明日の朝から亦來るよ、荒木だ又右衛門だ酒肴を出して御馳走をせんければ不可んよ、前以つて斷つて置くよ。』兄弟『へエー。』又『乃公がこゝへ來るのが五月蠅と思つて毒などを調合て殺さうと思つても毒味をしない内は喰はねえから念の爲斷つて置く、不意に打つて掛つても氣の毒だが負けない、却つて貴樣達の命がないよ、これも斷つて置くよ。』兄弟『へエー……。』又『大きに今日は御馳走に

なつた、左樣なら。』その翌日になると黑木綿切丈五ッ處紋付いたる着物に白小倉丸行燈の横ズッ頰を張挫いたやうな袴に切緒の雪踏を穿き、三池の源太光吉の大刀に忠義の小刀を帶し、南蠻鐵骨の扇を携へにこ〳〵して、又『櫻井來たよ、今日は何が喰べたい。』又翌日になると、又『今日は何が喰べたい……。』と毎日〳〵こゝへ參つて甚左衛門甚助を責めますから、兄弟は殆ど當惑をいたしまして、甚『此者を人手を以て殺すより手術ない。』と心得て俠客有頂天九郎兵衛へ依賴に及ぶ一條次回に……。

第十四回　櫻井兄弟の苦心

さても櫻井兄弟は又右衛門の爲めに毎日々々來られては喰倒されますので大散財、甚左衛門甚助青い息を吹いて、甚『弟……。』甚助『何です兄上。』甚『どうも弱つたなア、厄介な奴に見込まれて實に困つたなア……。』甚助『困りましたな、加之に用心深いと來て居るから、どうする事も出來ませんや。』甚『どうしたら宜からう。』甚助『左樣さ、かうなつたら人手を持つて殺すより外に工夫はありますまい。』甚『人手を持つて殺すと云つたつて、その工夫はあるまい。』甚助『イエ私が一ッ軍略を廻らしませう。』甚『其方軍略を施すとか。』甚助『左樣でございます、私は人に聞きましたが、此願教寺堀に有頂天九郎兵衛と云ふ顏役があります、この人はなか〳〵俠客心のあるもので、人に賴まれて嫌といふことをいはないと云ふ位な奴ださうでございますから、此奴に賴んでその九郎兵衛の子分の手を借りて、途中に待受けさして當家から歸るところを喧嘩仕懸けで殺さして仕舞つたら、後腹が惱まんで好いかと思ふがどうです。』甚『さう行きやア誠に結構だが、巧く參らうか』甚助『參ります……なれども兄上若干か金子を先へ摑ませなけりやア不可ない、往つて一ッ賴んで來ますから二十兩下さい……。』甚『二十兩位で亡きものになれば安いこつた……ぢやア和郎に賴むよ。』甚助『宜しうございます、晩に又右衛門が來たら酒肴を取つて澤山に馳走をして置いて下さい、今夜の內に野郎を失つて仕舞ひまするから。』甚『家の方は乃公が擔當た、九郎兵衛のところを萬事和郎に賴むぞ。』甚助『承知をいたしました。』甚助金子を懷中いたして願教寺堀へ參りまして、聞くと直きに知れました、戶外に立派な荒格子の嵌つて居りまする家、甚『御免を蒙ります。』子分『へお出でなさいまし』甚『九郎兵衛親分は、此方でございますか。』子分『ハイ九郎兵衛は此方でございます、誰方……。』甚『私は姫路の藩士櫻井甚助と申す者、親分に折入つてお願ひ筋があつて參りまし

た宜しうどうか……。』子分『ヘイ。』乾分がこの事を告げますと、九『此方へお通し申せ……。』そこで子分が出て參つて、子分『親分が奧にお待ち申して居りますからどうぞ此方へお通りを願ひます。』甚助『御免を蒙ります。』刀を提げて案内に連れて、甚助奧へ來て見ると、火鉢の向ふに座つて居りまする九郎兵衞と云ふ男、年齡五十三四と云ふデップリ肥つた人品の好い老人、九『こりヤアお出なせいましお尋ねに預りました有頂天九郎兵衞は俺でございます。』甚『これは〳〵親分には始めまして御意を得てございます、拙者は櫻井甚助と云ふ不調法者、お見知り置かれまするやう……。』懷中から金子二十兩水引を掛け熨斗を付けてそれへ出し、甚『何ぞ調へて參るべきでございますが、御地不案内の者ゆゑ失禮ながらお身内の衆に一口御酒なぞお進げ下さるやうに願ひます。』九『これはマア有難い事、お土産は有難く戴きます、就きましてはその御用の趣きは……。』甚『ハイ折入つて願ひ上げますが、別の事でもございません、私兄甚左衞門と申する者と兩人いたして、坂地を見物いたしに參りまして、天滿の大和屋の隣の貸座敷を借りて居りました、ところが胡摩の蠅に尾けられまして殆んど難澁をいたします、どうぞ親分の手を持つてその難を避けてお貰ひ申したいと心得て願ひに出ましたが、何分宜しうお計らひを願ひます。』九『ハア胡摩の蠅に尾けられて難義をするから、その難を避けて與れろと云ふのは、その胡摩の蠅でも殺して與れえといふお頼みと見えまするな……。』甚『左樣でございます。』九『そんなら貴郎方御二方が御兄弟でお揃ひでありながら、及ばんと云ふのはどういふ理由……先方が大勢でございますかなア。』甚『一人でございます。』九『一人の胡摩の蠅に貴郎方の及ばんといふのは少し分りません。』甚『及ばんといふ次第ではございませんが、右胡摩の蠅といふものは私の伯父……。』九『ハ、ア貴郎の伯父さんですか。』甚『イエ……ナニ伯父ではございませんが、伯父の伯母ノー……孫の從兄の、弟の嫁の婿の……姪の甥の女房アの妹の弟の阿母の甥の伯父なんでゲス……マア鰯を煮る鍋とでも申さうか誠に腥い中になつてをりまする事ゆゑ、どうも手を下す譯には能り兼ねます。』九『成程……人手を以つて亡きものに成程……。』甚『就いては善を扶けて惡を懲す親方の御氣象といふことを兼々承はり、此儀を願ひ出でました、何分御承諾を下さいますれば悦ばしい事でございますが如何でございませう。』九『ようございます、さういふ者なればそりやア命を取つて仕舞ふ方が諸人の難義を救ふやうなもので、承知をいたしました、何日にしませう。』甚『ならうことなら今晩……其者は中島に居りまして、天滿の私宅へ毎日

のやうに參りまする者、その歸る途中に待つて居つて喧嘩仕懸けで殺してお貰ひ申したいと云ふ、拙者の方の都合でございます。』九『好うございます。』甚『では四ツ(十時)の鐘を合圖に私宅を出しますから、何分途中で願ひ度うございます。』九『承知しました、途中で淋しいところは渡邊橋ですから、あの邊で敲き締めて、簀卷にして石重を付けて水の中へ沈めれば人目にも掛らず……。』甚『ハイさうなりますれば一段の事でございます。』九『シテ其奴は劍術でも出來ますかい。』甚『イエ出來るといへば出來る、出來ないといへば出來ない奴。』九『力量でもありますかい。』甚『ないといへばなし、あるといへばある奴……。』九『何だか和郎さんのいふことは明瞭しませんが、劍術が少し出來て小力量のある奴と思つて居れば宜うございますなア……。』甚『左樣でございます……。』九『面躰格好は……。』甚『身躰の巨大な奴で、黑の着物に白小倉の袴を穿て居ります、何分どうぞ願ひます。』九『モウお歸り……それは〳〵ヘイ左樣なら』甚助は先方へ賴んで家を出る……此方は櫻井甚左衛門、甚『今に又右衛門が來るであらう……。』と待つて居ります處へ、荒木又右衛門相變らず黑木綿の紋付に白小倉の袴を穿き、長刀を打込み鐵骨の扇を提げ、又『櫻井來たよ、又右衛門だ。』甚『こりやアお出なさいまし、モウ今日はお待

受申して居りました、サア一口召上れ……。』又『ハヽヽ此頃はモウ馴子になつて、酒と肴を整へて置くやうになつたな、感心々々……サア毒味をしろ。』毒味をさして大きな盃でガブ〳〵飮んで居ります、又『時に甚左衛門、今日は甚助が見えんが何處へ參つた……』甚『あれは昨晩新町へでも浮れに參つたのでありませう、まだ戾つて參りません。』又『ナニ女郎買だ、生氣意な奴だ……止せば好いのに、名が甚助といふから優待つこはありやアしない、詰らない眞似をする奴だ。』といふ内噂をすれば影、甚助戾つて參りました。甚助『エ先生お出でなさいまし。』又『今和郎の話しをしてゐたが、其方昨晩女郎買に往つたさうだなア。』甚助『そりやア愚兄が先生へ座興に申上げましたので、私は生玉へ參詣でいたしに參りました。』又『生玉明神へ參詣に往つた、信心詣りや神詣りなぞは止せ、心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らん、正直の頭に神宿るてえが、其方などは神の宿る性質ぢやアないワ、頭へ狸が巢ウ作る方だ。』甚助『そんな惡口を利くもんぢやアありません……。』又『眞實だ……マ、一杯飮め……。』二人揃つて酒を飮みまする内に、兄の甚左衛門に充分届いたと内々知らせましたから、今日は快く又右衛門に酒を勸めて居ります内に、夜に至り五ツとなり四ツの鐘更々と告げ渡る、甚『先生。』又『何だ……四ツ

を打つて居ります。』又『乃公ア時には借りがないよ。』甚『さうでもございませうが、餘り遲くなりまするから……追立てると云ふ次第ぢやアございませんが、中島の糸屋さんも戸外を開けてお待遊ばしては物騷でございます。』又『今夜ア乃公ア少し太儀になつたから泊つて行かう。』弟の甚助　甚『戯談いつちやア不可ません、私共へ泊につて詰りませんや、お歸りなすつた方が好うございます、お歸りなさいまし。』又『乃公が何も泊つたつて其方の肛門を覘はうと云ふ譯ではないではないか。』甚助『そんな事は拘ひませんが、中島の糸屋さんでもお待ちなすつてお在なさるところへ、貴郎が此方へお泊んなさるすつて、明放しにして御心配でございませうから、明晩は此方へお泊りなさるやうにして、御悠然と此方へお泊め申しませう、今晩はお歸りが宜しうございます、ネイ先生……。』又『さうか、さう汝等がいふところを無理に泊つたつて面白くない、ぢやア歸らう、明日又甘いものを澤山御馳走してお呉れよ。』甚『承知しました、左様なら……。』準備をいたして又右衛門、一歩は低く一歩は高く、蹌々踉々たる千鳥足、今渡邊橋へ掛つて參りましたが、月は皎々と冴渡つてソヨ〳〵吹く軟風心地好く、又『ア、好い心持だ。』と辨慶の小謡を唄ひながら、プラリ〳〵と橋の袂を降りて來やうとするとバラ〳〵〳〵と來た一人が前から

ドンと突當りました。甲『ヤイ突當つたら挨拶せい。』又『勘辨をして呉れ、醉つて居るから勘辨をして呉れ……。』といふと又左の方から一人ドン、乙『ヤイ突當つたら挨拶せい……。』又『勘辨をして呉れ、何時だ……。』乙『突當つて時を聞く奴が有るけい。』といふ時亦も右手より一人ドン、丙『ヤイ突當つたら挨拶せい……。』又『今夜ア滅法突當る晩だなア、生醉をいぢめるのは罪だから勘辨して呉れ……。』言葉終らざる内に亦もや一人後からドンと突當りまして、丁『ヤイ突當つたら挨拶せい……。』又『少し待つて呉れ前から來たものは乃公が醉つて居るから突當つたかも知れんと存じて謝つて居たが、後には目がねえから其方が挨拶をしなければならん、分つたか……此方から挨拶をしてお堪りこぶしがあるものか……。』と又右衛門左右を見て、又『ヤア、南瓜野郎コテ〳〵出やアがつたなア、こりや何か仕組んだ事であらうわい。』といふ内に此方の有頂天九郎兵衛が九『ソレ殺んで仕舞へ。』一同『心得たり。』と得物を持つて大勢が八方から打つてかゝりました。

又右衛門豫てからうあらんと思惟して居りまするによつて少しも動ずる色なく、右より來る奴を左方へ捕つて投げ、左りより來る奴を右へ取つて投げ、前より來つたる者を足を持

つて蹴倒し、後より來る奴は肩へ取つては向ふへ投げ、摑んでは投げ、取つては投げ、ちぎつては投げ、宛ら人間の粟餅のやうなる格好でございます、手に立つ者一人もなく、皆々、一同『こは敵はじ。』と散亂をいたしました。義村先生鐵骨の扇を振上げて、又『逃げるな返せ……。』と追て參りましたる後より有頂大九郎兵衛が、長光の大刀を振翳して、九『エイ……。』矢聲と諸共に擊て掛りました。大抵のものなれば眞二ツになるべき處なりと雖も、柳生流極意の技術、太刀風三寸にして身を翻へす、又『心得たり。』と躰を左へ變しましたるによつて、ヨロ〳〵と透迤〳〵ところを後へ廻つて義村が、又『ヤツ……。』と大喝一聲その腰を突きましたから、前へヨロ〳〵バツタリと倒れ、起上らうとするところを起しも敢ず、又右衛門が九郎兵衛の上にウンと馬乘に跨りました。又『此野郎危ないことをしやアがる、何だ汝は……乃公が好い心持に酒を飮んで來たところを、亂暴いたし恐ろしく骨を折らせやアがつた、身躰を餘り動かしたものだから少し胸が變挺になつて來た……グイ〳〵……グロ〳〵〳〵〳〵。』と九郎兵衛の頭から小間物見世の開業式をいたしましたが、イヤ卑漏なお話し、又『グーイ……ア、宜い心持になつた、胸がせい〳〵した……見れば俠客とか横者とかいふやうな身裄をして居るが、其方は拙者を知らんのはモグリだな、この大坂に於て又右衛門を知らん奴は俠客の内にはない筈だ、堂島に五年道場を開いて居たから俠客は皆乃公の弟子ぢや、貴樣は柳生眞流の劍士荒木又右衛門源義村を存せんか。』九『イヤア先生……。』又『何だと……。』九『小哥でございます……。』又『ナニ黑塀……黑塀と云ふのはあすこに松の木が出て居る九郎兵衛でございますよ。』九『そりやア黑塀でさア、小哥は有頂天九郎兵衛。』又『有頂天九郎兵衛……ウームさうか。』又右衛門九郎兵衛を引起して遣りました。九『ヲ、臭さ、貴郎何を喰べて來なすつたのぢや、大いどうも臭いなア。』又『そりやアどうも詮方がねえ、臭えものを頭から注けて遣つたから臭い匂ひがするんだ、貴樣の頭を見ろ、禿頭へ吐物が掛つたところは汁飯の中へ金杓子が身を投げたやうだ。』九『惡口をいふもんではございません。』又『惡口ぢやアない、汝が亂暴だ、師の影は七尺去つて踐まずといふ、それを何ぞや師匠へ白刄を以つて手向ひをして其方はそれで濟むと思ふか、怪しからん奴だ、どういふ理由でかういふ間違ひが出來たのだ。』九『先生小哥は貴郎とは思ひません、今日小哥の家へ姫路の家來の櫻井甚助といふものが來まして、貴郎のことを胡麻の蠅だといふて、どうか手を廻して殺して呉れと賴まれまして、小哥のところへ土産に金子を二十兩持つて參りました。其時

に小哥が貴郎はお武家さんだから、胡麻の蠅の一人位は貴郎さんの手で以つてどうかなりさうなものだと聞いたら、そりやア私の伯父の叔母の從兄の孫の甥の兄貴の姉さんの何ぞと胡魔化しやアがつて、とう〳〵先生に抵抗せましたが憎いことをする奴で、何とも申譯がございません、私はこれから櫻井甚助の家へ往つて、甚左衞門と甚助の野郎を捕へて先生のところへいひ譯にまゐらんければなりません……コレ野郎共天滿の鳥居筋まで行け……。』と子分を連れて行かうとするのを又右衞門が、又『先づ〳〵待つて呉れ、あの野郎はモ少し存命して置かなければ都合の惡い事があるんだから、モウ分つてゐればそれで好い、乃公も大方さうであらうと思つた、九郎兵衞金子にしろ、これからかう〳〵いつて金子の三十兩も取つて遣れ。』九『宜しうございますか。』又『ア、好いとも〳〵。』九『それぢやア小哥は徳用でゲス。』又『ウムさうしろ。』九『有難うございやす、ぢやアさういたしやせう、先生小哥のところへ是非お尋ね……。』又『屹度行く。』九『誠に今晩は失禮をいたしました。』又『イヤ拙者も大失禮をいたしたちと尋ねて來い。』九『貴郎お宅は……。』又『中の島の糸屋七平の家にゐる。』九『ハア糸屋さんに……では明日にもまゐります、へエ御免下せい。』又右衞門は中の島さして歸りました。九郎兵衞は子分を連れて天滿の鳥居筋櫻井甚左衞門の許へまゐりまして、表の戸をトン〳〵〳〵、九『一寸御免……鳥渡御免下せい。』甚助『誰方で。』九『小哥で、有頂天九郎兵衞で。』甚助『ヲヤ親分でござるか。』と戸をガラリと明け、甚助『サ此方へ……親分今晩は御苦勞樣でございました、御願ひ申した一件はどうなりましたナア。』九『貴郎に劍術は出來るかと聞いたら、出來ると云へば出來る、出來ないと云へば出來ないなぞと、曖昧とした事をいふてゐやしやれたもんだから、子分が多數怪我をいたしました、イヤモウ劍術の強い奴で皆な酷い目に逢つたところを、小哥が後から丸太で以つて腰を擲つて倒れるところを二ツ三ツ殴つて巨大な石を背中へ載せてギリ〳〵卷に繩で縛つて川の中へポカンと沈めに掛けて仕舞つたからモウ大丈夫でございます、けれども子分が誠に大怪我をいたした者もございまするから、お氣の毒の事やけんど膏藥代として三十兩戴きたうございます。』甚助『ヤ大きに御苦勞であつた、委細承知をいたしてござる。』といつて兄の甚左衞門に話しをして、三十兩の金子をそれへ持つて出まして、甚助『此金は御膏藥代……何れ亦改めてお禮に罷り出でます。』九『イヱお禮なぞとは痛み入ります、左樣なら膏藥代はお貰ひ申して置きます、ハイ左樣ならと九郎兵衞は門口でベロリと舌を出しました、此方は櫻井、兄弟『ヤア安心……。』とその

翌朝の事で、甚『サヽ、兄上祝酒を飲まう。』甚『結構々々……半平酒の準備をしろ。』と若黨の半平が酒の仕度をして兄弟朝遣りに一杯始めて居ります、甚助『どうだい兄貴、孔明の謀略充分に的中して結構ぢやアないか。』甚『乃公もかう巧く行かうとは思はなかつた、先づこれで枕を高く寢られて、乃公ばかりではない、河井又五郎も嘸喜ぶであらう、第一彼　又右衛門の聲が氣に喰はない、眞實に癪に觸れる聲だナア、エヘン櫻井又來たよ、又右衛門だよつて云ひアがる、彼　聲を聞くと溜飲が流つて來る、今日からあの聲を聞く氣支ひない。』○『エヘン………。』徽聲で、甚『甚助妙な咳拂ひが聞えたぜ、又右衛門の咳拂ひに能く似て居たやうだ。』甚『そりやア兄上相郎神經がとがめるんだ、河の中へ沈めに掛けて仕舞つた奴がこゝへ來る筈が無い。』甚『それでもどうも似た聲だ。』甚助『戸外へ通る人が咳拂ひをして通らんとも限りません。』甚『さうであらうけれども………。』○『エヘン。』甚『あれだ。』甚助『さうさねえいさういへば能く似た咳拂ひのやうだ………。』と話しをしてゐる内にガラ〳〵と戸口を明けてピシ〳〵と這入つて參つたから、甚『イヤ〳〵家へ這入つて來たぜ。』といふとガラリと襖を明けて、又『櫻井………。』と又右衛門顔を出しましたから、甚左衛門、甚助イヤ驚いたの驚かんのといつて、甚『アッ………。』といつて

甚『先生どうしてお出なさいました。』又『どうして來たつて足で歩いて來たんだ、平生來る又右衛門が來たのをさう喫驚するには及ばんぢやアないか、大層御馳走だナア、モウ今日は乃公が來ない内に始めたな……サヽ一盃御馳走にならう、貴樣達がそう遣つて始めてゐるからには毒も這入つてゐやア仕めえ、大きな盃で遣ッつけろ。』とドッカリ座つてガブ〳〵飲んでゐたが、やがて、又『時に櫻井兄弟、乃公が晩夜泊めて呉れろとあれ程いつたものを泊めて呉れんもんだから、既での事に命を棄てるところ……。』甚『ヘエーどうしました、』又『乃公がこゝから出て渡邊橋まで往くと、一人前から突當つて來やアがつて突當つて挨拶せんかいと吐かしやアがるから、勘辨をして呉れろとかういつた、スルト又横から一人突當つて挨拶せんかいと云ふから、勘辨をしろと謝つた。スルてえと今度は左りの方から突當つて來やアがつて挨拶をしろと云ふ、スルと今度は後から突當つて來やアがつて、挨拶せんかと申すから、後に目のない人間だから、其方で突當つたんだ、其方から詫言しろ、乃公の方から突當りはしない、この南瓜野郎と云ふと、イヤモウさういふ輩がウンズモンズ出居つてな、疊んで仕舞へと一人聲を掛けると拙者に撃つて懸り居つたな』

甚『ヘエー…………。』又『その時に腕に覺えの柳生流、心得たりと大勢を相手に打合つた

が、ア、ー酒は飲可きものでない、後から一人丸太を持つて土俵骨を挪やアがつた。』兄弟『へエー。』又『乃公がドッカリとそこへ倒れるところを、太い丸太で背骨を二ッ三ッ毆居つて、巨大な石を乃公の背中へ縛ひギリ〳〵巻にしやアがつて、石と諸共に渡邊橋からポカンと河の中へ水葬禮にされちまつた。』甚『へエー……ソそれからどうしました。』又『それなりけり拙者も知らんであつたところへ、不思議や我身躰の繩が解けてな、乃公が不圖と眼を開いて見ると、砂原へ座つてゐる、向ふを見れば、渺々たる青海原、雌浪雄浪がコウ打寄せてゐる、ハテこゝは何處であらうと、回顧つて見ると蛤の中から吹出してゐるやうな家が向ふにコウ見えてゐる、ハテナ妙なところへ來たと思つたが、則ちそれが龍宮城だつた、門の扉を開くと唐子人形の着てゐる筒ッ袍を着て、頭へ蛸を載せた奴と鯛を載せた奴が、柄の長い軍配團扇髣髴なものを持つて乃公の頭の上に差翳して、戀人にはイザ先あれへ入られませう……。』甚『先生戯談いつちやア不可ません、そんな事があるもんですか……。』又『マア默つて聞け、變だと思ふと、乃公に龍宮の乙姫が戀に焦れてゐるから是非にと云ふから、門を這入つた。スルト乙姫が喜んで、又さん能く來てお呉れだモウ主を歸さないといふのよ、乃公が誠に辱けないけれども、今一遍乃公は大坂へ歸つて櫻井甚左衞門、甚助と云ふ兄弟同樣、夫婦同樣離れられん交情であるから、どうかモウ一遍彼等に逢ひ、別れを告げて屹度來るからといふた、それでは屹度來て頂戴よう又さんとポンと乃公の背中を叩いて、門まで見送つて來た、又さん間違ひなしと、かういつて又乃公の背中をポーンと姫が叩きやアがつてなア。』甚『へエー。』又『左樣ならといふ聲が耳に入つたかと思ふと、乃公が不圖と氣が注いて……見ると渡邊橋の上に座つてゐた。實に奇異の思ひで、惣身別段怪我もなく、今日此處へ來たのだが、時に櫻井兄弟世の中には間抜な奴があるものだせ、その乃公を殺さうと思つて頼んだ時が二十両、跡で亦膏藥代が三十両都合計算して五十両と云ふ大金を滅茶々々にする奴があるさうだが、何んな面をしてゐるか其野郎の面が見ていや。』兄弟『ハア。』櫻井兄弟驚くまいことか、甚『大金の出た計略も畫餅になつて仕舞つた、這りや又失敗か。』と思つてゐるところへ、江戸表三番町、阿部四郎五郎の使者として、竹内玄丹といふ者來り、この者に頼んで廣敷寺の土手で荒木又右衞門、竹内玄丹と暗夜試合の件りに相成ります。一寸一服。

第十五回　竹内玄丹

エヽ櫻井兄弟又右衛門を殺さうと心得、遂に五拾兩の金を有頂天九郎兵衛に取られて仕舞ひ、荒木は滿足でございますが、此方は誠に殘念に心得てをりましたが、如何とも詮ない、甚『どうか今一遍工夫を凝して殺さう。』と思ふてをりまするところへ、侍『御免……。』と戸外から訪ふ聲、半『ドーレ。』と内より若黨の半平が出て參りまして見ると、頭は切下髪の立派な侍、侍『櫻井兄弟御在宿か、拙者は江戸表三番町、白柄組の阿部四郎五郎の使ひでござる、竹内玄丹と申するもの、御兄弟御在宿召れば鳥度御意得たうござる。』

半『宜しうございます、暫らくお扣へを……エ、檀那樣へ、唯今江戸三番町の阿部四郎五郎樣から竹内玄丹と云ふ人が來ました、恐ろしいぞうも軀幹の巨大な眼のギヨロッとした切下髪の强さうな人で、ありやア又右衛門の二代目ぢやアありませんか、モウ一人でさへ弱つてゐるところへ、あんな奴に來られた日にやア大變でございますなア。』甚『ヤッさうか拙者がモウ此上もなく御懇意申上げてゐる御仁、お目に掛らう……。』と甚左衛門出て參りまして、甚『これは〳〵竹内氏、能うお出あつた、サどうぞ此方へ、暫らく御意得ませぬ。』玄『イヤ其許も御機嫌能う……左樣なら御免を蒙りまする。』と足を洗つて上りました。

玄『さて御兄弟久々にてお目に掛りましてござる。』甚『イヤ竹内氏拙者も久々にて拜顏を仕つる、シテ何御用にて當坂地へお越になつた。』玄『されば阿部公のお使で當地へ參りましたる次第にて……。』甚『ハア左樣か何でござる。』玄『別儀ではござらんが、河井又五郎へ武藝者を大勢附人にいたして三州片濱の松平紋太郎の知行所まで送り、それより肥後の人吉まで又五郎を送る積りになつてゐるのは貴公も豫て御存知、其附人の中の御貴殿が何故あつてこの坂地に御猶豫なされるか、至急に三州片濱まで乘込んで來て貰ひたい、能く御兄弟に對面をいたして此儀を申陳て呉れよとお使ひを受けて拙者罷り越しました、何故斯樣に御猶豫を召されてお在でなさるのでござる。』甚『それがな立つことが出來ないのだ。』玄『ハヽア何か不都合でもござるかな。』甚『されば御話し申するが斯くいふ譯聞いて下され、河井又五郎を覘ふ靱負の一子數馬に柳生流の劔術荒木又右衛門と云ふ柳生流の名人がある、其者は靱負の惣領娘おかぢといふものを妻にいたしてゐる奴でござる。』玄『ツム……。』甚『それは本多の指南役でございまして、拙者とは同藩・拙者と河井又五郎は伯父甥といふことを心得て居つて、拙者を逃さぬやうにして拙者の跡を尾いて行きさいすれば、大丈夫又五郎の在所が分るといふ心得で居りますか、この大坂へ參れば亦大坂へ尾いて來て、毎日拙者の處へ來てわれ〳〵兄弟をいぢめやアがる、此處を逃

げれば又跡から尾いて來て、何の事はない、敵の手曳を拙者がしなけりやアならないやうなことになつてゐるから、此處を動く事が出來ません、それでベン〳〵とこゝに滯在をいたして居りますのでござるが、如何いたした者でござらう。』玄『ウム成程さういふ理由でござるか、そんな奴なら面倒だ打殺してお仕舞ひなすつたら宜からう。』甚『それがな向ふの奴が拙者よりスコーシばかり強い奴なのでかゝる事が叶ひません。』玄『強い者なれば參つた時に毒でも調合て毒殺をいたしたら如何な者。』甚『ところが先方がなか〳〵用心深い毒味をしなければ喰はない奴で。』玄『然らば人手で以つて途中で殺つて除けたら如何でござる………。』甚『それも遣りましたが頃日五十兩掛けた計略が滅茶々々に畫餅になつて、イヤモウ酷い目に逢ひました。』玄『始末に行かん奴だなア、しかし拙者がそれを承はる上はどうも詮方がないとばかり申しては居られん、竹内玄丹腕をお貸し申さう、かう遣つて三人集れば文珠の智惠、何か一計を案じてさういふ奴を亡きものにいたする事が出來まいものでもない………ノウ甚助殿。』いふとこの弟の甚助と云ふ奴は、チカ〳〵小才覺の廻りまするものなれば、甚助『兄上竹内殿が腕をお貸し下さらば面白いことがある、拙者が孔明の謀を旋らすでござらう。』甚左衛門聞いて、甚『不可ん〳〵、貴郎の孔明の計略では

五十兩滅茶々々にして仕舞つた。アゝいふ事があると不可んから無益だ〳〵。』甚助『ナーニ今度は大丈夫、又右衛門を新町へ大坂を出立する名殘ぢやといふて、女郎買に連れて往つて散座ッ腹酒を飮まして惡醉をさして、先方の相方に依囑で七ツの鐘が鳴つたら六ツと僞つて、戸外へ出し、途中へ竹内殿に待受けて貰つて擊つて戴いたら、英雄も暗夜の礫は防ぎ難し、如何に又右衛門なりと雖も不意にかゝられて何條堪るべきや、この計策は如何でござるな。』玄丹手を拍つて、玄『ヤその御工夫どうも結構、玄丹途中に待受けて、不意を打つてその又右衛門を充分に擊留めて御覽に入れ申さう、速かに右樣にお取計ひなさい………。』甚『それならさういふ事にいたさう、今にも又右衛門が來るであらうから、玄丹殿を此處へ置いては不可ん。』と玄丹を外の座敷へ通して酒肴を出し、さて又右衛門の來るのを待つてゐるとも知らず、荒木先生、黑木綿栗箪五ツ處紋付いたる衣類に、白小倉の丸行燈の横ズッ頰を拳固で張挫いたやうな袴を穿いて、源太光吉の大刀と忠義の小刀を帶し草履を穿いて、又『エヘン櫻井又來たよ。』甚『こりやアお在なさいまし、先生今日はお入來が少し遲うございましたなア。』又『ア、今日は大きに遲かつた、イヤア酒と肴を取つて待つてゐて呉れたな、此頃はモウ馴ッ子になつて、來ん內から待つてゝ呉れる感心々々…

……サア毒味をしたり。』と毒味をさして始める。甚『時に荒木先生、モウ吾々共も大坂を見物いたしましたから、いよ〳〵出立をいたさうと思つて居ります。』又『和郎が立つなら乃公も立う、和郎と乃公とは兄弟同様夫婦同様、離れられん交情だから、一緒に立う、何日出立いたす積りだい……。』甚『ところでその大坂を見物してそれで、新町を知らないといふと、他人に自慢も出來ません、大坂名殘の女郎買新町の景況を今晩は見て參らうと思ひますが、如何でございます、先生も御來車なさいませんか、お伴いたしませう。』又『ナニ傾城買……イヤア結搆々々、乃公は女郎買は大好きだ、是非出掛けやう、しかし乃公はお金子がない、御隨行だよ。』甚『エ、宜しうございますとも、私の方でお勸め申すのだから、おんぶをなさらうとも抱子をなさらうとも思召次第でござる。』又『結搆だな、自腹を切つて、女郎買は感心としないが、どうも官費と來ては結搆だ、直ぐと行かう……。』甚『未だ日が暮れません。』又『篦棒奴、晝遊びの出來ん法があるかへ。』甚『イヤ遊びは夜に限ります、晝といふ奴は、欠點が見えて不可んから止しませう、夕景にこゝを出掛けませう。』又『さうか此方は御隨行だから乃公の方で彼是苦情をいふ理由に不可ん、然らば夕方まで待たうが、どうして居やう。』甚『こゝに御酒を召上つてお出でなさいまし。』

又『さうか、未だ日が暮れぬかい。』甚『まだ暮れません。』又『未だ暮れないかい。』甚『未だ日は暮れません。』又『アヽ今日は恐ろしい日が長いやうだなア、ピタ〳〵戸を閉めて燈火を點けて出掛けやう。』甚『外へ日が當つて居ります。』又『それぢやア何にもならないエ、日が長い〳〵。』といつて居る内に黄昏といふ刻限になりましたから、甚『出懸けませう。』又『サア行かう……。』甚『先生……和郎はそれで宜しうございますか。』又『此奴等は嫌に氣取る奴だなア、身拵なぞを着替へて傾城買を爲るのか、未だ其方等は青いな、乃公なぞは女郎買に行くのに、身拵なぞを着替へたことはない、どんなに宜い身拵をしてゐたつて先方へ往つて金子を使はなけりやア銀流しといはれて直ぐと惡くいはれなけりやアならない、穢ない身拵をしてゐても先方へ往つて金子を湯水のやうに使つて見ろ、旦那樣で待遇される、女郎買に身拵を着變へて行く奴は女郎買に馴れん奴だ、ちと未だ遊ぶ方の修行が其方共兩人は足りんわい……。』甚『さうですか、それぢやア出懸けませう。』

又『行かう〳〵。』と途中まで來り又右衛門が、又『時に櫻井兄弟家で飮む酒と云ふ奴は戸外へ出ると醒めて不可んものだ、途中で一杯遣らう。』甚『モウ喰ふ算段をしやアがつて詮方のねえ奴だ。』と料理店へ這入つて、三人微醉機嫌で新町へ這入つてまゐりまると、兩

側の茶屋ではチリカラタツポー大層な賑かさ、又右衛門が、又『ハア好い心持だなア、櫻井兄弟夜陰を晝とし、晝を夜陰といたすのはこの世界又別だ、サ、早く來るが好い……ヲイ甚助早く來い甚助。』甚助々々といふので櫻井甚助氣にして、甚『大きな聲をしやアがつて甚助々々つて吐鳴りやアがる。色廓へ來て甚助てえ名は人聞が惡いのも拘はねえど……尤も乃公の名が餘り好い名ぢやアないからな……。』又『コレ甚助……。』甚『先生貴郎大きな聲をして甚助〳〵ツて、吐鳴らなくつたつて好いぢやアございませんか。』又『なぜだ甚助、其方の名が甚助だから甚助といふに不測はない、ナア甚助……。』甚助『意地に掛つて御呼びなさる。』又『好いぢやアないか、何もそんなに氣取らなくつても好いや甚助……。』甚助『亦云ひなさる。』又『時に何處で遊ばうなア。』甚『何處でも好うございます。』又『ぢやア九軒の吉田屋へ行かう。』とう〳〵土地一等の九軒の吉田屋へ上りました。仲居がそれへ出て、仲『好うお入來、どうぞ此方へお通りを……。』と奧の廣間へ通しまして、仲『旦那はん宜うお入來……何處やらにお馴染の太夫さんがございまするか。』又『ア仲居吾々等は始めて參つた者、どうか面白い遊びをいたしたいから、汝周旋でして呉れ、時に其方に聞くがこの新町隨一の傾城は何といふのが、一番の太夫ぢや。』仲『

夫はモウ井筒屋の井筒太夫と申しまするが隨一の太夫さんでございまする。』又『ヲ、さうか、その井筒太夫といふのは拙者が買ふ、又右衛門が買ふによつて、井筒太夫をこれへ出して呉れろ……。』仲『井筒太夫をお揚げになりまして、上のお揚げになさいますか、中のお揚げになさいますか、それとも並のお揚げになさいますか如何になさいます。』又『ハ、ア上の揚げといふとどういふんだ。』仲『上の揚げと云ふのは藝子が三十八舞子が三十八……鳥渡六十八程これへ上りまするで。』又『成程六十八……勇しいなア、中の揚げといふと。』仲『是は二十八に二十八、四十八まゐります。』又『ハ、ア四十八か、並の揚げといふのは……。』仲『並の揚げと申しますと井筒附の者が五人に五人居るによつて十人程まゐりますので……。』又『十名ばかり揚げたつて淋しくつて不可ねえ、上の揚げが宜からう、六十八揚げて呉れろ。』甚『六十八なんか揚げられて堪るもんぢやアございません……並の揚げで宜い。』又『コレ〳〵甚左衛門吝嗇のことをいふない、かういふ處へ來たら非凡た遊びをしなくつちやア人に話しが出來ねえ、並の揚げなんぞが出來るものではない上の揚げにしろ、金子の高下は拘はない。』甚『人の金だと思つて嗜きな誤托をいふ奴だ……どうか並の揚げにして貰ひたいもので……。』仲『左樣なれば中を採りまして中の揚

げといたしませう。』又『ちやアマア中の揚げで不承をして遣らう。』仲『時にお連方御二方はどのやうな。』又『こんな奴にはスベタ女郎でも買はして置け。』仲『左様なら好い太夫さんをお周旋をいたしませう。』と仲居は下ります、ところへ肴や酒を運ぶ、藝者『旦那はん今晩好うお入來……。』舞子『旦那はん今晩好うお入來……。』甲『旦那はん今晩……。』

乙『旦那はん今晩……。』とゾロ〳〵〳〵藝妓や舞妓が這入ツてまゐります、又『サア騒げ〳〵。』とドン〳〵抜ける程の大騒ぎ、又『ア、面白い甚左衛門饅頭を遣れ、祝義を遣らんけりやア不可んものだ。』甚『饅頭なんぞは好うございます。』又『吝嗇いことをいふな饅頭を遣らんけりやアならんもんだ……これ〳〵藝者ども彼處にゐる色の淺黑い團栗眼の奴が持つて居る紙入は乃公が預けて置いたのだが、彼奴に持たして置くと祝義が渡らんからあの紙入を持つて來い。』出過ぎた藝者が二三人立つたから堪らない、甲『旦那はん貴郎の持つて居る紙入は那方の旦那はんの紙入だ、出しなされ、サア出してお吳れやす。』と手取り足取りとう〳〵奪つて、乙『此品かいなア。』と又右衛門に出しました、又『ウム此品だ、サア饅頭を遣る。』といつて悉皆金子を撒散らして、又『ア、好い心持だ、胸がせい〳〵する、甚左衛門、甚『然うでせう……人の金子だもんだから腹臟なく使やアがつて、酷いことをしやアがる。』藝『モシ檀那はん、貴郎が檀那はんに相違ありまへんが彼處の御二方は何でヲスいな。』又『彼等か……彼等は乃公の家來だ。』藝『ハア御家來さんでヲスか、どうも分らんなア。』又『何が分らん。』藝『檀那はんが穢い着物召して、御家來衆が大い美麗な着物着てゐなさるのは如何な譯でヲス。』又『ア、これか……これはな、かういふ譯だ、彼奴等は未だ上等の遊びをいたした事がないから、上等の遊びをして見たいといふから、そんなら乃公が暫間で今日は貴郎を檀那にして連れてつて遣るから、身拵をどうかしろといつたらんだから、此奴等ア着類を損料で借りて來たんだ、乃公の紙入を持してな……損料物だからあんな美麗な着物なのよ、乃公は今日はわざ〳〵寢衣を着て來たのだからこんなに穢ないのだ、ところが其方達がどう思つたか乃公の事を檀那はん〳〵と云ふので、自然と乃公の旦那が露見をして那奴等の化の皮が剝げちまつた理由だ。』藝『ア、左樣か、定めてさうぢやらうと思つて居りました、穢い着物を着てゐやはつても旦那はんは旦那はんだけの威があるさかい、どのやうな美麗な衣物を着やはつても、家來は家來だけに何處やら卑しいなア。』甚『オヤ〳〵酷いことをいやアがる、錢を使つて卑しいまで聞きやア澤山だ……。』とぷん〳〵と怒つてゐるのを、甚助『兄上我慢なさい、その代り

今に返報を充分して遣りませう。』と慰めてゐる、又右衛門も、又『吝ん坊のこの兄弟が、乃公ゝ女郎買に連れて來るからには、何か仔細がなくては叶はぬ。』と受けたる酒は盃洗に翻して酔つたる容子をして寢て仕舞ひ、又『どうか夜の内に容子をと、女郎屋の者に就いて探らせると途中に一人待受けてゐる者があるといふ、又『さてはさうであらう。』充分に又右衛門ハ組をして、甚左衛門の計略に乘つたる容子をなして七ツ(午前四時)に妓樓を立出で、廣教寺の土手に差しかゝるところへ、豫て待受けたる竹内玄丹一刀を以て不意に擊つてかゝるといふ、いよ〳〵暗討合の件りと相成ります………。

第十六回　廣教寺暗仕合

さて又右衛門その夜は櫻井兄弟に澤山の金錢を費消せまして、固より甚左衛門甚助は翌朝夜の明けん内に又右衛門を曳出して、途中に竹内玄丹が待受けてをりましたるによつて櫻井兄弟起上つて又右衛門の寢てゐるところへまゐりまして、甚『エ、先生、モウ六ツを打ちました、夜も程なう明けまするから戻りませう。』又『餘まり早いぢやアねえか、それに太夫が惚れて居てこの通り首ッ玉へ噛り付いて放さないから、乃公は流連だ。』甚『そりやア先生不可ません、流連なぞをするのは下等の客がする仕事で又引歸へして來るとしませう………ヨ、太夫和女も起して呉れなければ困るぢやアないか………。』井備『モシ旦那はん六ツを打ちましたヨ。』甚『サア先生………。』甚助『エ、先生。』又『仕樣のない奴だ、女郎買振られた奴が起し番、といつて嫌られるといふと朝早く起きあアがつて五月蠅つて不可ねえ、サアそんなら歸らう、勘定はどうだ。』甚『エ、勘定は悉皆してありますから宜しうございますが先生お準備は………。』又『ア、モウ充分出來た。』甚『左樣ならまゐりませう。』○『毎度御贔負樣………又御近日………。』と九軒の吉田屋の家を出ました、又『兄弟未だ暗いぢやアないか、モウ六ツを打つて仕舞つたかい。』甚助『此夜の明方といふものは少し暗いもので、直きにパツと明るく成りますからサ行きませう。』又『さうか………コウ〳〵和郎達は昨夜どんな鹽梅だつた。』甚『イヤモウ酷い目に逢ひました、孫子の代までも女郎買などはするもんぢやアありません。』又『振られたな、全躰其方達は優待る柄ではない、中にも弟なぞは名が甚助だから、女郎買に優待る筈がない。』甚助『先生名が甚助だからといつて優待ないとは限りません、全く和郎が惡いのだ、家來々々、甚助々々つて、大勢の中で以て慘酷い取扱ひをなさいましたもんですから、そこで私の相方が私を嫌つた

ので………。』又『篦棒奴どんなに乃公が惡くいつたつて女が貴樣に戀着てゐりやア振られる道理があるものか、惚れて居なけりやア貴樣一人で往つたつて矢張り振られる………乃公なぞを見ろ、井筒太夫が首玉へ嚙り付いて放さなかつた。』甚助『有難い仕合………。』又『其方が謝辭を述べるには及ばん、和郎お家はんがあるかといつたぜ』甚助『へエー。』又『乃公はそんなものはない……そんなら和郎はんのお家はんになりたいとかういふから、それでは乃公が身受けをしてやらうと約束をして來たから、貴樣に金子を借りて、あの女を受出すよ。』甚『宜うございます。』又『あの女も宜いが、しかしア、酒が嗜きぢやア不可ん、乃公が嫌だといふのに枕許へ酒を置いて口を割るやうにして飮ませやアがつて、未だフラ〳〵ふら付いてゐる、どうも飮んぢやア不可ん……未だ夜が明けんな。』甚『こりやア飛んでもない事をしました、先刻告たのは七ツで、未だ六ツ前と見えます、私共は振られたもんだから時ばかり勘定をしてゐてとう〳〵一時間違へて仕舞つた。』又『さうだらう、さうなけりやア、モウ夜が明けにやアならぬと思つて居たんだ、そんなら又戻つてあすこへ往つて寢よう。』甚助『マア先生お待ちなさいまし、こゝまで折角來た奴を又引戻すといふも大變な譯、モウ程なう夜が明けますから………サア廣敎寺の堤へ掛つて參りま

した。足元が惡うございますから氣を注けてお越なさい。』又『甚助其方先へ立つて行け、甚左衞門其方は後に來て呉れ、乃公は中央へ這入つて行くから………。』と兄弟を前後にいたして又右衞門中に入り、又『大概此の邊に曲者が出るであらう。』と左右へ心を配つて參ります、先へ行く甚助が、甚助『竹内か。』甚『櫻井、首尾はどうだ………。』甚助『上首尾〳〵充分に醉つてゐる、小指で突いても倒れさうだ、巧く遣つて下さい。』甚『承知した、暗いところだによつて萬一間違へて貴公の兄貴を討つやうなことがあると不可んぜ。』甚助『こゝへ來るのが荒木で、其次が兄哥だから其覺悟で遣つて下さい………。』又『ヲイ〳〵甚助そんなに早く往つちやア不可ん、モ少し乃公と一緒に密着て歩いて來て呉れろ。』甚助『アノ聲が又右衞門の聲だ、好いかい聲を便りに討つてお呉れ、俺がこゝで言葉を掛けてゐるから………ア、痛、、、。』又『甚助どうした………。』甚助『先生こゝに樹の根が出て居て其奴へ躓いて倒れました、足搗の惡いところだからお氣をお注けなすつて下さいまし。』又『ナニ樹の根が出てゐる右の左か左の方か………。』といふ聲を便りに竹内玄丹金剛兵衞盛尚の一刀を拔くが否や、又右衞門の頭面を臨んで、甚『エイ………。』矢聲と諸共に打つてかゝりました。豫て毅村もかくあらんと思ひしゆゑ、手許へヒラリ飛込んだる其速業

は電の如く、又『ヤツ……。』と竹内へ引組みました。玄丹も組付かれてエイヤ〱と爭つてゐる内に、堤を片足踏滑らしましたから兩人組んだまゝ堤下へゴロ〱〱〱落ちたと見えて跡は寂寞としてをります、上に居る櫻井兄弟、甚『甚助どうしたらう。』甚助『さうさ、組んだまゝ土手下へ落ちたやうだネ。』甚『玄丹が巧く又右衛門を討つて呉れゝば好いがノウ。』堤下を覗いて見まするとヒラリ〱と火が見えます。』甚『火が見えるぜ、弟……又右衛門を先へ呼んで見ろ、竹内を呼んで萬一又右衛門が存命てゐた時には、此方どもの企みが露見をいたして都合が惡いから、荒木を先きへ呼んで見ろ。』甚助『ヲーイ……ヲーイ……先生何か出たやうでございます、何でゲスな、先生ォーイ〱又右衛門先生……。』と上から聲を掛けると、又『ヲイ〱櫻井、早くこゝへ來て見て呉れろ、妙なものをこゝで踏潰して仕舞つたから……。』といふ聲が荒木の聲でございますから、櫻井兄弟、甚『オーヤオヤ竹内奴踏潰されて仕舞やアがつたかヤレ〱……。』と是非なく堤下へ降りて見まするさ、竹内の上に馬乗に跨つた又右衛門、腰から煙草入を出し、前口のところへ入れて燧石と燧鎌を持つて、カチ〱火を打擦してをります、その火が上から見えたので、脂下りにパクーリ、パクリと煙草を飲んでゐる、又『兄弟こんな野郎が突然に乃公に斬つてかゝつたから、今組伏せたまゝ夜が明けてからこの野郎の御面相を拜見して遣るんだから、夜明まで少しこゝに待つてゐて呉れ。』といひながら煙草の吹空を玄丹の耳の中へプッと吹込んだ、イヤ熱いの熱くないのといつて竹内首を振つて苦しがつてゐる、又『サ兄弟和郎もこゝで一服飲まつしやい。』甚助『先生愍然ぢやアございませんか、耳の中へ吹殻を入れるのは、殺生だから勘忍してお遣んなさい……屹度こりやア人違ひか何かで先生に向つたんでせう……コレ和郎人違ひだらう大方……アレ先生人違ひだつて合點々々をして

をる樣子でございますから、助けてお遣んなさい………。』又『そりやア助けて宜ければ助けまいものでもないが、譬へば人違ひにしろ、突然に眞劒を以つて斬付けたる奴、面を見た上でなければ放せん。モウ暫時待て。』といふ内に東天が白んで參りました樣子、又『サア東の方が白んで來た、ドリヤ一つ御面相を拜見いたして遣らう………。』と俯伏になつてゐる竹内が襟髮を掴んで顏を篤くと眺めてゐたが、又『イヤア………其方は日向國法華嶽山峰の藥師に居つたる山賊の張本、竹内玄丹ぢやな。』といはれて見れば竹内にも覺へがある、玄『南無三寶。』又『こりや未だ汝は其心が失せをらんか、さうだ拙者丑之助と申した頃、師匠重兵衛光吉公が眼病平愈の代參として、日向國法華嶽山峰の藥師へ往つたる時、殺さうとは思つたが、なれども賊に似氣なき不双の技術、殺すに忍びず、意見をいたし助け遣はし、惡き心の出でたる時は水鏡になりと己が姿を寫し、善心に立歸れと汝が額へ付けたる一文字の傷、未だ消はいたすまい、其後拙者江戸表牛込神樂坂へ道場を構へたる時面小手竹刀を持ちて我道場前を通りしことを見掛けたり、あの時助けて置いたればこそ、かく江戸表にて一流の武藝者となつて往來をしてゐることなるかと、陰ながら悦んでをりし甲斐もなう、吾に對して白刄を持つて手向ひいたせしこそ憎さも憎し、さりながら此度は物取強盜に出でたるにては萬々あるまい、汝何者にか賴まれたのに相違ないが、強てこれを問ば又迷惑をする者が外にあるで有らうノウ櫻井。』兄弟『ヘイ。』又『されば何にも聞くまい、兩度ぢやによつて助けて遣る、しかし三度この又右衛門に抵抗いたさば其時は助けて置かんぞよ、以後の懲戒かうして吳れる。』と小柄を拔いて竹内が押伏せ、眉間へ縦にスウと引いて血汐を拂ひ、矢立の墨を其中へ流し、日向國法華嶽山峰の藥師で一本。廣敎寺の土手で一本。玄丹額へ十文字の刻印を打たれて、耶蘇の看板髣髴なものが出來上つて仕舞つた。竹内鼠舞をしてその儘に逃出す跡を見送りて、又『櫻井兄弟、あれは元泥坊であつた奴だ、險呑千萬な奴が出たもの………しかしマ、無事に落着で此上結搆なことはない、これも井筒太夫に可愛がられた罰だな。』甚『さうでございますかな、佛賴んで地獄へ落ちるとは此事………。』又『ナニ。』甚『イヱ此方の事………サア歸りませう。』又『歸らう〳〵。』その儘に天滿の大和屋の貸座敷へ櫻井兄弟は戻り、又右衛門は中の島の糸屋七五郎の家へ戻りました。兄弟は家へ歸つて『ホツ………。』と一息、甚助『ア、酷い目に逢つた、兄上竹内玄丹と云ふ奴はモウ少し強い奴だと思つたら、どうも不可。』甚『ナニ竹内が弱いのぢやアない、又右衛門が馬鹿強いのだ、どうしたら好からう。』甚助『兄上私がモ